
虚無と紅翼の使い魔

yu-ki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚無と紅翼の使い魔

【Zコード】

N1541V

【作者名】

yu-ki

【あらすじ】

テンプレで行った先のゼロの使い魔の世界。チート能力持ちの主人公がゼロの世界を駆け巡ります。基本アニメを遵守。作者はw.i.kiとアニメが頼りです。

ゼロの使い魔

季節は春。

ここ、トリステイン魔法学院では一年生の使い魔召喚の儀式が行われていた。

「これで全員ですか？」

生徒達を監督していた先生、ジャン・コルベールは生徒達に確認する。

「いいえ、まだミス・ヴァリエールが・・・」

先ほど、サラマンダーを召喚したキュルケが言つ。

そう言つと生徒達とコルベールは奥にいたピンク髪の少女に注目する。

注目された少女、ルイズ・フランソワーズは苦虫を潰した様な顔をして、広場の中央に立つた。

「昨日私にあんなこと言つたんだから、この子より凄い使い魔を召喚して見せるんでしょうな？ルイズ？」

キュルケがルイズを挑発する。

その言葉を聞いて、ルイズは昨日キュルケに言つた言葉を思い出し

た。

『私、召喚魔法【サモン・サーヴァント】だけは自信があるの！あんた達じゃ束になつても適わないくらいの、神聖で、美しく、そして強力な使い魔を呼び出して見せるわ！』

ルイズの頭の中で昨日のやり取りが思い出される。

（「う・・・あんな事言つんじゃなかつた・・・）

ルイズは後悔するが、今更あの時の言葉を撤回する事だけは自分自身の貴族のプライドが許さなかつた。

「と、当然じゃない！」

プライドの高い彼女はそう言つて見栄を張るしかなかつた。

「ゼロのルイズか・・・」

「何呼び出すんだ？」

「呼び出せっこないでしょ？ また爆発してお終いよ。」

見栄を張るルイズに対し、周囲の生徒は陰口を叩く。

そんな中、ルイズは『サモン・サーヴァント』の詠唱に入る。

「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よー」

「「「「「ー? ? ? ? 」」」」

ルイズの独特的の詠唱に一同首をかしげるが、ルイズの詠唱は止まらない。

「神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！」

私は心より求め、訴えるわ！我が導きに！答えなさい！！」

詠唱が完成し、杖を振るう。

ドカーン！！

その瞬間、強力な爆発があたりを包み込む。

「ゲッホ、ゲホ、やつぱこ」うなつたか！」

「やつぱり失敗じやないか！」

ルイズが起こした爆発に、周囲が非難する。

しかし、爆発で怒った煙が晴れると爆発が起こった先に一人の男性が倒れていた。

「おい！アレ見ろよ！人だ！」

「あれは・・・平民？」

「ああ、あの姿どう見ても平民だよ！」

男性を一番近くで見ていたルイズは、自分が呼び出したのであらうつ男に失望していた。

「いや、こんなのが……神聖で、美しく、そして強力な……」

「あんた、誰？」

(えつ? なに? 何だつて?)

俺は目を覚ますとなにやら見覚えのある人物が目の前にいた。

「言葉が通じないの? ビルの平民?」

田の前のピンク髪の女の子は不機嫌そうな顔で俺に質問してくれる。

（つて髪がピンク！？）んなの地球じゃありえねーだろー。コスプレ団体の集団か？）

俺が考え事をしている時に、ピンク髪の女の子に赤髪の女の子が近づいてくる。

「さすがね。大見得切つたことはあるじゃない。まさか平民を呼び出すなんて・・・」

おかしそうに言つ赤髪の女の子。

「うるさいわね！ちよつと間違えただけじゃない！」

そつピenk髪の女の子が言つと、周りの人たちが一斉に笑い出す。

その笑いに耐えられなくなつたのか、ピンク髪の女の子は頭がはげている男性に何か言つていた。

「ミスター・コルベール。」

「なんだね？」

「あの、もう一度召喚させて貰おー。」

「それは出来ない。」

「何故ですか？」

「この儀式は、メイジにとって神聖なもの。

それをやり直すなんて儀式そのものに対する冒涜ですぞ。

君が好むと好まざると、この少年は君の使い魔に決ましたのです。」

「コルベールと呼ばれた男性は、ピンク髪の女子に言つ。

（コルベール？ どうかで聞いたことあるよつな・・・？）

「でも平民を使い魔にするなんて聞いたことがありますん！」

「平民であるうと向であるうと、例外は認められません。さあ、儀式と続けなさい。」

「ええ～、こいつと？」

そつまつペインク髪の女子は持つていた杖で俺をつついた。

「早くしたまえ！ そうでないと君は本当に退学になってしまいます。ミス・ヴァリエール。」

コルベールと呼ばれた男性は、ヴァリエールと呼んだ女子を叱つた。

「わかり・・・ました。」

ヴァリエールと呼ばれた女子は渋々返事をして俺に向き直る。

（コルベールに、ヴァリエール？ それに俺のことを使い魔と呼ぶこの儀式。まさかこれって・・・）

そんな考えをしていの内に、女の子は俺に近づく。

「あんた、感謝しなきよな。普通貴族にこんな事されるなんて一生ないんだから…」

そう言いながら杖を構える。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

（やつぱりゼロの使い魔の世界か！何でこんな場所に来たのかは知んねーけど、こんな死亡フラグ満載の世界にいてたまるか！つーかオ人はどうした！ルイズの使い魔なんかにされたら殺される！）

「五つの力を司るペントゴン。この者に祝福を与え、我的使い魔となせ。」

（不味い！詠唱が終わる…このままじゃ『コントラクト・サーヴァント』が完成しちまう。それだけは何としても阻止せねば…）

だが、その思考が間違いだった。

俺が逃げようとしたらルイズの顔がすぐ目の前にまで迫っていたのだ。

「ちよま…おれむ んぐ！」

「んつ…」「

かわされる一方通行な契約。

『コントラクト・サーヴァント』は完成した。

「つむ。無事に『コントラクト・サーヴァント』は成功しましたな。

」

（しまつたー！考え事してたら逃げるタイミング失つたー！）

ドクンー！

その瞬間、俺の中で何かが脈を打つた。

「ぐつー！がああああーー！体が・・・熱いーーー！」

あまりの痛さに俺は転げまわる。

（くつそーー両手に頭、それに胸が焼けるよつだー！これつて4つのルーンフラグだよな・・・）

俺はルーンの痛さに耐え切れず、闇の中に意識を落としていった。

~~~~? ? ? side end~~~~

「ぐつ！ がああああー！ 体が・・・熱い！ ！ ！」

少年の体が少し発光し、ルーンが刻まれていく。

「大丈夫よ。今使い間のルーンが刻まれているから。死ぬことはないから安心なさい。」

痛みで転げ回っている少年にルイズは声を掛ける。

やがて光が止み、少年の体に使い魔のルーンが現れる。

「使い魔のルーンが3つ？それにこのルーンは今まで見たことのないルーンだ。」

「コルベールはそう言つと、少年に刻まれてゐるルーンをスケッチする。」

「ああ、皆さんこれで使い魔の召喚の儀式は終わりです。今日はこれ以上授業がないので、皆さん使い魔と親睦を深めると良いでしょう。」

コルベールはそう言つて生徒全員を解散させる。

「ミス・ヴァリエール。この少年を君の部屋まで運びます。いいで

すね？「

そう言ってコルベールは氣絶している少年を見る。

「はい。分かりましたコルベール先生。よろしくお願ひします。」

魔法が使えない自分に對しての配慮だつと、ルイズは思い許可を出す。

そして、少年を魔法で浮かせたコルベールはルイズの部屋に向かい、ルイズもまた先生と自分が呼び出した使い魔を自分の部屋に案内する。

この日、後に『虚無のルイズ』と呼ばれる事になるルイズ・フランソワーズ・ル・プラン・ド・ラ・ヴァリエールと、巻き込まれた地球人、しかしその後に『紅の墮天使』または『紅翼の使い魔』と呼ばれる事になる神代護の二人にとつて最低にして最悪の出会いであった。

## ＊口の使い魔（後書き）

初めまして。畠さんの作品を見て自分もと迷って書きました。

初心者ですが、これからよろしくお願いします。

基本方針はアニメ通りやれたらいいなと思っています。

## 使い魔の能力

青く輝く美しい星『地球』。

その中に、『日本』といつ国がある。

その首都『東京』、彼、かみじよめむる神代護は東京都の少し外れにある住宅街の中を歩いていた。

静かな住宅街を歩いていた少年は、学校帰りで自分の家に帰る途中だった。

「あ～あ、進路どつすつかな・・・」

歩きながら今度の進路を考えている時、護はいつも通る横断歩道で信号待ちをしていた。

「こらーー待ちなさいーーきなり道路に飛び出ちやだめって言つてる  
でしょーー！」

横断歩道の近くにある公園から女性の怒鳴り声がする。

護は、ふとその公園に眼をやると、小さな女の子が公園を飛び出し、道路に転がるボールを追いかけていた。

（危ないなあ・・・

まあでも、この辺は今の時間帯車なんてめったに通らないし大丈夫か・・・）

そんなことを考えていると、女の子の奥の道路から一台の車がこちらに向けて迫って来る。

「危ない！！！」

俺はそう叫んで女の子目掛けて走り出す。

迫る車の運転手はまだこの通りにいられないようだ。

俺は急いで女の子の元に駆け寄り、女の子を公園のほうへと突き飛ばす。

「キヤー！」

(間に合つた!)

俺は女の子の無事を確認すると、車の方を見る。

車の方も俺に気が付いたのか急いでブレーキを踏んだ。

しかし、ブレーギのタイミングがあまりにも遅すぎた。

‡ ‡ — ! ! . .

イヤホンがアスファルトをこがす音が辺りに響く。

俺は、迫り来る車に対し絶叫を上げる。

ピカ一ツ！

車と俺がぶつかりそうになる直前、俺は突然現れた光に飲み込まれた。

そしてその後、ぶつかるはずだつた護は姿を消し、護の親は捜索願を出したが、護は一向に見つからなかつた。

その後、地球において護の姿を見たものは誰もいなかつた。

マモル Sides

『政治小説』

俺は自分が車で轢かれる寸前の夢を見た。

いや、アレは現実だった。それで俺はゼロの使い魔の世界にやつてきて・・・

「そうだ！ゼロの使い魔！！」

記憶がはつきりして、ついそう叫んだ。

「誰がゼロですか？・・・」

そんな声が聞こえ、俺は声のするほうに顔を向ける。

するとそこには鬼の形相をしたルイズが立っていた。

「げつ…夢じやないし・・・つてそういうじゃない。ごめんこっちの話だ。それよりここはどうですか？…というより言葉分かれます？」

（確かに原作じゃ、最初は言葉が通じなかつたような・・・）

俺は不安になつてルイズに聞く。

「通じてるわ。ここはトリステイン魔法学院よ。あんたそんなことも知らないの？よほど知性のない平民なのね。」

（うう、この物言い腹立つなあ・・・）

「そ、そりですか…・・・取り合えず自己紹介を。私は神代護。こちらの世界ではマモル・カミシロ。マモルが名前でカミシロが家名になります。」

「あら、思つてていたより礼儀正しいのね。私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。」

あなたの「主人様で、私を呼ぶときは」主人様と呼びなさい。」

そう言ってかなり上から田線でルイズは命令する。

（ちつ、分かつてはいたけど殺すぞこの女。マジムカつぐ。才人もよく我慢したな・・・）

「ちょっとー返事へりこしなさこよー。」

「何で？俺はまだルイズさんを主人と決めたわけじゃねーぞ。つーかどうこいつとか説明してくれても良いんじゃない？」

知っているけどこいには知らない振りをしておく。そのほうが動きやすいだろ？

「あんたは今日、この私に使い魔として召喚されたの！平民が貴族の、それも公爵家の息女であるこの私に呼び出されたのだから少しは感謝なさい！」

「ふざけんな馬鹿が！勝手に呼び出してんじゃねーよー！つかどんな証拠があつてそんな事言えんだよー。」

さすがにここまで馬鹿にされるとキレる。思わず素の対応をしてしまった。

「なつなつなつ・・・なんて口の聞き方をする平民なのかしら！－！いいわー！そこまで言つなら教えてあげる。使い魔の証拠はねーあんたのそのー両手とー額にあるルーンの文字よー。」

これが『コントラクト・サーヴァント』をした証拠！－！使い魔である証なんだからーーー。」

怒鳴りながらルイズは鏡を俺に見せ付ける。

鏡の中に「写る俺の額には、『神の頭脳・ニヨズニーテールン』のルーンがしつかり刻まれていて、両手を見たらそれぞれ『神の左手・ガンドールヴ』と『神の右手・ヴィンダールヴ』のルーンが刻まれていた。

（うつわ・・・マジかよ。めっちゃチートじゃん俺・・・しかし、ルイズにこき使われるのは癪だし、いつそのこと原作破壊しちまおうかな・・・）

なんて危ないことを考えていたら、服が投げられた。

「それ、洗つておいてね。あんたを怒鳴り散らしたら疲れたわ。今日は遅いから私もう寝るから。服は明日までに洗濯して、明日の朝は新しい服を用意しておきなさい。素直に『言つ』とを聞いていれば、『飯はつけやんとあげるから。』

早口に『そつ』言われ、部屋の明かりが消される。

（これは、能力確認のチャンスかも・・・）

「ああそうですか。分かりましたご主人様。それでは私は貴方様のお召し物を洗濯に行つて来ます。本日はそのまま外で過ごしますので失礼します。」

まったく感情のこもっていない言葉をルイズに言つて、洗濯籠に入つているルイズの服を籠事持ち部屋を出る。

(よし、まずは状況確認だ。)

「私、スフレを作るのが得意なんですよ。」

「それはぜひ食べてみたいな。」

「まあ、本当ですか?」

「勿論だともケテイ。君の瞳に嘘はつかないよ。」

「ギーシュ様／＼／＼

「君への思いに裏表などはありはしないんだ。」

ルイズの部屋を出て、しばらく歩いていたらそんな会話が聞こえてきた。

(あれは、ギーシュ?一緒にいるのは誰だ?名前がよく聞き取れなかつた。  
まあいいか。無視して早く能力の確認をしよう。)

俺はそのまま横を通り過ぎようとする。

「ん?君はルイズが呼び出した平民じゃないか。こんな所で何をし

てこるんだ？」

「あ、今日の儀式で……一年生の間でも話題になつてこました

わ。」「あ、ついで俺を見つけたギーシュは、そのまま俺に話題を掛けた。

ギーシュに口説かれていた女子も俺を見つける。

「彼がいきなり氣絶して、僕らは大変だったんだ。」

「そつ言われるが、俺は無視する。正直ギーシュはあまり好きじゃない。

「待ちたまえ。」

無視して行こうとする俺を、ギーシュは呼び止める。

（ちつ、無視してくれれば良いものを……）

「はい。何でじゅか？」

「平民が貴族の手を煩わせておいて、礼の一つもないのかい？」

（こつも上から田線か……この世界の貴族はやっぱ好きになれないな。）

「ああやつでしたか。それほどじいじ親切に。ありがと」「あこまでした。」「

極力無表情でお礼を言つた。勿論感謝など一切こめていない。

「それでは私は失礼します。これ以上お一人の邪魔をするのも忍びないんで。」

そう言つて俺は出口に向けて歩き出す。

その後よひやく出口に出た俺は、人気のない場所まで移動した。

「よし。これでようやく能力の確認が出来るな。」

思わず声に出してしまった俺は、すぐに集中し始めた。

（取り合えず現状確認。今俺に刻まれているルーンは4つ。  
『神の頭脳・ミョズニトニルン』  
『神の左手・ガンダールヴ』  
『神の右手・ヴィンダールヴ』  
『神の心臓・リーヴスラシリル』  
の全てのルーンが俺の中にある。

まず一つづつ確認していく。

『神の頭脳・ミョズニトニルン』は確かに魔道具が扱えるんだった

な。

それで確かに『神の右手・ヴィンダールヴ』が、全ての乗り物、または幻獣が扱えたはず。

次に言わずも知れた『神の左手・ガンダールヴ』。これは説明は良いだろう。

となるとやっぱり、『神の心臓・リーヴスラシル』だよな・・・

「これは原作じゃ、記すことも許されないと書いてあつたし、ぶつちやけどんな能力か想像がつかん。

二次創作によく出る『自分の分かる範囲の魔法や能力が全て使える』とかだったら楽だつたのに・・・

まあ人生そんなにうまく行くわけないか。」

そう言いつつも自分の発言に期待して、ハガレンの練成をやってみる。

「これで剣が出てきたら笑っちゃうよね〜・・・

自分で言つて虚しいが、試しにやつてみることにした。

パン

手を合わせてから地面上に手を着く。

バチバチバチ

すると、激しいスパークと共にイメージ通りの剣が出てきた。

「はい?」

さすがにこの出来事には驚きを隠せなかつた。

俺はためしに別の「」とをやつてみる。

「影分身の術！」

ナルトに出てくの影分身をやつしてみたが・・・

ボン

煙と共にもう一人の俺が隣に立つていた。

成功である。

「マジかよ・・・ああごめん”俺”。せつかばれてもうつて悪いけど、もう用すんだから帰つて良いよ。」

「ああわかった。」

ボン

そつぱつと、すぐに分身体の俺は煙と共に消えていった。

「ああ・・・これはアレも出来るよな。」

イメージ通り出来ると思い、とあるシコーズの超電磁砲をやつてみる。

財布から十円玉を取り、空へと狙いを定める。

「こつけ――――――！」

ド――――ン

闇夜を切り裂かんとする一條の光の槍が轟音と共に夜空を駆け抜け  
る。

「やつべやりすぎた！」

俺は急いでその場を後にして裏庭のほうへと回った。

その後、鍊金術で全自动乾燥機付き洗濯機（バッテリー式）を練成  
し、バッテリーの電気を能力を使って満タンにしてルイズの服を洗  
濯した。

そして、明け方まで能力の確認に時間を費やした。

能力の確認をし終えた翌朝。

俺はルイスを起こそうとしていた。

「ほら起きろ！ 朝だぞ！！」

声を掛けながら川イヌの体をゆする。

—  
h  
—  
h  
—  
—

「いい加減・・・起きろ――――――――――――――――――――

「わざわざ、なに? 何?」

大きな声を出した俺に驚いて、ルイスが飛び起きる。

セシと起きたが  
セシと朝たそ  
單にアホなおはなし

ええおはよ」「あんた誰?」「

( 昨日勝手に呼び出しあおいても、忘れたか？ ）

「昨日お前に呼び出された、神代譲。自己紹介しただろ？もう忘れただのか？」

そう言いながら俺はルイズに着替えを渡す。

「ほり着替えた。これで良いだろ？俺は外で待ってるからちゃんと着替えるよ。」

そつと俺はドアに向かう。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよーあんたが着替えさせなさいー！」

いきなり無理な命令をするルイズに呆れ果てる。

「はあ？馬鹿かお前？俺はこれでも男だぞ？恥ずかしくねーのかよー・・・」

「おとこっぽい魔に性別も何もないじゃない。」

至極当然のように「ルイズにカチン」ときた。

「ほう、お前は男の俺に着替えをさせても恥ずかしくないのか。」

「お前つて言わないでー時間がないんだから早くなさいー！」

「わかった。」

そつとルイズの着替えを受け取る。

「ああそぞうじ主様。着替えの途中手が滑つて胸に手が当たつても問題ないよな？それで弾みで胸を揉んでもこれは事故になるよな？」

絶対にしない事故なのだが、あえて言つ。極力意識せずに言つのも忘れない。

そして一步、また一步とゆっくりとルイズに近づいていく。

「ななな何言つてゐるよーあんた何考えてるの?」、「主人様に欲情するわけ?」

「さあどうだらうね?少なくとも俺は君に女性の魅力を感じているのは事実かな?」

やつ言いながらひそかに近づいていく。

このときのルイズ嬢、顔を真つ赤にしていただけ記しておいた。

「そそそ、そうだ。やつぱり自分で着替えるわ。貴族たる者、甘えてばかりじゃいけないわね。」

テンパリながらルイズは言つ。

「そつか。なら早く着替えろ。」

その言葉を聞いて、ルイズに持つていた着替えを渡し部屋を出る。

「ああそつだルイズ。さつきの言葉だが・・・」

部屋を出る際にルイズに問いかける。

「な、なによ?」

「アレは嘘だ。だから気にするな。」

そういつた瞬間、ドア自掛けでベットに置いてあつたルイズの枕が投げられた。

（おお、こわ～）

部屋の外でルイズの着替えを待つていると、赤髪の女の子に声を掛けられた。

「あら、そこの貴方。何をしてらっしゃるの？そこはルイズの部屋よ？」

声のするほうを見ると、褐色の背の高い女性が立っていた。

（こいつ・・・もしかしてキュルケか？）

「ああ私は、ルイズの使い魔をやつている者で、マモル・カミシロといいます。

失礼ですが貴方は？」

予想は出来ているが、確認の為自己紹介をする。

「私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ。キュルケで良いわ。

貴方本当に平民なのね。ルイズが主人じゃ大変じゃない？」

当たり触りのない自己紹介。ギーシュとは違い好感の持てる挨拶だった。

「ええまあ。いきなり（この世界に）連れて来られて、半ば強制的に主従関係を結ばされたんじゃやつてられませんね。」

思いついたことを言ひ。

するとキュルケは腹を抱えて笑った。

「あはは、貴方言つじやない。気に入つたわ。ルイズに嫌気が差したら私の所にいらっしゃいな。」

「分かりました。気が向いたら行きますね。」

「ホント言ひじゃない。」

そんな会話をしていたら、ふいにドアが開いた。

「どうやらルイズの着替えが終わつたようだ。」

「うるさいわね！何騒いでんのよ。つてツェルプスター！こんな所で何やつてんのよー！」

「あらルイズ。朝からずいぶんな！」挨拶ね。ちょっと貴方のところの平民とお喋りしてただけじゃない。」

「うううううさいわね。私の使い魔にちょっとかい掛けないで！」

「もう相変わらずね。それより本当に変なものの呼び出したわね。『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出すなんて本当に規格外ね『ゼロのルイズ』?」

「うひゃー。ほつといて頂戴。」

キュルケの言葉にムスッとした表情になるルイズ。

(つーか変なものつて・・・)

「私はあんたなんかと違つて、一発で成功よ。せつかくだから私の使い魔を見せてあげる。おいで『フレイム』。」

キュルケが自慢そうに使い魔を呼ぶ。

すると、奥から尻尾に火が付いた赤い大蜥蜴がのそりと顔を出す。

「見て?」の尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ? ブランドものよ。好事家に見せたら値段なんか付かないわよ?」

そう自慢げにサラマンダーに手をやるキュルケ。

その様子を見ていたルイズは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「ふふ、じゃあ挨拶もすんだし私は先に行くわ。お先に失礼。『めんあそばせ。お~ほほほ・・・』

高笑いしながら去つていくキュルケに対し、ルイズは悔しいのか体

全体を震わせている。

「くくく、悔しいーーー！なんなのあの女！自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからってこれ見よがしに見せびらかしてーああもうー！」

大体なんであんたが出てきたのよ！ こんな理不尽だわ！ ！ ！」

理不尽なのはこっちです。

「んなのしうねーよ。それより早く行いづぢ。」

ルイズは機嫌が直るまでその場を動かなかつた。子供かよ・・・

ルイズの機嫌が直り、俺達は今、トリステイン魔法学院の大食堂にいる。

ルイズが言つには「これは『アルヴィーズの食堂』と書つりしい。」

巨大なホールには長いテーブルが三つ。まるでハリポタの食堂の風景のようだ。

「はあ～、無駄に豪華だな～。」

あまりの煌びやかな部屋に呆れる。

「IJの学院のモットーは『貴族は魔法をもつてしてその精神と成す』よ。  
だから私たちは、貴族たるべき教育を充分に受けるのよ。  
それにより食堂も貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬ  
の。」

「へえ～・・・」

俺の気のない返事をよそにルイズは続ける。

「ホントなら、平民のあんたはこの『アルヴィーズの食堂』には一  
生入れないんだけど、あんたはあたしの使い魔だから特別よ。感謝  
しなさいよね。」

そう言って威張り散らす。そして、自分の席に着いたのかルイズは  
立ち止まる。

「何やつてんの？早く椅子を引きなさい。本当に気が利かない使い  
魔ね。」

「へいへい。畏まりました。」

そつ俺に言つてるので渋々椅子を引く。

チラッとテーブルを見ると、朝だというのに高カロリーの料理がた  
くさん並んでいた。

（うわ～、こんなに朝から食べると絶対に将来、デブ確定じゃん・・

・

「それで、ルイズ。俺の席どじ飯はどうだ？」

そう言つとルイズは無言で地面を指差す。

「ルイズは貴族しか座れないの。平民のあんたは床よ。」

そうこううるイズに対し、俺はルイズの指の先を見る。

そこには古い皿と、固かつたパンが一つあった。

「あー、ルイズ。もしかしてこれが俺の朝じ飯？」

そう言つて俺はパンを指差す。

するとルイズは頷いた。

（分かつてはいたけど、マジでここまでされると腹立つな・・・  
こうなつたらさつとマルトーネさんとシエスター探して飯の確保をし  
たほうが良いな。）

そう思つて俺は行動に移す。

「ルイズ、悪いがこれじゃあやつてられない。飯確保していくから

また後でな。」

俺はパンを手に取り、ルイズの返事を聞かずにその場を後にした。

『飯をむりうる為に厨房を手指してこると、途中でメイドさんを見かけたので、厨房に案内してもらおうと思ふ声を掛ける。

「あの、お忙しい時にすいません。少々場所を尋ねたいのですが・・・」

なるべく丁寧な口調を心がけてメイドさんと話しかける。

「はー? 何でしう?」

黒髪のメイドさんが振り返る。

「私、マモル・カミシロと申す貴族の使い魔をしてこる者でして、今厨房を探しているのですがどうひりに行けばいいのでしょうか?」

「平民の使い魔さん? ああ! 貴方が噂の使い魔さんですか?」

メイドさんは酷く驚いて言つ。やんなに噂になつてこるのだからつか・・・

「どの噂か知りませんが、『平民の使い魔』と貴族から呼ばれるのは自分ですね。」

「やつぱりーそれで、使い魔さんがどうしたんですか? あつ私、シエスターで言つます。平民同士みじくお願いしますね。」

メイドさんはシエスタでした。

「あ、はい。これからおもろしくお願いします。自分のことやマモルと呼んでください。

それですね、今厨房を探しているのですがどうあるんですか？」

「厨房ですか？あの・・・何か不手際でもありましたか？」

不安そうに聞いてくるシエスタに俺は慌てて言つ。

「いえ！違つんです。不手際とかじゃなくてですね、恥ずかしながら主人にちゃんとご飯を貰えなくておなか空いちゃつて・・・賄いでいいからご飯貰えないかなあ、なんて・・・」

おれひく今の俺の顔は真っ赤になつていてるだろ？・・・

てか、言つてる途中からだんだん自分の境遇が恥ずかしくなつてしまし・・・

「まあそりなんですか。わかりました。私も丁度厨房に戻るといつでしたので、一緒に行きましょう。

こつちです。付いてきて下せこ。」

そう言つてシエスタは俺を厨房に案内してくれた。

シエスタ・・・ええ娘や・・・

厨房に到着した俺は奥にあるテーブルに案内された。

「ちよつと待つて下さこね。すぐに駄い持つてきますから。」

そう言つてシェスターは奥の調理場に消えていく。

しばらく待つてみると、ガタイの良いおっさんが声を掛けてきた。

「おひ。お前さんが貴族の連中に呼び出されたつて言ひ平郎か?」

豪快な声で俺に声を掛けてくる。

「ええまあ。何か色々と尊になつてゐるみたいですね・・・  
おひと、自己紹介が遅れました。私はマモル・カミシロといいます。  
マモルと呼んでください。」

初対面なので笑顔で自己紹介をする。

「マモルか。変わった名前だな。俺はこの厨房でコック長をしてい  
るマルトーフもんだ。よろしくな!」

バンバンと笑いながら肩を叩くマルトーフ。痛いです・・・

「シェスターから事情は聞いてるぜ。何でも飯を貰えなかつたんだ  
って?これから貴族つて奴は生け簀かねー!」

腕を組み頷くマルトーラさんに対し俺は言ひ。

「まあそつなんですけど、このおかげでシヒスタやマルトーラさんで出会えましたから、結果オーライです。」

「なんでえ？俺やシヒスタを探してたのかい？」

「正確にはマルトーラさんだけですけどね・・・

マルトーラさんにこれから食事を頼もうと思つていてなんです。途中にシヒスタに会つてここまで連れて来てもうったんです。いやあ～、本当に運が良かつたですよ。早く見つからなかつたら餓死するところでした。」

はははっと、笑いながら恥ずかしそうに頭を掻いてみた。

すみとマルトーラさんは哀れんだよつな顔で俺を見てくる。

（まずい。『不幸だけど健気に頑張る使い魔』って設定でやつてみたけどを演じすぎたか・・・?）

「お前さんも苦労してんだな。よし分かった。こつでもいいにこに来な！駄いで良くならこつでも飯を食わしてやるー。」

そう言つて泣きながら俺の肩を掴むマルトーラさん。

（何か色々誤解してるようだけど・・・まついいか。）

「ありがとうございます。貰つてばかりじゃ悪いので、自分の時間が許される限りこの仕事を手伝います。いや、手伝わせて下さる。

「

「おおー！良い奴だなお前ーホント良い奴だ！！」

そう言つて野泣をするマルトーンさん。

何か色々間違つて覚えられている気がしなくもないが、まあ概ね気が入つてもらつたので良しとしよう。

そつ愚つていたら奥からシェスターがやつてきた。

「マモルさん、お待たせしました。残り物で悪いんですけどこれをどうぞ。」

そつ言つてシェスターはテーブルに料理を並べてくれた。

「おおー！ありがとうございます。じゃあ、頂きますー。」

そつ言つて俺は皿の前の料理に手を付けていく。

「！」馳走様でした！

俺は手を合わせて挨拶をする。

「美味しかったよシェスター。マジで助かった。ホントありがとうございます。」

すっかり腹が満たされた俺は、改めてシェスターにお礼を言つ。

「いえそんな・・・私は貴族様が手をつけていなかつた料理をお出ししただけです。お礼なんて言わないで下さい。」

「それでもだよ。ここまで料理を運んできてくれたのはシェスタだし、それだけでも俺は嬉しかつたんだ。」

「そんな・・・マモルさん・・・」

謙遜するシェスタを俺は褒めたが、その途端に顔を赤くして恥ずかしかつにしていた。

「それにしても、こんな豪勢な食事を残すなんて貴族つて贅沢だよな。」

「おう。分かつてるじゃねえか坊主。こここの貴族連中はいつも俺の料理を残しやがる。魔法が使えるからつて威張りやがつて・・・」  
だけで威張り散らすなんて考えられねーよ・・・

「うつママルトーさんが愚痴る。

「ううなんだよねえ・・・魔法なんて俺も使えるけど、たかがそれだけで威張り散らすなんて考えられねーよ・・・」

俺も贅同してうつうつと、厨房にいる全員が驚いた顔をする。

「ううですよ。魔法が使えるって、マモルさんは貴族なんですか?」

慌てて俺に確認を取るママルトーさんとシェスタ。

「は？何言つてんの？俺貴族じゃないよ？それに魔法が使えるから貴族つてどう考へてもおかしいでしょ？」

「おかしいのはオメハの方だ！」

「やうですよー！そもそも・・・・・」

さらに荒てるマルトーさんと、若干テンパつているシエスタからこの世界の平民でも知つてゐる一般常識を聞いた。

「へえ、そうだつたんだ。知らなかつた。」

「知らなかつたつて・・・・・マモル様はメイジなんですから知つているものだとばかり・・・・・」

「そうですよ。こんなの俺達でも知つてゐる一般常識なのに・・・・・

そう言つてげんなりした様子で俺を見る一人。

「まあしようがないですよ。昨日この世界に召喚されたばかりなんですから。」

「それはまあ・・・・・」

「やうなんですが・・・・・」

二人は顔を見合させて困り果てる。

「それより、その敬語やめてもらひませんか？メイジと聞いた途端態度が変わったのでびっくりしました。」

「いや、しかし……」

「さつまつとマーティーさんがさうひつ困つた表情になる。

「仕方あひませんよマモル様。この世界ではメイジは魔法が使って、その力で力のない平民を虐げるのが現状なんです。だから私たち平民は、メイジである貴族に逆らえないとです。」

さつまつシエスタの表情が曇る。

「なるほどね……そういうた事情なら仕方ないか。でもだからって俺にまで媚を売る必要はないですよ？」

俺は絶対に貴方達に強要なんかしません。お世話をしてくれるのはさう人に感謝こそすれ、それを仇で返すような真似は絶対に出来ません。だから舐たとも、俺に媚なんか売ひず普通に接して下せ。」

「マモルさん……」

「坊主、オメエ……」

俺の言葉を聞いて、皆感動しているようだ。何故に？

「わかった。オメエがそこまで言つんなら、俺はお前さんを認める。皆もそれで良いよな？」

「さう……」「さう……」

そう言ってみんなマルトーさんの考えに賛同してくれた。

こうして俺は難なく認められえたようだ。

## 決闘フラグ、ゲットだぜ（笑）

「あんた、こんなところにいたのね。」

朝食を食べ終えてしばらぐマルトーさんたちと談笑していたら、ルイズがやってきた。

「よひ、ルイズ。どうしたんだ？」

「どうしたんだ。じゃないわよ。わざと来なさい。中庭に行くわよ。」

いきなり現れて命令を下すルイズ。

反抗しようと思ったけど、口で反抗したらマルトーさんたちにも迷惑がかかると思い、仕方なく指示に従つ。

「あへへへ。わかりましたよ。行けばいいんだろ行けば・・・じゃあマルトーさん。これで失礼しますね。またお会いする日でも伺います。」

「あ。ああ分かった。」

「シエスタもまた後でね。」

「い、いえ、またいらして下さる。」

マルトーさんたちにお礼を言つて、俺とルイズは中庭に向かつ。

「あんたねえ、『主人様を放つて置いてなにやつてんのよー。」

「何つて・・・『飯食べに行つてただけじゃん。それに俺は一応お前に行き先を言つたぞ。』

何故かは知らないが、怒つているルイズに対し反論する。

「つむねをいー使い魔の癖に反論するなー。」

（うわー、むちゅくちゅだこの女・・・）

「つか、あーはいはい。わたくしが悪うござんした。んで、これからどこに行くんだ？」「

これ以上やつても埒が明かないので、先に折れることにした。

うん。俺大人だ・・・

「さつきも言つたでしょ。『主人様の言つことはむちゅんと聞いてなさい。中庭よ、な・か・に・わ!』

「中庭だあー? ここ学校だろ? 授業はどうした?」

「2年生は今日は授業がないわ。今日は召喚したばかりの使い魔とコミニケーションをとるのよ。」

そのため、本来は授業中には開放されないんだけど、2年生だけ特

別に授業中でも中庭の使用の許可が出てこるもの。」

「ふ～ん。つまり、中庭でコノゴニケーションをとつてるってわけか・・・」

「あら、平民の癖に頭の回転は速いのね。」

ルイズが小馬鹿にしたよう囁う。

(正直こんな奴とコノゴニケーションなんかとりたかねーよ。)

そうじつじてゐる内に、俺たちは中庭に着いた。

に動き出す。

(向で皿ついと聞こえまつてゐるんだが、やっぱローンの影響かな  
?)

自分の思ふ通りにならないうとに苛立ちながら、やつと解釈して自己  
完結する。

しばらくテーブルと椅子を探していたら、先ほど別れたシェスタを見つけて声を掛ける。

「お~い、シェスタ。こんな所で何をやつているんだ?」

俺の呼びかけが聞こえたのか、シェスタはあたりを見渡して俺を見つけた。

「マモルさん。こんな所で何してるんですか?」

「俺?俺はライズに頼まれて座れる場所を探していました。シェスタは?」

「そうなんですか?私は、2年生の皆さんの奉仕をやせていた  
いります。」

よく見ると、シェスタはお茶のセットをトレイに乗せていた。お茶  
らへお茶会のためのものだらう。

「やうなんだ。俺も手伝つよ。」

「そんな、悪いです。それにミス・ヴァリエールに座れる場所の確保を頼まっていたんでしょう？あそこの席はまだ誰も座っていないので案内してあげて下さい。」

そう言って一つのテーブル席を教えてもらつた。

「そりなんだ。ありがとうございますシエスタ。早速教えてくるよ。」

俺はシエスタにお礼を言つてルイズの元に急ぐ。

俺はルイズに座れる場所を教えると、ルイズから次の指示が下された。

「はあ・・・席用意したらお茶を持ってこいねえ・・・  
つくづく人使い荒いなあ貴族つて・・・」

落ち込みながらお茶の用意をして、ルイズの席に向かつていると、数人の男子学生の会話が聞こえてきた。

金色の巻き髪に、フリルの付いたシャツを着て、そのシャツのポケットに薔薇を挿したメイジの少年、ギーシュ・ド・グラモンは先程からの質問攻めにウンザリしていた。

彼としてはケーキを摘み、紅茶を飲みながらアンニコイに浸つた風かのように過ごして、女性の目を釘付けにする計画があつたのにも関わらず、何故か自分の周りにいるのは女性ではなく男友達ばかりだつた。

正直、むさくるしい。そしてその男友達は先程から、

「なあ、ギーシュ。お前、今は誰と付き合つているんだ? うん? 怒らないから言つて」らん?」

「誰が恋人なんだ? うん?」

などと尋ねてくるばかりである。まるで尋問だ。ギーシュははあ・・・と溜息をつきたい気持ちを押さえて言つた。

「だから、言つていいではないか。つきあつとか、僕にそういう特定の女性はいないんだ。僕は薔薇なんだよ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲く。僕が多くの女性を樂しませるために存在するようになつた。」

女性に不自由した事はないといつ自負はある。だからこそギーシュは自らを薔薇に例えた。しかし、そのような発言は彼の友人達の反感を買つただけだった。

「ほつ、そつかそつか。それはつまり何か?『僕は何もしなくても女の子の方から寄つてくるんだ! 仕方ないじゃん』とでも言いたい

のか?「

「いや、そこまで露骨な事は・・・」

「お前、アレだろ。人に女性を紹介しておきながら、自分がその女性を搔つ攫つていくタイプだろ」

「何でそういうの!僕にだつてその辺の良識はあるから!?」

そうして熱くなつてしまつたのがいけなかつたのか、ポケットから小壇が落ちたのに気づいた。この友人たちに拾われれば、また何か言われるかもしれない。ギーシュがすぐ拾あつとした時、彼より先に小壇を拾つたものが現れた。

「落し物ですよ?貴族さん?」

小壇を拾つた人物は昨日クラスメートが呼び出した使い魔だつた。

／＼＼ギーシュ side end／＼＼

(「いっえ~い!ギーシュとの決闘フラグゲットだぜ!」)

ギーシュが小壇を落としたので、決闘フラグを回収するために面白半分で拾つたが、結構後悔している俺・・・

(ああ・・・なんで俺は「こう厄介」とに首を突つ込みたくないんだ

「う・・・」

「な、何を勘違いしているんだね？」、これは僕のじゃない。い、いい、一体君は何を言つてるんだね？平民君？」

俺はその言葉を聞き「へえ・・・」といつて再び香水を手に取る。

「なら、私が本来の持ち主に返しておきますね。」

そう言つて、これ見よがしに香水を他の男子生徒に見せ付ける。

それを見ていた生徒が、小壇をじっと観察していた。そしてギーシュの友人らしき一人のうち、一人が何かに気づいたように口を開いた。

「おやおや、よく見たたらこの香水は、モンモン」とモンモランシーの香水ではないのかね、ギーシュ君」

「本當だねえ、この鮮やかな紫色はまさしくモンモランシーが自らのためだけに調合してこる香水に見えるねえ。といつてはギーシュはモンモランシーと付き合つていたのか。」

ギーシュは一瞬つと呻くと、すぐ呼吸を整えた様子で指を立てて反論する。

「ち、違つていいかい君たち？彼女の名誉のために言つが・・・

言い訳をするギーシュに俺は追い討ちをかける。

「あのーちよつといいか？」

「ち、違つていいかい君たち？彼女の名誉のために言つが・・・

「ん? 何だね平民! メイジの僕に恐れ多くも・・・」

「いや、ちょっと氣になつたんだが、さつきからそ、後のテーブルの女の子がずーっとこっち見てんだけだ」

「え?」

ギーシュやその友人達が俺の指し示すテーブルの方向を見る。

そこには、茶色のマントの少女が一人、ぽつんと立つていた。

俺たちの視線が一斉に向けられたことに気づいたのか、茶色のマントの少女は、ギーシュに向かって「コシコシ」と歩いてきた。

栗色の髪をした、可愛い少女だった。着ているマントは茶色。

可愛らしい顔立ちにはまだ若干の幼さが残っていた。おそらくギーシュたちより年下で一年生だろつと思つた。

「ううのもなんだが、俺の好みのタイプである。

「や、やあ・・・ケティじゃないか・・・」

「ギーシュさま。私、昨夜言つていたようにスフレを作つてきて参りましたの。」

ケティと呼ばれた少女は笑顔である。

しかしそく見ると額に青筋が浮かんでいた・・・

「ああ、これはこれは。貴方は昨日、夜遅くにギーシュをまと二人つきりでお会いしていた方ですね。昨日はどうも。良かつたですね、色男。<sup>ギーシュさま</sup>『ぜひ食べてみたいなあ』なんて言つてましたもんね。」

「……とばかりに、『夜遅くに』や『一人つきり』を思いつきり強調して言つた。勿論彼女に聞こえる様に声を大きくして。

「きつきみー」

俺の言葉にうるしたえるギーシュ。

「ですが、あの噂は本当でしたのね。やつぱり、ミス・モンモランシーと……」

途端に、ケティの目には大粒の涙が溢れ出す。

「い、いや、いいかいケティ？彼らは馬鹿な誤解をしているんだ。僕の心の中にはいつだって君だけが……」

「最低っ……」

ケティはそう言つて思い切りギーシュの頬をひつぱたき、「さようならっ！」と言つて泣きながら走り去つていった。

ギーシュは呆然とした様子で頬をさすつていた。

だが、しかしながら、彼の不幸は連鎖はこれだけでは終わらない。

• • • • • • • • • •

地獄の底から湧き出るような恐ろしい声が、俺達の耳に入つた。

振り返ると、鬼の形相をした金髪ロールが立っていた。

ギーシュは世界の終わりのような絶望的な表情になり、声の主に声を掛けた。

「一シノリナシ、ササ、サ」

見事な巻き髪の女の子、モンモンことモンモランシーがいかめしい顔つきと単色の瞳でギーシュを睨みつけていた。

「モンモランシー、僕には君が何を言いたいのかよく分かる。だが、これは誤解だ！ 彼女とはただ一緒に、ラ・ロシェールの森へ遠乗りをして話をしただけで……」

言い訳はよくない。というかそれでは積みだぞ。ギー・シユよ・・・

「おかしいな・・・おかしいわよ・・・おかしくない・・・?」

「え？」

「ギー・シユ？ ねえギー・シユ？ 私はあなたとそのような場所、一緒に行つた覚えはないわ？ この前行つてみたといとあなたに言つたのに連れて行つてくれなかつたのは・・・

私は悲しいわよ、悲しいわ。  
ねえ、ギーシュ？裏切らないって言つたわよね？あなたが私に。な

のあなたはあの一年生に手を出した……

「ちよ、ちょっと待て。落ち着けモンモランシー！？  
お願ひだよ『香水』のモンモランシー。咲き誇る薔薇のよつな顔を、  
美しいその顔を、怒りに歪ませないでくれ！僕まで悲しくなるじゃ  
ないか！」

モンモランシーはゆらつ・・・と動いて、ギーシュたちのテーブルに  
置かれた自作の香水の小壇を取ると、こつこつと微笑んだ。

その微笑みは薔薇のように美しいはずが、俺にはその後ろに夜叉が  
見える気がした。

そしてモンモランシーはギーシュとびきりの笑顔でこいつに話した。

「夜中、背後には氣をつけてね・・・フフ、フフフフフ」

と言つて、モンモランシーはそのまま去つていつた。

「　　」

長い・・・長い沈黙が流れた。俺たちは今修羅場を見てゾン引きし  
ている。

ギーシュに至つては滝のように汗を流し、固まつている。

やがて、ギーシュはこちらを振り返り、首を振つてこいつに話した。

「何が・・・いけなかつたんだろ？・・・？」

( ( (なぜ・・・) こつはわからないのだから・・・? ) )

ギーシュの田が死んでいた。

「そんなの、一股を上手く乗り切るほどの器も碌に無いくせに、元せりへせり、一  
股と言う行為に踏み切った無謀なお前が悪いんじやん。」

つこ、口が滑ってしまった。

しかし俺の発言にギーシュの友人たちも同調し、

「その通りだギーシュ君。己の器量を信じすぎた君が悪いぞ。ま  
はははははははは！」

「ギーシュ君、例えそこの平民が小壇を拾わなくとも、君の立ち回  
りではもっと酷い事になつたかもしない。つまつこじでばれてよ  
かつたのを、はははは！」

思いつきり笑われるギーシュが哀れになり、俺はこの場から立ち去  
ることにした。

「じゃ、じゃあ俺はこれで・・・」

「待ちたまえ。元はと言えば君が香水なんか拾わなければこんな事  
にはならなかつたんだ。」

いや、それは洒落にならんぞギーシュ君・・・

「何ですか？そもそも一股掛けていたアンタが悪いのに、今更にな  
つてその責任を俺に押し付ける気ですか？どう考えたって貴族様の

自業自得でしょ？」

俺の反論に周りが笑う。

「そりだぞ、ギーシュ。言い訳は見苦しいぞ。」

そう言われて真っ赤になつていったギーシュは、俺を見下したような顔で言う。

「どうやら君は、貴族に対しての礼を知らないようだ。」

「あいにく、そんな世界とな無縁の所からやつてきたもので・・・それに格下の、しかも礼儀知らずの奴に持ち合わせる礼なんぞ持つてねーよ。」

んべつと舌を出して挑発する。

「よからうつ。ならば決闘だ！」

「決闘？」

「その通り。君に決闘を申し込む。

君は平民の、それも使い間の分際でこの僕を侮辱し、あまつさえ一人のレディを・・・泣かした！」

「泣く所か、一人は思いつきり怒つてたじやん。」

俺の言葉を聞き、野次馬に来ていた人たちが一斉に笑い出す。

「つーーーー！覚悟は良いな！ヴェストリの広場で待っている！」

セツナヒー、ギーシュは中庭を後にした。

「マモルさん…」

シエスタだ。

なにやら血相を変えっこひこに来る。俺達の会話を聞いていたのだ  
るべ。

「マモルさん殺されちゃいます。貴族にたて突いたら殺されてしま  
うんですけど…」

蒼白な顔をして俺に叫ぶ。

「大丈夫だよ。俺は死なねーから。安心して決闘見てな。」

「でも…」

俺の言葉を聞いても不安そうにしてるシエスタに、俺は笑みを浮  
かべる。

「セツナヒーたら？俺も魔法使いだって。条件は対等だよ。」

それでもまだ不安そうな顔をするシエスタ。

そんな会話をしていたら後ろからルイズに声を掛けられる。

「あんた！何勝手な」としてんのよ…」

「よう、ルイズ。」

「「よう、ルイズ。」じゃないわよ。いいから来なさい。ギーシュに謝るわよ!」

「謝る? 何で?」

「貴族は平民に勝てないの! あんた殺されるかもしねりのよ。」

「殺されねーよ! つーかもしかしてルイズ。お前俺の事弱いって思つてゐるのか?」

「当たり前じゃない。アンタ犬にも勝てなさそうな顔してるじゃない。」

(いぬつて・・・)

「はあ・・・認識の違いがここで来るとは・・・  
いいカルイズ。俺は使い魔のルーンを刻まれて、間違いなく『最強の存在』になつた。昨日の夜、能力を確認したから間違いない。」

「はあ? 何言つてんのよ? そんな訳ないじゃない! いいから来なさい。」

「だから行かないつて言つてんだらうが! ・・・はあもつれここまで  
疑うんなら今から見せてやる。」

今年の使い魔の大当たりは俺だつてことをな。」

そう宣言し、俺は先ほどの男子生徒に決闘の場所を聞く。

「なあ、ヴォストリの広場つてどーじだ？」

「ああ、あつちだよ。」

「わかった。サンキューなー。」

そう言つて指を舐された方向に歩いていく。

時は少し遡る。

「はいはトリスティン魔法学院の学院長室。その中の会話である。

「今年度の2年生による、使い魔の召喚の儀式も無事終わったの。」

「ええ、何よりです。」

この魔法学院の学院長、オスマンは秘書のロングビルに話しかけた。

そして、魔道具製のパイプタバコを口に差すが、ロングビルに魔法で取り上げられる。

「はあ、やれやれ・・・」

「健康管理も秘書の勤めでしてよ。オールド・オスマン。」

「年寄りの数少ない楽しみを奪おうとするのかね、ミス・ロングビル」

セツナはロングビルに近寄り、お尻を撫で回す。

「お尻を触るのはやめて下さい。」

ロングビルはオスマンに冷たく言へ。

「うう・・・さて? 何でわしがこんなところにいるんだ? やがて?」

「都合が悪くなると呆けた振りをするのも、やめてください。」

そんな会話をしていたら、ロングビルの机から一匹のねずみが出てきた。

「おおやつがあった。使い魔の話じゃったな。」

「うう、やがて?」

突然思い出したようにオスマントー、ロングビルは悪態をつく。

「使い魔は一生の友であり、田であり、耳である。我が友モートン  
グール。お前とも長い付き合いじゃったの・・・」

そう言つてオスマンは、モートソングニールにナツツを『』える。

「ちゅうちゅうちゅ。ちゅうちゅうちゅ「」。」

ナツツを食べながらモートソングニールは鳴く。

「つむ。田とな・・・純白とな。」

「つー」

モートソングニールの鳴き声を聞いて、その言葉を声に出していたオス  
マンに対し、ロングビルはその言葉を聞いて真つ赤になつた。

「つむつむ。ミス・ロングビルは白より黒が似合つと思つのじゃが、  
そつは思わぬか・・・」

「オールド・オスマン。今度やつたら王室に報告します。」

さすがにこのセクハラには耐えられなかつたのか、ロングビルは警  
告を出す。

「んん！カーーーーーー！たかが下着を覗かれたぐらいでカッカしな  
さんな。」

そんな風じやから、婚期を逃すのじゃー！」

その発言に、ロングビルは切れた。

ゲシッゲシッ

オスマンを組み伏せ、ロングビルは蹴りを放つ。

「あた、痛い、もうしない、許して・・・」

蹴られながら許しを請うオスマン氏。

そんな中、学院長室にひとりの男性職員が入ってきた。

「オールド・オスマン。大変ですぞ。」

「なんじや。騒々しいぞコッパゲール先生。」

「コルベールです！それよりこれを見てください。」

コルベールはオスマンの机にある本を広げる。

「これは？」

本を見た途端、オスマンの表情が変わる。

「昨日、ミス・ヴァリホールが呼び出した平民の使い魔のルーンです。見覚えがなかつたので調べました所、この本の内容と酷似しておりました・・・」

「ううん。平民の使い魔なんぞ聞いたことがないぞ。すまぬが、ミ

ス・ロングビル。席を外してくれんかの。」

「黙りました。」

そう言つて、ロングビルは席を外す。

その際に、しつかりと本の内容を見ていた彼女に「一人はまだ気が付いていない。

「これは伝説にのみ存在する使い魔のルーンじやぞ。  
ましてあのヴァリエール家の三女が召喚するなど・・・  
これは失われしペントガロンの一 角にかかることじや。」

「ま、まさか・・・」

「「」との真実はどうあれ、「」とのことは一切口外してはならん。」

「わ、わかりました。」

重苦しい雰囲気が、学院長室に漂つていた・・・

決闘・・・死闘？いえ、一方的なフルボッコです。

「諸君！決闘だ！」

ギーシュの言葉に噂を聞きつけた観客が一斉に盛り上がる。

「いいぞ。ギーシュ！平民なんかやつつけちゃえ。」

「「「キャラ、ギーシュをまーーー！」」

ここはヴェストリの広場。決闘が決まって、たつた數十分だったといつに、この盛り上がりよう・・・

しかもほとんど貴族がギーシュの味方。まあ分かつてはいたけど、少しくらい俺の方を応援してくれてもいいと思つ。

そりやつてあたりを見渡すと、シエスタの姿を見つけた。しかもその隣にはマルトーさんがいた。

（アンタ何やつてんすか？つーか仕事はどうした仕事は・・・）

そうやつて呆れていたら、ルイズがギーシュに突つかかっていた。

「ギーシュ！いい加減にして！決闘は禁止されているじゃない。」

「禁止されているのは貴族同士の決闘だよ。彼は平民。問題はない。」

「それは・・・そんな事今までなかつたから・・・」

「

「ん？ ルイズ、もしや君はこの平民こそのが女心を動かしているとか？」

「ば、馬鹿にや事言わないで！ 自分の使い魔が見す見すボロクソにやられる所を、黙つて見てられる訳ないじやない！」

（ボロクソって・・・まだ信じてないのかこいつは・・・）

「君が何を言おうと、もう決闘は始まつているんだ！」

そつまつひき、ギーシュは、手に持つていた薔薇を振るひと一枚の花びらが舞ひ。

その花びらが地面に触れると、光と共に女性の形をした鎧が出てきた。

「決闘の作法として名乗つておくれよ。

僕の名はギーシュ・ド・グラモン。——今は『青銅』。したがつて、

青銅の『コーレム』『ワルキュー』がお相手するよ。」

「別に良いけど・・・それより俺にも武器くれよ。自分で武器を持つてる『コーレム』で戦うんだから、それくらいしてくれても良いってしょ？」

「ふん。よからぬ。」

（ホント乗せやすいなこいつ・・・）

やつまつひきの田の前に一本の剣を鍊金するギーシュ。

そして俺は剣を掲もうとしたらルイズから待つたがかかつた。

「だめ！だめよ。この剣を取つたら本当に決闘が始まっちゃう。そ  
うなつたらあんた殺されるのよ。」

「だから負けねーよ。何度言わせたら気が済むんだ。」

「何でそんなに意地になるのよー謝つて許してもらえば良いじゃない！」

「あほか。俺は一度向き合つたら、決して逃げないと決めている！それに理不尽な力の前に屈したら、男に生まれた意味がねーだろ！大体、お前等魔法が使えるだの、貴族だのつて無駄に威張りやがつて・・・いい加減こっちも我慢の限界なんだよ！」

「それでも！平民が貴族に勝てるわけないじゃない！」

「そんなのやつてみなくちゃわからねーだろ！そもそも、格下相手に下げるもねー頭なんか下げるか！」

そう言つて俺は剣を引き抜く。

その瞬間、左手のガンダールヴのルーンが光りだした。

「待たせたな。さあ、決闘のルールを教えてもらおうじやねーか。」

「バカ――――――！　もう知らない――――！」

そう言つてルイズは野次馬のところに戻つていく。

「君は決闘は初めてなのかい？」

「ああ。 それがどうした。」

「やれやれ、とんだ素人に決闘を申し込んだものだよ・・・。 決闘のルールは、相手を戦闘不能に追いやるか、参ったと言わせる。 もしくは相手の杖を取ることで勝敗が決まる。 分かったかな平民君？」

「ああわかった。 合図は？」

「せうだな・・・マリコルヌ。 合図をお願いしてもいいかな。」

「いいぞギーシュ。 では・・・始め!」

そうして、俺達の決闘は始まった。

始まつた瞬間、ギーシュのゴーレムが突っ込んでくる。

ザンッ

それを俺は手に持つていた剣で一閃した。

するとゴーレムは真つ二つになり倒れた。

（よわ！）

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

突然の出来事に一同騒然とする。

誰もがギーシュが勝つと思っていたのに、俺がゴーレムを倒してしまったからだ・・・

「 なあ？ もうお終いか？」

あまりにもあっけない結果だったので、俺はギーシュに尋ねる。

「 そ、そんなわけないだろ？ 今のは小手調べや。」

そう言ってギーシュは薔薇を振るひ。すると今度は6体のゴーレムが現れた。

「 はん。小手調べねえ・・・数増やしても同じ結果になると思つけど、いつもちょっとだけ本気出してやるよ。」

そう言って俺はゴーレムに突っ込む。

（ああ、一方的なフルボッコの始まりだぜ！）

「 行くぞ！ 粉塵裂波衝！ さらに崩龍斬光剣！ ！ ！」

ガガーン！ スパパパパッ！

俺の剣技で、4体のゴーレムが一気に葬り去られる。そして・・・

「見切れるか！喰らえ！翔破裂光閃！！」

俺は残りの『ゴーレム』に秘奥義である『翔破裂光閃』を喰らわせる。

「貴様等に見切れる、筋もない・・・」

勿論、ちゃんと最後の台詞も忘れない。

そして俺はギーシュ目掛けて駆け出す。

「塵も残さん！」ぐギーシュ、淨破、滅焼闇！――！」

「ちよ、ま・・・」

「ウツ――！」

闇の炎と剣の斬撃がギーシュを襲う。

そして、ボロボロになり目を回しているギーシュに対し

「闇の炎に抱かれて消えろつ――！」

と最後の決め台詞を言った。

(やつべー超楽しい。この台詞超カッケー！)

初めての戦闘ですっかり舞い上がった俺は初めの立ち位置に戻る。

そして、一部始終を見ていた観客はこの決闘が終わると、一斉に盛り上がった。

ちなみに、ギーシュが作った剣は、さつきの戦闘ですっかり壊れてしまっていた。

「ちょっと、大丈夫？ 怪我していない？」

決闘が終わって、一番にルイズが心配してくれた。

「今の見てたる？ 怪我なんか一つもしてねーよ。」

「そう良かった。でもアンタ本当に強かったのね。」

「だからさう」

俺がルイズに話しかけている時に、不意に殺氣を感じたのでルイズを突き飛ばす。

「危ない！――！」

ルイズがさっきまでいた場所に、氷の刃が通り過ぎた。

しかし、それは俺を狙っていたらしく、俺は無防備になつた体をその氷の前にさらけ出す形になつた。

「ぐああああ――！」

無数の氷の刃が俺の体を突き立てる。

「マモル――！」

ルイズが叫ぶ。

「つか、誰だよ。こんな事しやがつたクソはーー。」

俺が魔法が飛んできた方向を見ると、そこには杖を構えた男子生徒がいた。

「ギー・シユの奴。平民になんか負けてんじゃねーよ！平民は僕達貴族にひれ伏していれば良いんだ。」

そこにいたのは、典型的な自己中野郎だつた。

「おまえか？さっき俺に攻撃してきた奴は？」

「そりだよ。貴族を打ち負かした平民にお仕置きをしたんだ。」

「お仕置きだと? 貴様、この結果に不満があるのか?」

「あああるね。大体平民に貴族が負けていいなんてあつてはならないんだ！ギーシュは貴族の面汚しなんだよ！」

(よしわかった。ここに殺さう。)

「それでいきなり有無を言わざずに攻撃か・・・貴族つて奴はよつぱど羨がなつてないんだな。」

俺の挑発に真っ赤にする貴族A。

「アーネスト・タマム...」

そう言つて貴族Aは杖を振る。つ。

すると貴族Aを中心に突風が吹き荒れる。

その突風に真空波があつたのか、俺を含め周囲の人間まで危害をえた。

「このやうう・・・やつて良いこと悪いことの区別もつかねーのか!?」

貴族Aを中心に回りにいた生徒は大混乱。男女問わず何人か負傷していた。

「だまれ!平民風情が貴族に口答えするな!!--」

そう言つて貴族Aは俺に向けて杖を構える。

「クソッたれが!もういい。お前は死刑決定だ!!--」

俺はそう言つて、構えを取る。

「ルイズ!!--」

戦闘に入る前に俺はルイズを呼ぶ。

「な、なによ?」

近くで俺が切れていたのを見ていたルイズは、若干怯えながら言つ。

「あいつ殺しても良いよな?」

それは質問ではなく確認だった。

「だ、だめに決まってるでしょー。大体アンタ武器持つてないじゃない！」

「大丈夫だ、魔法を使う。」

「は？」

俺は呆けているルイズをよそに、両腕を広げて詠唱に入る。

「紡ぎしは抱擁、莊厳なる大地、今ここにもたらされん。万物に宿りし生命の息吹をここに！」『リザレクション』

唱えるのは高い回復力を持つた広範囲型回復魔法、『リザレクション』。

そして、詠唱が終わり魔法を唱えると、俺を中心に巨大な魔方陣が浮かび上がり生徒達全員を覆いつくす。

「パアーーー！」

そして青白い光と共に、俺を含めた生徒達全員の傷が癒えていく。

「す、凄い。何だこの魔法。こんなのスクエアクラスでも出来ねーぞ。」

「あんなに傷だらけだったのに、もう治っちゃった。」

俺の魔法に生徒達全員が驚いている。

「な、なんだよそれ！お前メイジだったのかよ！？」

先ほどの貴族Aが慌てて俺に言つ。

「魔法使いの事をメイジというなら俺はそうだ。だが、たとえ魔法使いでなくとも貴様だけは許さん！……」

「ひい……」

俺の形相に怯える貴族A。

そして俺は手を前にかざし、再び詠唱をする。

「氷結は終焉、せめて刹那にて砕けよー』インブレイスエンダ』

瞬間、貴族Aの足元に魔法陣が現れる。

そして、魔方陣から絶対零度の氷の塊が出てきて、貴族Aを凍り付けにする。

「ちょ、ちょっと。いくらなんでもやりすぎよ。こいつ死んじゃったの？」

ルイズが慌てて俺に言つてきた。

「お前に殺すなって言われてたから、殺してはいない。でも、ずっとこのままだつたら確実に死ぬな、こいつ・・・・・」

俺の発言にルイズの顔が蒼白になる。

「い、今すぐ解除しなさい。とにかく殺しちゃだめー。」

「わ～たよ。おーい、みんな！その氷から離れてくれ。巻き添え食らひつい。」

そう注意すると氷の中の貴族を見ていた生徒達が、一斉に離れ始める。

全員が離れたことを確認して、俺は魔法を詠唱する。

「古より伝わるし浄化の炎・・・落ちよー。『ヒンシェントノヴァ』」

詠唱を終えると、上空から巨大な炎の塊が降ってきた。

カツー・ドカーン！――！

その炎の塊は、氷付けにされている貴族Aに向かって振ってきて、氷と炎が接触した瞬間、凄まじい爆発が起きた。

「ばか！――アレじや死んじやつじやない！――」

ルイズが怒る。まああの光景を田の辺たりにしたら当然か・・・

「よく見ろ。生きてるよ。さすがに手加減ぐらこするわ・・・」

俺はそう言って爆発の中心を見る。

するとその先には、黒焦げになつて田を回している貴族の姿があつ

た。

その姿を見て、その場にいた全員が歓声を上げた。

「行くぞルイズ。聞きたいことがあるんだろ?」「

そう言って俺は、さっきから何か聞きたそうにして、いるルイズに催促した。

場所は移り変わり、俺達はルイズの部屋で話をしていた。

「アンタ、メイジだつたのね。」

「ああ、昨日使い魔のローンでメイジになつた。」

不満そうに言つてくるルイズに対し俺は淡々と答える。

「何でそんな大事な事言わないのよ! もつと早く教えなさいよ!」

ダンツとテーブルを叩くルイズ。

「しようがないだろ? 昨日はお前早く寝つけたし、今日だつて言う暇なかつたじやん。」「

「うぬや二、うぬや二、うぬや二。口答へるな。」

ぶんぶんと手を振り回すルイズ。

「つたく、子供かよ・・・相手にしてられつか。もう寝ようぜ。」

「だめ。まだ話しあつてない！あんたの事を聴き出すまで寝てもいい！」

「あつそ。じゃあ早く聞いてくれよ。全部の質問に答えるから・・・」

俺は面倒くせうつて言ひ。

「じゃあ最初の質問。さつきの魔法は何？あんな魔法見たことない。」

「アレは俺の世界の魔法。はるか昔に失われた古代魔法だ。」

嘘は言つてないはず・・・

「俺の世界？アンタこの世界の住人じゃないの？」

あれ？まだ説明してなかつたつけ・・・？

「あゝ・・・そこから説明するのか・・・  
ああそ уд а ю。実は俺は

そう言つて俺はルイズに説明する。

地球の事、ローンの事、そして使える魔法について……

( まあだけど、全部正直に喋つてないんだけどね…… )

「なるほど……大体の事情は理解したわ……  
あんたは、その……元の世界に帰りたいと思わないの?」

「そりや帰れるなら帰りたいよ。いきなりこんな世界につれてこられたらし……」

「わ、悪かったわね……」

( ルイズが謝った? 何か変な感じ…… )

「いひつて別に。嘆いたつて仕方ないし、それに帰る道はある。」

「わうなの?」

「ああ、だけど今はまだ言えない。時が来たら教えるよ。大丈夫。勝手に帰るような真似はしないから。」

「あ、当たり前よ。」主人様をさし終えて帰るだなんて……

そう言つてだんだんルイズの声が小さくなつていく。

「ま、しばりくは一緒にいてやるから安心しな。それよつもつ……  
か?」

「ま、待って。アンタ魔法使えるのよね？最初に使った、あの凄い回復魔法で見てほしい人がいるの？」

「はあ？どうこうことだ？」「

「実は」「

そう言われて、俺はルイズの姉、カトリアの事を聞かされていった。

「……って事なの。あなたの魔法で治せない？」

ルイズが不安そうに言ひ。

「うーん……結論から言つたら、あの魔法でカトリアさんつて人を治すのは無理だ。」

「どうして……」

俺の言葉にルイズは驚く。

「あの魔法『リザレクション』は、どちらかといふと、怪我を……つまり、外部的な損傷を治すための魔法なんだ。だから、内部的な損傷である病気の類は治せない。」

「そう……なんだ。」

見るからに落ち込んでいるルイズ。何か可哀相になつてきた。

「あ～まあ、なんだ。だから言ひて、カトリアさんを治せないっ

て」とはないぞ?」

その言葉を聞いた瞬間、ルイズの目がパアッと輝く。

「ほ、ほんとう?」

「いや、そこまで期待されても困るんだが・・・」

「本当よね?嘘ついてないわよね?絶対ちい姉様を治してくれるのは?  
よね?」

「絶対にとは言えない。取り合えず病気を見てみないと・・・」

「わかったわ!今すぐ行くわよ!」

ルイズは急いで帰宅の準備をする。

「待て待て待て!学校はどうする!それに、何の連絡もせずに帰る  
つもりか?」

「ううーだ、大丈夫よ。」

「大丈夫な訳ないだろ?ほら、行くんならまず、実家に手紙を書け。  
それと、学校の人には休むことを許可して貰つてこい。」

「わかったわよー少し待つてて。」

「あー、そうだルイズ。実家に書く手紙に『絶対に治せる』なんて  
書くなよ。『もしかしたら』って位で書いとけ。」

「わかった。早速学院長に許可を取つてくれる。」

そう言ってルイズは、バタバタと忙しなく自分の部屋を出て行つた。

## カト・レアセントピア対面

「起きたなさいマモル！早く屋敷に行くわよ。」

朝一番、俺はルイズに起された。

「何だよ・・・てかやけに早いな・・・」

俺はまだ眠っている頭で反論する。

「いいじゃない。それより早く準備しなさい。急いで屋敷に行くわよ。」

そつまつてルイズはすでに準備万端つと言つた様子で俺に言つ。

「あ～分かったよ。ちょっと待つてろ。」

俺はそつまつて準備をする。まあ準備するといつても身支度だけなのだが・・・

さて、みんなおはよ。マモルだ。

いきなり冒頭でこんな会話をしたのは、結論からいまつとルイズの休学の許可が下りたからだ。

なに？何を言つているのかわからない？なら、前の話を呼んでくれ。

・・・と、話が逸れたな。ルイズが待っているので俺はもう行くよ。

「待たせたな。んじゃ、正門まで行くか。」

「そう言つて俺達は正門へと向かう。」

正門に付いた俺達は、早速ルイズの屋敷に向かう。

「よし、行くぞルイズ。」

「ちょっと待つて！ 行くつて徒步で？ 無茶言わないでよ。徒步なんて一週間はかかるわよ！ 私そんなに歩きたくない。」

「誰が徒步で行くなんて言つた。俺の能力で行くに決まってるだろ？」

我僕を言つルイズに俺は言つ。

「へ？ 能力つて？」

「まあ見てな？ ルイズ、家の方角はどっちだ？」

「え？ あっちの方だけど・・・」

ルイズが指を指した方角を確認してから、俺はルイズを抱える。

「ちよ、ちよっとなこするのよ。」

突然お姫様抱っこをされたルイズが慌てて俺に言つ。

「黙つてろ。行くぞーー！」

シユンッ！

そして俺達はその場から消え去つた。

シユンッ

俺はとあるシリーズの『マークポイント座標移動』を使い、魔法学院を離れた。

「な、何なのよ今の・・・」

「え？俺の能力の一つで『マークポイント座標移動』。簡単に説明すると瞬間移動だな。他にも使い道はあるけど、まあ今はその話はいいだろ？」

俺の説明に睡然とするルイズ。

「この能力は1~2キロしか進めないけど、馬よりかは断然早いだろ？」

そう言つて俺は学院のほうを指差す。

すると指の先には小さくなつた学院の姿があつた。

「まあそういう訳だから道案内頼んだぜ？」

「う、うん……」

まだ状況に頭がついて来ないのか、ルイズは氣のない返事をした。

「あ、そうだルイズ。屋敷に行く前に幾つか約束してくれないか？」

俺の言葉によつやくまともな反応を示すルイズ。

「なによ？」

「もし、カトーレアさんの治療がつまづいたら、俺に剣を買つてくれ。」

「剣？ 何で？ アンタ魔法使えるじゃない。」

俺の言葉にルイズは不思議そうに聞く。

「俺の本領は魔法剣士だ。ギーシュとの戦い見てただろ？」

実際には嘘だが、デルフリンガーに会つた時に嘘をつぐ。

「アレは確かに凄かつたわね。わかつたわ。それよりちやんと治してよね？」

「ああ、確約は出来んが最善をつくそう。後だな、これは約束とい

うよじお願ひなんだが・・・

「何よ? 早く言いなさい。」

躊躇つてゐる俺にルイズは急かす。

「もう少しマシな待遇にしてくれないか? 俺、これでも人間だし・・・  
あと、今後は少しばかり自由行動の時間がほしい。どうも束縛され  
るのは性に会わん。」

「うう・・・わかったわよ。これからはけやんと面倒見るわー。」

「よしありがとなルイズ!」

俺は嬉しくなりルイズにお礼を言つた。

「ふ、ふん!」

お礼を言われたルイズは真つ赤になりそっぽを向く。

そして俺達は再び屋敷に向かつて、移動を開始したのだった。

移動すること十数回。途中で休憩と昼食を取る為に街に寄つたので、  
ルイズの実家に着いたのは毎過ぎだった。

「あそこよ。あそこが私の家よ。」

「はあ、はあ、さすがに・・・能力の連續使用は疲れるな・・・」

「ちょっと、大丈夫?」

「ああ、少し休めば平気だ。それより・・・」

俺はルイズの実家を改めて見る。

(おーおー、これ家と言つより城じゃねーか・・・)

「ルイズってほんとに、良いとこのお嬢だつたんだな。」

「なによ? 疑つてたの?」

「いや、疑つてはいけど、いつやつて改めて見ると・・・な?」

そつと聞いて俺が驚いていると、畳敷のほうからフクロウが出てきた。

「お帰りなさいませ。ルイズお嬢様。」

(フクロウが喋つた?)

俺が驚いているとルイズがフクロウに話しかける。

「ただいま。トゥルーカス。お父様とお母様は?」

「謁見の間にいらっしゃいます。」

「わかつたわ。私が帰ってきたことを伝えて頂戴。私達もすぐに向

かうかう。」

「畏まりました。」

そして、トゥルーカスと呼ばれたフクロウはバッサバッサと羽を羽ばたかせて屋敷に消えていった。

それを見送つていた俺にルイズは言う。

「何ボサツとしているの？早く行きましょ？」

「ああはいはい・・・」

もやは何でもありか・・・と血口禿結しルイズの両親に会つため屋敷に向かう。

「お父様！お母様！」

そして謁見の間。

そこには、かの有名なヴァリエール夫妻がいた。

（うわー、さすが公爵家。威儀がある人たちだな・・・  
ルイズのお父さんもさることながら、かの有名な『烈風のカリン』

様も負けてないな……）

そう観察していると、娘の突然の帰省にもかかわらず夫妻は笑顔で迎えていた。

「おお、私の小さなルイズ、よく帰ってきた」

「お帰りなさい、ルイズ」

「ただいま帰りました。お父様、お母様。それで、手紙で書いていた件なのですが……」

「つむ。昨日の手紙は見ておるぞ。して、本当にこの者がカトレアの病を治すことが出来るのか？」

そう言って、ヴァリエール公爵は俺を睨み付ける。

「お初にお目にかかります。自分は公爵様の娘。ルイズ嬢に召喚された使い魔でマモル・カミシロでござります。」

そう言って片膝をつき皿口紹介をする。

「うーむ、人間を召喚するとは……流石は私の小さなルイズやる事が違うな！」

（なんつーか、寛大な人だな……）

「それで、お前が本当に我が娘、カトレアを治療できると？」

「はい。しかし、カトレア嬢を診断してみないと……」

絶対にとはまいませんが、全力を持って治療をさせていただきたく存じます。」

「よかっふ。カトレアの治療を許可する。ついてまire。」

「はい。」

そう言つて俺達はカトレアの部屋に移動する。

「ちょっとアンタ。私の時は態度が違うじゃない。どうこうとよ?」

「俺は初対面の人にはああいう喋り方だ。ましてやルイズのお父さんは公爵家の当主だろ?下手に反感かつて殺される、何てしたら笑えんだろ?」

「それは・・・そうだけど・・・」

納得がいかないといった顔で言つルイズ。

「まああれだ、俺がルイズに對してこんな言葉なのは、少なからずお前を信頼してるからだよ。」

「む〜・・・分かった。それで納得してあげる。」

まだ不満そうにしていたが、納得してくれたので良しとする。

しづらへ歩くとカトリール公爵はある部屋の前で立ち止まつた。

「エリだ。カトレア、私だ。入つても良いか?」

「ンン」とドアをノックするカトリール公爵。

「お父様ですか?」うれしく開いています。

部屋の中からおつとりした優しそうな声がした。

扉が開き、部屋に入るとそこにはルイズによく似た女性がいた。

（はあ～・・・改めて生で見ると、本当に綺麗な人だなあ・・・）

カトレアのあまりの美しさに驚きを通り越し呆れてしまつた。

「ちい姉様！」

真っ先にルイズがカトレアに飛びつく。何か子犬みたいだ。

きつと尻尾があるのならめつちや尻尾を振つてゐるんだろう。

「まあ！私の小さなルイズ！お帰りなさい。帰つてきていたのね。」

「はい。ただいま帰りました。ちい姉様！ちい姉様もお元気そうで何よりです！」

おーおー、嬉しそうにほしゃいじやつて・・・

そんなことを考えて一人を見ていると、ふとカトレアと目があつた。

「あら？ あらあら、まあまあ！ 私の小さなルイズ、貴方恋人を連れてきたのね。嬉しいわ！」

ギロツ

カトレアの発言を真に受けたのか、ルイズのお父さんがめっちゃ睨みできます。

「ちつ、違うわちい姉様！」 いつも私の使い魔で、こ・・・恋人にやんかじやないんだもん！」

真っ赤になつて否定するルイズ。噛むなよ・・・そして「もん」つて・・・

俺はルイズの慌てぶりに呆れると、早速本題に入る。正直この人は勝てそうにない・・・

「あ～と・・・初めてまして、先ほどご紹介に預かりましたルイズ嬢の使い魔で、マモル・カミシロと申します。」

「あら、 そつなの？ 残念ね・・・」

「へへへと嬉しそうに笑うカトレアさん。 こつちはちつとも嬉しくありません・・・」

「残念つて・・・えつとですね、早速ですが今日こちらに伺つた本題に入りたいと思います。失礼ですが、ミス・カトレアは病気を患つて いるとか・・・」

俺は少し強引に話を進める。

「ええ、お医者様の話では不治の病を患つていいとか。」

笑顔で言つカトレア。しかしその笑顔の奥には一種の諦めが入つて  
いた。

「実は、今日私がミス・カトレアの病気を診断したいと思い伺つた  
のです。そして原因が私の力で治療できるものなら、治療をしたい  
と思つのですがよろしいですか?」

「はい。構いませんけど、マモルさんはお医者様ですか?」

「いえ、ただの使い魔です。さあ、ベットに腰掛けて楽にして下さ  
い。」

そう言つて俺はカトレアをベットに座らせて、病気の診断をする。

「行きます。『インスペクトマジック』『インスペクトマジック』

『インスペクトマジック』、これは対象のあらゆる状態を読みとる  
魔法である。

魔法が完成すると、カトレアの体内情報が一気に流れ込んでくる。

(なるほど・・・白血病に各種の癌。癌の方は体中に転移しあじめ  
ている。こんな状況でよく生きてたな・・・)

俺が診断しているのを公爵夫妻とルイズは固唾を呑んで見守つてい  
た。

「原因が分かりました。これから説明したいのですが、ミス・カト  
レアも『一緒に聞きますか?』

こいついう場合は聞かせない方が良いのだろうが、どうせ治せるので  
確認のために聞いてみる。

「はい、お聞きしますわ。」

強い人だと思う。どんな診断をされるのか分からぬのに、強い意  
思を持つて聞いてくる。

「ではお話をします。皆さんもそれでよろしいですか?」

「構わん。」

「ええ。」

「大丈夫よ。」

俺の言葉に公爵夫妻とライズが頷く。

「結構。ではお話をします。先ほど魔法で診断した結果。カトリア嬢  
は『白血病』と『各種の癌』であることが判明いたしました。」

「それはどういう病気なのだ?」

「はい。まず、『癌』という病は人間の体に出来る悪性の腫瘍の事  
です。こちらはカトリア嬢の体の至る所にあり、さらに体の全身に  
転移し始めています。」

『白血病』の方は簡単には言いますと「血液の癌」と言われてあり、異常な造血細胞（白血病細胞）の一群が、骨髄で異常に増殖して正常な造血を阻害し、多くは骨髄のみにとどまらず血液中にも白血病細胞があふれ出てくる疾患の事です。

正直に申し上げますと、医者から見たら絶望的な状態であり、今のこの世界の医療技術ではまず間違いなく治せないでしょう。

俺の説明に皆絶望する。

「そんな、じゃあちい姉様は治らないの？」

ルイズがつぶやく。

「大丈夫だよルイズ。これなら治せる。」

俺の言葉に皆希望を取り戻した。

「本当? 本当に姉様は治るの?」

「ああ。だけど、これから行う事を一切口外しないと誓えるなら、だけどな?」

俺はそう誓つと皆承諾してくれた。

「わかった。始祖ブリミルに誓つて一切口外しない事を誓おう。」

そう誓つてヴァリエール公爵は誓つ。

「分かりました。では今から治療を行います。ミス・カトレアはベットに横になつてください。」

そつ言つて俺はカトーレアをベットに寝かせる。

そして俺は『王の財宝』<sup>ゲートオブバビロン</sup>に眠つてゐるあるモノを探すため、空間に手を突つ込む。

「ちょ、ちょっとあんた。何やつてるのよ。」

突然の出来事にルイズが慌てる。

「少し静かにしててくれ・・・お?あつたあつた。」

俺は目的のモノを手に取る。

「それは?」

俺の手には蛇のモチーフが巻き付いている大きな杖があつた。

「俺の世界の伝説にある杖。名を『アスクレーピオスの杖』<sup>アスクレーピオスの杖</sup>と言つて、医療の神にまで登り詰めた名医『アスクレーピオス』<sup>アスクレーピオス</sup>が持つていたとされる杖さ。

この杖は、ありとあらゆる病気を治し、死者でさえ蘇らせる事が出来ると言う。まあ実際は死者なんて蘇らせる事は出来なかつたんだけど、あらゆる病気を治せるつてのは本当だ。」

そう言つて俺は杖を振るつ。

「医療の神が持ちしアスクレーピオスの杖よ。全治の輝きを持ちて、  
彼の者に救いの光を与えたまえ!」

ピカーッ！！

その瞬間、アスクレーピオスの杖が光出し、その光がゆっくりとカトレアに降り注ぐ。

その青く輝く光はとても幻想的で、見るもの全てを魅了した。

「よし。これで大丈夫です。念の為にもう一度診断しておきましょう。『インスペクトマジック』」  
そして俺は、再びカトレアを診断し、本当に治っているのかを確かめる。

「大丈夫ですね。ミス・カトレア？お加減はどうですか？」

「ええ。なんだかとても体が軽いわ。ありがとう。マモルさん。」

「いえ、無事に治つて何よりでした。あとは、病氣で失われた体力を戻す事が出来れば完全に回復いたします。」

バタンッ

そこまで言つて俺は倒れた。

「マモル…どうしたの？」

突然倒れた俺にルイズが駆け寄る。

「心配要りません。ちょっと魔力を使いすぎただけだから・・・」

そう言って俺は意識を手放した。

「うん……」は？」「

（知らない天井だ……）

俺は目を覚ますと見慣れない部屋にいた。

視線だけを動かし、どうして倒れてしまったのかを考えていた。

（ルイズに呼び出された夜から、ろくに眠らずに能力の確認と言つ名田での多用使用。

次の日はそのまま、ギーシュとの決闘で慣れない剣技に秘奥義が二つ、さらにイレギュラーで入ってきた貴族に対して上級魔法3連発。今日に限っては、休んだとはいえカトレアに対して宝具級の魔法使つちまたからなあ……倒れるのも無理ないか。）

「あら、目が覚めましたの？」

考え方をしていたら声がかかった。

「あ、カトレア様。おはようございます。ここは？」

体を起こし、テーブルに座っているカトレアを見る。

「様だ何てやめて下さい。貴方は命の恩人なのです。カトレアで良いですよ。」

「はあ？ ではカトレアさんで……」

「カト・レ・アで良いですよ。」

さん付けで読んだら何故か笑顔でもう一度言われた。

「え、え」と・・・」

「カ・ト・レ・アです。」

言い淀んでいたら、さらに笑顔が深まり名前を強調された。

しかしその笑顔には、有無を言わせない迫力があった。

(「、怖え～・・・カト・レ・アってこんな人だったつけ?」)

「は、はい! では僭越ながらカト・レ・アと呼ばさせていただきますー!」

「はい。よく出来ました。」

素敵な笑顔で言されました。

「それで、『』はどうですか?」

「『』はヴァリエール家の客室です。貴方は私を治療した後、倒れ  
たんですよ? 覚えていませんか?」

「あっ、そうか・・・思い出しました。『』心配をお掛けしましたね  
?」

「そんな事はありませんが、その後ルイズが慌てちゃって、「マモ

ルが死んじやう。」って大泣きだつたんですから、後でこの娘にも事情を説明してあげて下さいね？」「

そう言ってカトレアはベットを見る。

カトレアの視線を追つたら、ベットの横でルイズが寝息を立てていた。

「きつと泣き疲れたんでしょうね。貴方をベットに運んでからはずつと傍にいたんですけども・・・」「

「そう、だつたんですか・・・」

俺はそう言しながら、寝ているルイズの髪を撫でた。

「ん・・・うん・・・」

ルイズの髪を撫でていたら、もどもどとルイズが動き出し、やがて起き出した。

「あんた・・・田が覚めたのね。」「

「ああ、心配掛けて悪かったな。」「

「別に、心配なんかしてないもん。ふああー」

そっぽを向きながら欠伸をするルイズ。

そのやり取りを見て、カトレアはくすくすと笑っていた。

「ん・・・それでアンタ、もう体は大丈夫なの？」

「ああ、少し体がだるい気がするが問題ない。魔力の方は十分溜まつてるし、体の調子も健康そのものだ。」

俺は笑顔で答える。

「そう良かつた。いきなり倒れるからびっくりしたわ。」

「悪かつたな。カトレアを治すために、とびっきり強力な魔法を使つたからな。」

「強力な魔法つてあの杖の事？」

「ああ。さすがに神様の持つ物を使うには結構大量の魔力を消費するからな・・・」

「そりなんだ。でも、あの杖はどこに行つたの？あんたが倒れた時にはもう消えてなくなつてしまつていたわ。」

「そりや元の場所に帰つたんだよ。まあその事は追々説明する。そんな事より、今はカトレアが無事良くなつた事を祝おうぜ。」

そう言つてカトレアを指差す。

「ちい姉様！もうお加減は大丈夫なんですか？」

「ええ、もうすっかり良くなつたわルイズ。これも貴方の使い魔さんのおかげね。」

カトレアに気が付いたルイズは真っ先に飛びつく。

そして、カトレアとルイズが抱き合つていたら部屋に公爵夫妻が入つてきた。

「入るぞ、カトレア。おお婿殿、目が覚めたのか。体はもう大丈夫なのか？」

「はい。おかげさまで。心配をお掛けしました。」

「良い良い。それで、婿殿にはちと話がある。ルイズとカトレアも後で謁見の間に来なさい。」

「はい。お父様。」

「分かりましたわ。お父様。」

ルイズとカトレアが返事をする。

「あの、さつきから気になつていたんですが……その、『婿殿』つて？」

「うむ。その事については謁見の間で説明する。もう動けるのならすぐに用意をしなさい。」

「はあ？ 分かりました。」

俺はそう言われ、理解できないまま謁見の間に移動した。

「 婿殿。 まずはカトリアを救つてくれてありがとうございます。 礼を言ひます。 」

「 私も母としてお礼を言いますわ。 本当にありがとうございます。 」

謁見の間に付いた俺達は、 まず初めに公爵夫妻からお礼を言われた。

「 いえ、 私はルイズ嬢に言われて治療を行つたに過ぎません。 お礼を言つならルイズ嬢に言つて上げて下せ。 」

そつと俺はルイズを推す。

「 それでも、 結果はどうあれカトリアを治療したのは婿殿だ。 これは曲げられない事実なのだからな。 」

「 はあ？ そうですか？ あの、 それでその・・・そつきから仰つてゐる『婿殿』 つて・・・ 」

「 おお、 そうであった。 実はな、 カトリアの治療を完遂した者にカトリアを嫁がせようとしているのだ。 」

「 「 はあ！ ？」 」

公爵の言葉に俺とルイズの声が被つた。

「 ちい姉様はその事を承諾しているのですか？ 」

ルイズが確認する。

「ええ、わたしはルイズの使い魔さんとなら結婚しても良いと思つ  
ているわ。」

「「な、なんだつてーーー。」」

（あ、また被つた・・・と言つかるイズ、このネタ知つてはいるのか  
？いや、偶然か？）

「そんな！ダメですちい姉様。こんな奴と結婚だなんて・・・」

「まあ、結婚に反対だなんて・・・やっぱりルイズも使い魔さんのことが好きなのね。」

## 出た、カトレアの天然トーケー

「ち、違います！？！」

その言葉を聞いたルイスは顔を真っ赤にしていた。

落せ着かんか 人とも  
話か進まんて はなしか

を二言して暴走するライブとカトーワを公爵が叫める

「すみません、お父様。」

「よい。それで姫殿、カトリアとの結婚。承諾してくれるな?」

勿論するよねつて顔で公爵は言つてきた。

そして、公爵夫人とカトリア、そしてルイズが俺に注目する。

「ムリ…………」

俺は真っ先に否定した。

「何故かの嬪殿？」

「そりよーちい姉様と結婚したくないの？」

公爵とルイズが聞いてくる。

「ちつかリイズよ……お前結婚反対してたんじゃなかつたのか？」

「え？ だつていぐらカトレア様が承諾しているからと言つて、こんな政略結婚よろしくみたまう婚約はお受けする事は出来ません。それに好きでもない人と結婚しても絶対に続かないと思うし、そんなに崩しで結婚しても、お互い不幸になるだけでしょ？」

「あら、私はマモルさんの事は好きですよ？」

「はい？」

突然カトレアさんが泣き声で泣かれた。

「マモルさんを好きと言つたのです。私との結婚に不満があるんですか？」

カトレアさんが涙を溜めて上田使いで言つ。

「いや、そんなことあつませんーカトレアさんとの結婚は正直言つ

て俺も嬉しいですし、こんな綺麗な人に好きって言われて男冥利に尽きるって言つか……」

俺は突然の出来事で気が動転して、つい本音が出た。「う、ポロつと……

「そんな綺麗だなんて……でも良かつた。これでなら婚約しても大丈夫ですね。」

とびきりの笑顔でカトレアさんが言つ。

「つて、ちょっと待つて下さいー私はルイズに呼び出されたしがない平民です。やっぱり貴族と平民との結婚って言つのは如何なものかと……」

そう言って公爵様に聞いてみる。

「つむ。まあ何とかなるじゃろ? そこいら辺はわし等が何とかする。のうカリース?」

そう言って、今まで疊らなかつた公爵夫人に声を掛ける。

「ええ、娘の為ですもの。他の貴族が何か言つてたら、力尽くでも説得してあげますから安心なさい。」

「ちょーそこは穩便にお願いしますー。」

(力尽くつてアンタ……そんな事したらたて突いてきた貴族なんか生きてないだろ? )

「そうですか？まあ貴族なんて私が王宮に<sup>カチコミ</sup>説得……もとい、お願  
いに行けば大丈夫でしょう。」

（いま、説得の言葉がカチコミ<sup>カチコミ</sup>で聞こえたような……）

「えへっとですね……」

（不味い。このままでは外堀が完全に埋められてしまう……  
何か、何かこの状況を開ける一発逆転の策はないのか？）

そう言つてキヨロキヨロしていると、ふとルイズと目があつた。

「そ、そうだ！ルイズ！お前はどうなんだ？やつぱり、自分の使い  
魔が大好きなお姉さんと結婚だなんて嫌だろ？」

そうして俺はルイズを巻き込む。

「わ、わたし！？えと。えへっと……」

いきなり話を振られたルイズは、慌てて公爵夫妻とカトレアを見る。

「ふむ、そうだな。ルイズ、お前は今回の婚約、どう思つておるの  
だ？」

そう言つて公爵夫妻はルイズの意見を聞く。

「私は……」

答えが決まらないルイズにカトレアが声を掛ける。

「ルイズ。」

「はい。ちい姉様・・・」

声を掛けられたルイズはカトレアを見る。

「わかつているわよね・・・？」

「ゴツゴツゴツ

その瞬間、カトレアが放つ威圧感で室内の气温はきつと下がつただろう・・・

「ひつ！わかつてまするこずはこのこんやくはだいかんげいですわ。」

あまりの威圧感に耐えられなくなつたのが、ルイズは目を回しながら早口で言った。

（齎しは無しだってカトレアさん・・・）

「良かつた。ルイズならきっとわかつてくれる信じていたわ。」

パンツと手を合わせ、本日最高の笑顔で言うカトレア。

「はあ・・・もうなんでもいいです・・・」

この家族には何をしても絶対に勝てないと想い、俺は折れる事にし婚約を承諾した。

「つむ。嬌殿はこれからわし達の家族じや。わしの事は義父さんと呼びなさい。」

「私も義母さんでいいですかね？」

「あ～、はい。これからよろしくお願ひします。義父さん、義母さん。」

こつして、俺はヴァリエール家の家族になった。

「では食事にしよう。今日はカトレアの病氣が治つて、さらに婚約まで決まつたためたい日。今日は無礼講だ。存分に騒ぐが良い。」

そして始まる宴。ヴァリエール夫妻も、ルイズやカトレアも、そして使用人の人達も皆笑顔で田いつぱい騒いだ。

そして宴は深夜まで続き、夜がふけていく・・・

## ルイズの魔法、夕焼けの約束

カトレアの婚約祝賀会を終えた翌朝。

俺は朝早くから公爵夫妻に呼び出された。

「おはようございます。義父さん、義母さん。一体こんな朝早くからどうしたのですか？」

「ああ、おはよう婚殿。実はな、一人で話し合い、婚殿にはカトレアとの婚約とは別に褒美を取らせようと思つての。」

「そりなんですよ。娘との婚約はめでたいですが、やはり個人的な褒美も必要と思いまして・・・」

「その通りだ。さあ婚殿。褒美は何がいい？何でも申すがよい。」

「そうですね・・・でも、突然そんなことを言われても困るのですが・・・」

突然の出来事に正直頭がついてこない。

「遠慮をするな！ほれ、何なりと申してみよ。」

さて、どうすつかな・・・あつ、そうだ。

「では一つだけ、お願いがあるのですがよろしいですか？」

「つむ。言つて見なさい。」

「では、僭越ながらお願いたします。  
私の願いは、ルイズのことです。」

「ルイズとな？」

「はい。実はルイズにはある秘密があります。今はまだ言えませんが、いつかルイズがその秘密を話すときにもちゃんと迎えてあげてほしいのです。」

「ほう。秘密とな……嬢殿は、ルイズの秘密とやらを知っているのか？」

「勿論知っています。彼女の秘密は、私にも関係のある事なので……

・  
「それでですね、秘密を打ち明ける日が来たときに、彼女のお願いを聞いてあげて欲しいのです。  
これが、私の願いです。」

（さすがに虚無のことは話せない。でも、後々その事で、ルイズは親にも打ち明けられなくて苦しんでしまっている。

そんな事をさせるのは、さすがに心苦しいしな……）

「わかった。では約束しよう。しかし、お前は欲がないな。自分が受け取るべき褒美なのに、使い魔である事を理由に主人を利用するなど……」

「申し訳ありません。今は、私個人の願いはないのです。また、自分ではどうしようもない状態になつてしまつたら、今度は私個人のお願ひをしたいと思います。」

「うむ。待つておるぞ姫殿。」

「はい。ありがとうございます。」

そうして、公爵に約束を取り付けた俺は学院へと戻った。

公爵家専用の飛竜で学院まで送つて貰つた俺とルイズ。

ルイズは学院長に報告に行つた。

「ただいま。私は午後の授業に出席のけど、アンタはどうする?」

報告から戻つたルイズは、俺に聞いてくる。

「そうだな。俺は使い魔だけど、貴族と一緒に授業を受けたのも平気なのか?」

「本当は平民は授業を受けられないんだけど、使い魔をつれて授業に来る子もいるから大丈夫だと思つ。」

「そつか。ならルイズと一緒に行くよ。この世界の魔法の授業も興味あるし・・・」

そうして俺はルイズの教室へと向かい、午後の授業を受ける。

そして、ルイズに席を案内してもらい、先生の到着を待つ。しばらくして、教室に紫色のローブを着たふくよかなおばさんが入ってきた。

「みなさん。今年度からこのトリステイン魔法学院に赴任してきた。ミセス・ショーヴルーズです。

属性は土。一つ名は『赤土のショーヴルーズ』。

これから一年間、みんなに土系統の授業を講義します。」

ショーヴルーズ先生が入ってきて自己紹介をする。

「さて、皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このショーヴルーズはこうやって春の新学期に、みんなの使い魔を見ることを楽しみにします。」

「平民を呼び出したメイジもいますけどね。」

一人の男子学生が野次を飛ばす。

すると、教室がどつと笑いに包まれる。

ルイズは顔を伏せ、屈辱に耐えていた。

（あ・・・しうがないなこいつ。）

「ゼロのルイズ！ 召喚できなかつて、その辺歩いていた平民つれてくるなよ！」

ギーシュとの決闘のときの立会い人をしていた男子生徒が言つた。

（あいつは・・・確かにマリコルヌだつたか？よ～し、見てるよ貴族共・・・）

「はあ・・・愚かな憶測で物事を決め付ける。やはり貴族は馬鹿ばかりだな・・・

君はあの召喚の儀式に立ち会つていなかつたのか？いや、俺は君の姿を覚えている。

あの時、確かにこのクラス全員がルイズの召喚に立ち会つていた。ならば君達は全て証人だ。ルイズの召喚の儀を侮辱するのなら、あの場を目撃していたこのクラス全員を侮辱すると同意。

それとも君は、あの時の事は覚えていないのかね？その風邪声がたたつて寝込んでいたのかい？

記憶力がなく、自分で自分を侮辱して・・・まるでドMだな。アホの極みだ。」

俺はクラス全員に聞こえるよつて言つて、両手を広げて、ヤレヤレと大げさに首を横に振るつ。

「ハ、ミセス・シユヴルーズ！ 虐辱されました！ 平民が僕を侮辱しました！」

「マリコルヌがフルフルと震え、真っ赤になつた顔をして先生に言つ。

「訂正しろ平民！俺は風上のマリコルヌ！風邪なんて引いてなどい  
ない！」

そつと杖を抜くマリコルヌ。

「これは失礼、ミスター・マリコルヌ。

貴殿の声を聞いていたら年中風邪を引いているよう聞こえてしま  
いますので、私なりに心配したのですが……  
そうですか、それは地声ですね。フツ……失礼いたしました。

」

そつと杖を睨みつけ、ブチ切れたマリコルヌ。

「あ、あ、貴様！もつ許さん！そこになあれ……！」

「僭越ながら一つ忠告を……  
杖を抜いたら、命掛けろよ？」

「なん、だと……」

俺の放つた殺氣に怯みながら言つ。

「そいつは脅しの道具じゃねえって言つたんだ。  
それにお前、ギーシュとの決闘を見てただろ？  
この俺に勝てると思つてんのか？」

そこまで言つと、マリコルヌは震えだす。どうやらあの決闘を思い出したようだ……

「そこまでです。ミスター・マリコルヌ。使い魔君。」

ショувルーズ先生が止めに入った。どうやら見ていらっしゃなくなつたのだろう。

「ミスター・マリコルヌ。使い魔君。お友達をゼロだの風邪引きだのと侮辱してはいけません。」

「しかし、ここは……」

納得してないのかマリコルヌが反論しようとする。

「ええ、授業を妨害してしまい申し訳ありませんでした。我が主が侮辱されたので、つい激怒して反論してしまいました。今は反省しておりますので、どうか授業をお続けになつて下さい。ミセス・ショувルーズ。」

俺はこれ以上長引かせない為に先に折れて先生に謝った。

こういふ場合は、引き際が肝心なのだ。

「自分の主が侮辱されたのなら仕方ありませんね。でも、次はありませんよ？それと、ミスター・マリコルヌ。貴方はまだわかつていないので罰を下します。」

そう言つて、先生は赤土でマリコルヌの口を塞ぐ。

「授業が終わるまでそういうしていなさい。わあ、授業を始めますよ。」

そして、先生は何事もなかつたよつて授業を始めた。

「さてみなさん。魔法の四台系統は?」

そして、授業を始める先生は生徒達に質問する。

「はい先生。火、水、土、風の四系統です。そして何たる奇遇。僕の属性も、『セスと同じ土』。一つ名を『青銅のギーシュ・ド・グラモン』と申します。以後、お見知りおきを。」

ギーシュが氣障つたらしく答える。あいつまだ堪えてなかつたのか?

「よろしく。ミスター・グラモン。

土は万物の再生を司る重要な魔法。それをまず知つて貰うため、みなさんには土系統の基本である『鍊金』の魔法を覚えてもらいます。

「

そうして、先生は懐から小石を出して杖を振る。

すると、小石が金の石に変わった。

「そ、それってゴーレドですか?」

鍊金の内容が凄いのか、キルケが声を上げる。

「いいえ真鑄です。『ゴールドを鍊金できるのは『スクウェア』クラスのメイジです。残念ですが私はただの、『トライアングル』ですから・・・」

先生が自慢そうに言ひ。

「なあルイズ。『スクウェア』や『トライアングル』ってなんだ?」

俺は疑問に思い、隣にいたルイズに質問する。

「メイジのレベルの事よ。さつきギーシュが言つた属性を複数組み合わせる事でメイジのレベルが決まるのよ。

例えば、さつきや先生がやつた鍊金の魔法。あれは『土、土、火』の属性を組み合わせて、小石を真鑄に変えているの。

それで、そのレベルの決め方なんだけど、一つしか属性が使えないのなら『ドット』、二つで『ライン』、三つで『トライアングル』、四つで『スクウェア』ね。

「へえ～、なるほどな・・・」

「ミス・ヴァリエール。お喋りをしている暇があるのなら、貴方は実践をしてもらいましょう。」

「――ええ――――――」

先生がルイズ当てると、一同騒然となつた。

「あの、先生・・・止めておいたほうが・・・」

一人の男子生徒が進言する。

その発言にクラス全員で同意して頷く。

「どうじうことだ？」

俺は不思議に思ひとルイズが小さな声で言つた。

「今にわかるわ。」

そう言つてルイズは先生の元に向かう。

「ではミス・ヴァリエール。 錬金したい金属を強く思い浮かべるのです。」

先生の言葉に頷き、ルイズは杖を構えた。

「ルイズ！やめて！」

キュルケが注意したが、ルイズはやめようとしない。

「黙つて！気が散るから。」

そう言つてルイズは杖を振るう。

「ドカーン！！」

ルイズが杖を振るつた瞬間、教室が爆発した。

ルイズが起こした爆発により、先生は黒焦げになつて倒れ、教室は

パニックになる。

「だ、だから言ったのよー」

「ちょっと失敗したみたいね・・・」

キュルケの言葉を聞き、そっぽを向いて類のついた煤を落とすルイズ。

ちなみに俺はあらかじめ予想していたので、『一方通行』の能力で爆風を反射したので被害はゼロだ。

「ビijoがちょっとだよー『ゼロのルイズ』！」

「そりだそりだ。今まで魔法の成功確立ゼロの『ゼロのルイズ』！」

いつもの事なのか、揃って全員ルイズを非難する。

バン!!

俺は飛ばされる野次に切れて机を叩く。この時、叩いた机が壊れたが、そんなの知ったこっちゃない。

「黙れ貴様等!!!!お前等にルイズの何がわかる!第一、魔法は成功しているじゃないか!」

「魔法は成功しているって?鍊金の魔法が爆発して失敗したじゃないか!」

「「「「そうだー!そうだー!!」「」」

生徒の反論に賛同意する。

「確かにルイズは鍊金の魔法は出来なかつた。だけど、爆発という魔法は唱える事が出来た！」

本当に失敗しているのなら、そもそも魔法は発動しないんじやないのか？

そこそこどうなんだよ？誰か説明する事の出来る奴はいるのか！」

「…………」

俺の言葉を聞いて皆しへんとなる。

「ほら見ろ！誰も答えられないじゃないか！なら、今後一切魔法の事でルイズを侮辱するのはやめてもらおう。」

俺の発言でクラスは黙り込む。

「沈黙は同意したと取るがいいよな？  
だがしかしながら、先ほどの我が主の魔法で皆に危害を及ぼしてしまつたのもまた事実。

僭越ながら使い魔である俺が、みんなの怪我の治療をしよう。」

そう言つて俺は魔法を詠唱する。

「紡ぎしは慈愛。母なる御手みてをかざす光の奇跡。聖なる煌き、我等を癒せ！『ナース』」

俺は広範囲対象指定型回復魔法『ナース』を使い、先生を含め生徒達全員の治療をしていく。

「ふう。これでいいな。さてルイズ。先生を運ぶぞ。学校なら医務室ぐらいいあるんだろ?」

そうつ言いつて俺は倒れている先生を担いで、ルイズと共に教室を出た。

そして、俺達はショーヴルーズ先生を医務室に運び、今回の件を学院長に報告し、その件の罰、『教室の修復』に取り掛かるため再び教室にやつてきた。

教室に着いたのは夕暮れに差しかかろうとしていた時間帯なので、教室には誰もいなかつた。

「やつぱり、今一度見ると酷い有様だなこれ。」

「わ、悪かったわよ。でもその、あ、ありがと・・・」

「ん? なにが?」

「その、教室で私を庇ってくれて・・・」

「庇ってくれてつい、どうのいとへマリゴルヌの方? それとも、あの爆発魔法の方?」

「りょ、両方……」

「別にいいよ。マリコルヌの方は先生にも言つた通り、ついカツとなつただけだし、爆発魔法の方は事実を言つたまでだ。」

「うん。それでも、私……嬉しかった。」

そう言つてルイズは恥ずかしそうにしながらも嬉しそうな笑顔をくられた。

「べ、別に、使い魔として当然のことをしてただけだろ。」

ルイズの不意打ちの笑顔に、俺は不覚にもドギマギしてしまった。

（やつべ～、今の笑顔はやばかった……やっぱあいつ可愛いよな・  
・・）

「そ、そんなことより、早く片付けるぞ。つと言つても、この有様  
じゃあなあ～・・・」

俺はボロボロになつた教室の状況に絶望した。

「しゃあない。裏技使つうか・・・」

「裏技？」

「ああ。俺流の錬金魔法。」

「錬金！？アンタ錬金魔法まで使えるの？」

「ああ。俺は鍊金つて言つより『鍊成術』つて呼んでるヤジな。」

「『鍊成術』?」

「そ。まあ見てな。」

俺はルイズを下がらせて、パンッと手を合わせ地面に手をつける。

バチツバチツバチツ

激しい光とスパークが教室を包み込む。

そして、光とスパークが止むと元通りになつた教室の姿があつた。

「な、何よこれ!凄いじゃない!」

ルイズが元に戻つた教室を見て驚く。

「まあな。でもさすがにさつき罷戻えられたばかりで、もう終わりましたじや怪しまれるから、この教室で適当に時間潰してから報告に行こうぜ。」

「え? 何でよ? 早く報告に行きましょ?」

「あほか。俺のさつき使つた魔法をどう説明すんだよ。それに、ルイズが魔法使つたつて言つのも無理あるだろ?」

「何で? アンタが魔法使つたつて言えばいいじゃない?」

「ダメだ。この魔法は切り札なんだ。なるべく秘密にしたい。」「

「何で秘密なのよ？こんな魔法が使えるって知つたら、みんな私たちを見直すわよ…」

「そんな物に興味はねーよ。学院内ならまだいいが、万が一この事が国にでも知れてみる。間違いなく戦争の道具にされるぞ？」

「それこじいいじゃない。お国の為にその力が使えるなら、貴族の本望よ。」

（ダメだこいつ・・・早く何とかしないと・・・しかしさすが貴族だな・・・簡単に死ねるって言いやがる。）

「あほ！命を粗末にするな！大体、何がお国のために！死んじまつたらお国も何もねーじゃねーか！」

「お国の為に死ぬのは貴族の本望よ…」

「お前馬鹿だろ？そういうけどな、お前は一度でも亡くなつて後に残された人達の事を考えたことがあるのか？」

「そ、それは・・・」

俺の言葉にルイズは言いよどむ。

「考えた事がないのなら今考えろ…

そうだな、例えばカトリアさんがお国のためにと言つて敵国と戦つて、その後敵国に捕まり、ルイズの目の前で見せしめとして殺されたと想像する。

「そんな出来事があつても、お前はまだ名誉だのなんだのって言えるのかよ?」

「そんな・・・そんな事ない！ ちい姉様が戦争に行くだなんて、そんな事ありえない。」

「例えばって言つたろ？それに万が一そんな自体になつたら、俺の全能力を持つて止めるつづーの。」

うん

ルイズは俺の言葉を肯定する。

「あ～つまりなんだ。もし戦争になるような事態になつたら、死に急ぐんじゃなくて、惨めになつても生き延びろって言いたかつたんだ。

生きていれば何うかが心が自に向いても、いかがそれを覺えて事が出来るかもしない。

今までお前が散々黒魔にやれて悔しい思いをしても、悔しくても今まで生きてきたから俺が否定する事が出来た。だから、お前は嬉しかったんだろう？

今までの自分が認めて貰つたつて思えたんだろ?」

俺はなるべく優しい声になるように、ルイズに語り掛ける。

うん

「 な、今日と明日を生きるな。どんなに苦しても、惨めで悔しい思いをしても、きっと救いがあるんだって思つて毎日を生き延びろ。

世界はいつだって、死に急ぐ奴より、泥にまみれてもなお、前を向いて生きていける奴にだけ神様は微笑むもんなんだよ。  
だから、決して死に急ぐな！約束・・・出来るな？」

「うん。わかった・・・約束する。」

そして俺達は夕焼けに染まる教室で描きりをした。

「さて、じゃあそろそろ学院長に報告に行くか。もつとい時間帯だ  
る？」

「そうね。行きましょ。」

そして俺とルイズは学院長に報告するため、夕暮れの教室を後にした。

## ルイズの魔法、夕焼けの約束（後書き）

ちょっと後半は強引だったかなと思っています。

それと、初感想ありがとうございます。

これからもがんばりますのでよろしくお願いします。

## 微熱のキュルケ

教室の修復を終えた俺は、ルイズが食事に行つたので、俺も食事を取る為にマルトーさんちがいる厨房へと足を運んだ。

「マルトーさん。何ますか？」飯賣いに来ました。」

「おう！我等が剣じゃないか！昨日は姿が見えなかつたんで心配してたぞ。我等が剣。」

「ああ、すいません。昨日はちょっと野暮用でして、ルイズの実家に行つてたんですよ。」

それより、我等が剣つてなんですか？」

俺はマルトーさんの言葉に嫌な予感がして、一応念の為に聞いてみる事にした。

「我等が剣つてのはマモルのことだ。」

お前はメイジだが、他の貴族とは違ひ偉ぶらねーし、何より俺達をあの貴族から本当に守つてくれた。」

それに、マモルは魔法を使わずに剣技だけで貴族を倒した。我等平民の誇り、我等の剣だ。」

「守つた？何の話ですか？」

「隠すなつて我等が剣。あのいけ好かない貴族の事に決まつて いるじゃなーか！」

「ああ、もしかしてギーシュとの決闘の後に割つてきた貴族の事で

すか？

あれ？でもあの時、亞さんを守った記憶がないんですけど？」

「確かに、あの時は俺達も貴族の魔法に巻き込まれた。けどマモルはその後、俺達を含めあの場に居た全員の傷を治してくれたじゃねーか。

俺達はあの時、お前の姿に感動したんだ。どうしてくれたる我等が剣。

」

がははと笑い、マルターさんは俺の肩に腕を回す。

「こや、あの時は当然のことをしたまでですかり・・・」

「聞いたかみんな。真の達人ってのはこんな風に偉ぶらねーもんだ！つーん・・・さすがだ。」

そう話に聞こえる風にマルターさんが言つと、その場に居た全員がその言葉に賛同する。

「ますます氣に入つたぜー！我等が剣！ぜひとも俺に接吻させてくれ！ん～・・・」

「え？ちよ、ま、まつた！それ勘弁！…」

必死に抵抗するが、マルターさんのガツチリした腕の拘束からは逃れられない。

（つまつた。肩に腕を回したのは、このための布石か…）

なんて馬鹿な事を考えていても、マルターさんは俺に接近してくる

わけで・・・

気が付いたら、マルトーランの脣が数回まで迫っていた。

「ストップ――――――」

ショニック

俺は咄嗟に『空間移動』テレポートを使い、マルトーランを少し離れた位置に移動させた。

ド・シン・ツ

マルトーランは咄嗟の出来事に対応できず、そのまま地面に倒れ、床と熱いベーゼを交わしたのだった。

「はあはあ・・・あ、あぶねー。」

俺は自分の脣が守れた事を喜んだ。

そしてマルトーランは、ゆっくりと起き上がり

「うへん・・・奥ゆかしい。さすがだ・・・」

何て事をせざきやがつた。

その後、シェスタが持つてきてくれた夕食を食べ、俺はルイズの部屋に向かった。

「はあ、食つた食つた。」

少し食べ過ぎ気味なお腹をさすりながら、俺は階段を上り終えると、そこに待つていたのはキュルケの使い魔『フレイム』だった。

「お？ フレイム。こんな所で何してんだ？ もしかしてご主人様に追い出されたのか？」

俺はヴィンタールヴの能力を使いながら話しかけた。

『違うよ。僕は君を待つてたんだ。』

フレイムは『キュルキュル』と言いながら俺に近づく。

「俺を？ 何でまた？」

『じ主様に連れて来るようになされたんだ。って、人間なのに僕の言葉がわかるの？』

フレイムは普通に会話している俺に驚いている。

「ああ、わかるよ。俺はちょっと特殊だからな。」

『そなんだ。それで、一緒に来てくれる。てか一緒に来てー。じゃないと僕、ご飯抜きになっちゃう。』

「あ～わかったわかった。行く。ついて行ってやるから、そんな泣きそりな顔で服引っ張るな。伸びるだろ？」「

『ホント？ ありがと！』

そう言つて俺とフレイムは、キュルケの部屋に向かったのだ。

『主人様ただいま。マモルつれてきたよ。』

キュルケの部屋に向かう途中に自己紹介をしたら、すっかりフレイムに懐かれてしまった。

そして俺は、キュルケの部屋をノックして中に入った。

「いらっしゃい。ようこそ私のスワイートルームへ。  
マモル・カ・ミシ・ロ？ マモ・ルカ・ミシロだったかしら？」

なんか変な名前になりそうになつたので、俺はキュルケが間違つて覚えている俺の名前を修正する。

『マモル・カミシロ！ 呼びづらかったらマモルでいいぞ。』

「わかったわ。マモル・・・』

そう言って、キュルケはしなを作る。

(おー。フレイム。聞こえるか？聞こえているなら返事をしや。)

俺は能力の一つ、『精神感応<sup>テレパス</sup>』を使いフレイムに話しかける。

正直幻獣相手に通じるか不安だったが、フレイムがびっくりした様子でキヨロキヨロしていたので、俺はそのまま続ける事にした。

(慌てるなフレイム。俺だ。マモルだ。わかったのなら心の中で返事をしや。)

『また聞こえた！何これ？ってマモル！？何なのこれ？それより、僕の声が聞こえてるの？』

軽くパニックを起こしているフレイムに対し俺は説明していく。

(ああ。聞こえてる。これは俺の使い魔としての能力の一つだから安心しろ。君に危害を加えるつもりはない。

それより聞きたいんだけど、キュルケつていつもあんな感じなのか？返答は心の中で呟いてくれ。俺に聞こてるから。)

『わ、わかった。えっと、『主人様の事だよね？うん、大体はいつもあんな感じだよ。』

まだ少し戸惑っていたが、フレイムはキュルケを見て言つ。

(わかった。突然話しかけて悪かつたな。)

そう言って俺は『精神感応<sup>テレパス</sup>』を切つた。

「ちょっと、マモル聞いてるの？」

フレームと会話をしていたら、キュルケが怒っていた。

「あ、ああ。悪い聞いてなかつた。それで、一体今日は何のようだ？」

この先の事は予想できるが、聞いてみないと話が進まないので、キュルケの聞いてみるとした。

「もう、急にぼうつとしちやつて・・・あ、もしかして私に見とれてた？イケナイ人ね？」

「いや違つから。それで、早く話を進めてくれないか？これでも忙しい身なんだが・・・」

勘違いしているキュルケに俺は催促をする。

「もう、せつかちさんね。あのね、私恋をしたの。」

「ああそう。何？恋愛相談？悪いけど俺はそういうのはちょっと・・・」

やんわりと否定してみる。

「違うわ。私、貴方に恋をしたの。まったく、恋はいつでも突然ね？」

「あ～そっすね。」

あまりにも予想通りだったので少し呆れる。

「でも、私の一つ今は『微熱』。松明にみたいに燃え上がりやすいのー。」

そう言いながら俺に近づいてくるキュルケ。

「貴方がギーシュを倒したときの姿、かつこよかつたわ。あの時から、『微熱のキュルケ』は『情熱のキュルケ』になってしまったの。

私も、貴方の炎に抱かれたいわー！」

（炎に抱かれたい？ああ・・・淨破滅焼闇の時の台詞か。上手い事言つな・・・）

そんな考えをしていたら、俺はキュルケに押し倒された。

「イケナイ事だとは思つわ。でももづ、燃え上がる恋の炎は止められないのー！」

そう言ってキュルケは、俺にズンドン顔を近づけていく。

「ちよっと落ち着こうかー待てキュルケ話しあおつ・・・ー！」

「キュルケ！」

俺がキュルケの行動に慌てていたら、恋のほづからキュルケを呼ぶ声がした。

「あら、ステインクス？」

「待ち合わせに君が来ないから、来てみれば……」

窓の外には、男子学生が浮いていた。

（ハハ）、「3階だよな……？」

「じゃあ、2時間後に変更して？」

男子学生の言葉にキュルケはさうりと言つて、なんと言つたか……慣れてる？

「話が違つて！」

怒つてこむ男子学生にキュルケは杖を振るつ。

すると、キュルケの杖から出た炎が男子学生を焼き、男子学生を擊ち落とす。

「今のは？」

「ただのお友達よ。

とにかく、今一番私が愛しているのは……」

「キュルケ！」

また窓のほうから声が聞こえたので見てみると、今度はさうりと違う生徒が同じように浮いていた。

「その男は誰だ！今夜は僕とはげす……ぐわ！」

男が台詞を言い終える前に、キュルケの魔法が男子生徒を襲つ。

「今のも……お友達？」

俺は呆れてキュルケに言う。

「そうよ。とにかく夜は短いわ。貴方との時間を無駄に過ごしたくないの……」

そう言つてまた俺に顔を近づけるキュルケ。

「……キュルケ！……」

三度窓の外から声がした。

「……何してる……！恋人はいな……！」

「

（おお、凄いシンクロ率だ……）

なんて馬鹿な事を考えていたら、さすがに予想外だったのか、キュルケも少し慌てた様子で言う。

「マニカン、エイジャックス、ギムリー……と、じゃあ6時間後に

・

「……朝じゃないか……！」

「

(「もひともで・・・）

「むひ。フレイム。」

そつまつてフレイムにキュルケは指示を出す。

そして窓にいた三人は、フレイムの炎で轟ち落とされた。哀れだ・・・

「おいおー・・・

その光景に強然としている俺にキュルケはまた顔を近づけながら言う。

「愛しているわ・・・マモル。」

「ん~」とキスの体制で迫つてくるキュルケに、俺はため息を付き  
『空間移動』<sup>テレポート</sup>でキュルケだけをベットに移動させる。

「あれ?マモル?」

突然移動させられたキュルケは、キヨロキヨロと辺りを見回し俺を探す。

「悪いなキュルケ。俺には婚約者がいるんだ。

もし、君が本気で俺を愛してくれるなら、その時は俺は君に全力で

答えよ。」

そう言つて俺はドアに向かう。

「え？ ちょっと待つて……。」

「じゃあね。おやすみ。」

そう言って俺はキュルケの誘惑から脱出した。

「ただいまルイズ。今戻った。」

俺はルイズの部屋に戻ってきた。

「あら、 おかえり。ずいぶん遅かつたわね。」

「ああ、 ちょっとキュルケと会つてな。少し話をしてた。」

そう俺が言つと、ルイズは驚いていた。

「キュルケと？ アンタ、キュルケに変な事はされなかつた？」

「ん？ 別に何もされてねーよ。」

(うん嘘は言つてない。嘘は……)

疑わしい目で見るルイズに、俺は話を変えて気を逸らす事にした。

「所でルイズ。カトレアさんに病氣も治つたことだし、前に言つて  
いた通り俺に剣を買つて欲しいんだが・・・」

「え？ああそだつたわね。明日は丁度虚無の曜日だから、明日買  
いに行きましょ。」

「わかつた。じゃあ俺はルイズの洗濯物を片付けてから寝るわ。ル  
イズは先に休んでな。おやすみ。」

「わかつた。おやすみマモル。」

そう言つて俺は洗濯籠を持つて、外に出た。

洗濯場所に付いた俺は、鍊成術で洗濯機を出してルイズの洗濯物を  
洗う。

「しつかし、昨日の夜にカトレアと二人で何か話してたみたいだけ  
ど、アレからルイズも変わつたな。」

思い出すのは主人の事。  
ルイズ

昨日の宴会で、ルイズとカトレアが話をした後から、ルイズの態度  
が変わつたのだ。

「なんつーか、素直になつたつていうか。正直になつたつて言うか・

・「

俺は、少しづつ変わっていく主人の成長に笑みを浮かべる。

（とは言つても、ようやく明日<sup>ルイズ</sup>テル公といつて対面か・・・）

「よつしゃー待つてろよテルフリンガーー！」

俺はまだ見ぬ相棒に向けて声を上げた。

## デルフリンガーと女の戦い

トリステイン魔法学院の『虚無の曜日』

これは学校の休日の事を指す日で、学院にいる生徒は「この日は二つに別けられる。

一つは、学院に外出の許可を取り街に遊びに行く者。

もう一つは学院内で友人と過ごす者だ。

そして俺達は前者であり、今トリステイン王国首都、トリスターニアの城下町ブルドンネ街を歩いていた。

「しつかし、学院から馬で三時間か。乗馬に慣れるために馬を使つたけど、結構疲れるな、これ・・・」

俺は馬で揺られて痛めた腰を擦つていた。

「もう大丈夫? やっぱり能力使つたほうが良かつたんじゃない?」

アレからルイズは、すっかり俺に懐いたのか結構碎けてきて、今は兄のように慕つてくれるようになつた。

「いや、大丈夫だよ。何とも経験だし、ヴィンダールヴの効果でそんなにキツイって訳じやないから。

それにもしても、結構狭いなこの通り・・・」

俺はルイズが大通りだと言つていたこの街を見て感想を言つ。

「これでも結構大きいほうよ？それより、人ごみが多いんだから、スリには気をつけなさいよ？」

「ああ、それなら大丈夫。ルイズから預かったお金は王の財宝に入れてるし……」

そう言つて、俺の懷に手を伸ばしてきたもう何度目かわからぬスリを組み伏せて言つ。

その後、スリを適当にボコつて放置し、『ムーブポイント座標移動』でスリに気づかれない様に財布を抜き取り、ルイズの後を追つ。

「さうなの？なら安心ね。えっと、こっちよ。」

そう言つてルイズは裏通りに入つて行く。

しかし、その通りは汚物にまみれ、お世辞にも清潔とは言えなかつた。

「待てよ……って、汚ねーなこの通り……」

「う、しょうがないじゃない。武器屋はこの先なんだから…えっと、確かピエモンの秘薬屋の隣だったから…」

そう言つてルイズは先に進んでいく。

「あ、あつた。ここだわ。」

目的の武器屋が見つかったので、俺達は中に入る。

「つむは真っ当な商売をしてるんでさあ。貴族やお上に印を付けられるような事なんか、これっぽっちもありませんや。」

ドスのかかった声で言られた。

つーか第一声がそれか？それでも商売人かよ・・・

「客よ。剣を見させてもらうわ。」

ルイズの言葉に驚いたように言つ店主。

「貴族様が剣を？」

「違うわ。使うのは私の使い魔よ。」

「はあ？しかし最近では宮廷でも、下僕に剣を持たすのが流行つていましてね・・・」

早速力モにされたのか、店主がセールストークを言つ。

しかし、ルイズはそれを他所に一本のサーベルを持っていた。

「あの時もつと大きな剣を持っていたわよね？」

ギーシュの時の剣の事を言つているのだね？

「ああ、てかルイズ。危ないぞ？それでも刃物なんだから扱いには気をつける。」

そう言つて、両手で剣を持ち、ヨタヨタしていたルイズから剣を取り上げる。

「もつと大きくて太いのがいいわ。」

俺が剣を取り上げたのが不満だったのか、ルイズが店主に指示を出す。

「お言葉ですが、その御仁にはその位のサイズの剣がよろしいかと。・・」

ルイズの言葉を聞いて、俺が持っていた剣を見て店主が言つ。

「大きくて太いのがいいのと言つたのよ！」

ルイズは大きな声で指示を飛ばす。

「畏まりました。」

そう言つて、店主は渋々店の奥に消えていった。

「おいルイズ。あんな言い方じゃカモにされかねんぞ？」

「聞きはしないと思うが一応注意する。」

「大丈夫よ。アンタがいるじゃない。」

笑みを浮かべて言つルイズ。

(さよか・・・)

信頼してくれるのはいいが、厄介ことは持ち込まないで欲しい・・・

「お待たせしました。」ちいりで、「やれこます。」

店主が持つてきたのは、派手な装飾が施された金ぴかの剣だった。

「こちらが店一番の業物でわあ。この剣を鍛えたのはなんと、あの高名なゲルマニアの鍊金魔術師『シュペー卿』ですぜ。鉄なんか一刀両断ですば。」

「おこくらっ。」

明らかに鈍らだつたが、ルイズがその見た田の豪華さに満足したのか、剣の値段を店主に聞いた。

「新金貨なら二千でさあ

「立派な家と、森付きの庭が買えるじゃないー。」

ルイズがあまりの値段の高さに驚く。

「名剣は城に匹敵しますぜ？ 屋敷で済めば安いもんでもある・・・」

「新金貸田しか持つて来てないわ。」

「つは。まともな大剣なら一百が相場ですわ。なんせ、自分の命を預けるんですからねえ・・・」

その言葉を聞いて、俺は店主に同意する。

「その通りだルイズ。剣を持つと言つことば、すなわち命のやり取りをすると同意だ。だからこそ、武器つて言つのは高く値段が付けられている。」

平たく言つと命の値段だな。」

『おつ、おつた一わかってるじやねーか坊主。』

そう俺が言つと、目的の人物?が現れた。

「え? なに? 誰なの?」

ルイズが突然の声にキヨロキヨロと周りを見渡す。

俺は声のする方向、樽の中に乱雑においてある剣を漁り、目的のブツを手に取る。

「よつ、待たせたな。相棒。」

『相棒だと? つてこりやおでれーた。お前さん使い手か?』

「やつこりとだ。これからようしくな。』

そう言つて、俺はルイズに話しかける。

「ルイズ、これ買ってくれ。この剣がいい。」

「え？ そんなさび付いた剣がいいの？」

「こっちのほうが綺麗でいいんじゃない？」

そう言つて、ルイズはさつきの剣を見る。

「いいんだよこれで。後これも頼むわ。金が足りなかつたらこいつ使つてもいいから。」

そう言つて、俺は投擲用のナイフを10セツトと切れ味の良い短剣を追加して、さつきスリから貰つた財布をルイズに渡した。

「わかったわ。店主、これでおいくら？」

「へ、へえ。その剣は『テルフリンガー』と言うインテリジョンスソードとして、こっちも厄介払いみたいなもんなので、短剣と投擲用のナイフを合わせまして新金貨80で構いません。」

「やうやうならこれでお願いするわ。」

そう言つて会計を済まし、俺達は外に出る。

武器屋から出た俺たちは、休憩のためにカフェに寄つた。

「しかし、アンタ本当にこんな剣でよかつたの？やつぱりあの剣の方がよかつたんじゃ……」

まだ納得が言つていなしルイズに俺は種明かしをする。

「あの剣は儀礼用だよ。どう見ても実践では使えない。」

『その通りだぜ貴族の娘っ子。しかし相棒、よく分かつたな。』

俺の回答にデルフが驚く。

「まあこれでも剣士だからな。一応そつこつのはわかるんだ。」

まあ実際には原作を知っているから答えられたのだが……

「へえ、やつぱりアンタつて凄いのね。見直したわ。」

「ありがとルイズ。それよりデルフ。いい加減真の姿を現せ。」

俺はデルフを引き抜いて言つ。

『相棒、俺はずつとこの姿だぜ？真の姿もねーよ。』

「あつやつ。なら思ひ出させてやるよー。」

俺はそつとガングダールヴの力を使い、感情を爆発させる。

『つねおおおー！キタキタキタ！思ひ出したぜ相棒！』

そう言つてデルフリングガーが光り出し、本来の剣の姿に戻つた。

「な、何よこれ！」

ルイズがその光景を見て驚く。

「これもガンドールヴの力か。さ、学院に戻ろ。」

そう言って俺達は学院に戻るのだった。

学院に戻った時には、もうすでに当たりは薄暗く、夜に差しかかるうとする時間帯だった。

「私はこれから食堂に行くわ。アンタも厨房に行つて、マルトーさんから」飯を貰つてきなさい。  
食べ終わったら寄り道せずに、すぐに帰つてくれるのよ。」

そう言って、ルイズは食堂に向かつていった。

俺も厨房に向かい移動をする。

「あつそうだ、デルフ。」

俺はデルフに呼びかける。

『何だ相棒。』

「デルフは俺に刻まれている使い魔のルーンに気づいてるだろ?」

『ああ。ガンドールフにヴィンダールフにミヨズニトニルン。おまけにリーヴスラシル。相棒、一体何もんだ?』

デルフが怪訝そうな声で聞いてくる。まあそうだよな・・・

「俺はしがない高校生だよ。それより、ルイズのことも、気が付いてるだろ?」

『ああ、始祖の再来か・・・だが』

「そう。まだ虚無は完成していない。だからさ、あいつが自分で気づくまで、ルイズが虚無だって事は黙つてくんねーか?」

『そりやかまわねーけど・・・なんでだ?』

「こうこうのは自分で気づかなきや、そいつの為になんねーんだよ。俺は、ルイズに力に溺れて欲しくない。」

そう言つと、デルフは『わかった。』といつてそのまま黙り込んだ。

そうして俺は厨房でご飯を貰い、ルイズの部屋に帰った。

そして、ルイズの部屋に戻ると、何故かルイズとキュルケが睨み合っていた。

「あ、ダーリン！待ってたのよー私、ダーリンに似合つ剣を見つけたからダーリンの為に買ってきたの。」

俺に気づいたキュルケは、真っ先に俺に近づき、先ほどの武器屋で店主が進めていたあの儀礼用の剣を見せた。

「いやダーリンって・・・つーかキュルケ、悪いけど俺にはもう自分の剣があるから。」

そういつて俺は鞘に納まっているテルフを見せる。

「そうよ。マモルにはもうこのインテリジョンスソードがあるんだから、アンタの剣なんか要らないわ。」

そういつて、ルイズも俺に賛同する。

「でもこの剣はゲルマニア製の業物だそうよ？」

剣も女もゲルマニアに限るわね。貴方みたいなトリステインの女が適うわけないわ。」

そういつてキュルケはルイズを挑発する。

「ぐ、へんだ！ アンタなんかゲルマニアで男を漁りすぎたからって、わざわざ隣の国に留学してきたんでしょ？」

そうして、売り言葉に買い言葉になつてしまつた二人は同時に杖を抜く。

「言つてくれるじゃない？」

「本当の事じゃない？」

まさに一触即発。

しかし、二人の杖は風の魔法で取り上げられる。

「室内……」

そう言つて、やつから『我れ関せず』といった感じで、ずっと読書をしていた青髪の女の子が言つ。

「やつから『氣になつてたけど、誰よ』の子……」

「私の友達よ。」

ルイズの疑問にキュルケが答える。

（お前等本当は仲いいだろ？）

つい先ほどまで喧嘩をしそうになつた二人の態度に、俺は心の中で突つ込む。

「じゃあマモルに決めてもうこましょつ?」

そう言ってキュルケは俺を巻き込む。

「そんな事しなくて、マモルは私が買った剣を取るに決まってるじゃない?」

ルイズは、馬鹿馬鹿しいといつた様子でキュルケを挑発する。

「なんですって? ねえダーリン。そんな事ないわよね?」

キュルケはルイズの挑発を真に受けて俺に尋ねる。

「マモル。構わないから、その男も剣も田利きが出来ないゲルマニア女に言つておやりなさい。」

そう言ってルイズは俺に言つので、仕方なく説明する。

「つたく、痴話喧嘩で俺を巻き込むなよ。あーとなキュルケ。その剣は儀礼用の剣で、中味は鈍らだぞ?」

俺の言葉にショックを受け、キュルケは膝をつく。

「そ、そんな・・・この私がルイズに劣るなんて・・・」

「お~ほほほ、残念だつたわねキュルケ。その剣は貴方と同じで、見た目は豪華でも中味は鈍らなのよ!」

そう言って、じいじーとばかりにルイズが勝ち誇る。

その態度にキュルケは「キツ」とルイズを睨み、立ち上がる。

「いい機会だから教えてあげる。私ね、あなたの事が大ッ嫌いなの。

4

「気が合うわね。実は、私もよ。」

そして二人は睨み合い・・・

「「決闘よ！-！-！-！」

「マジ? つーかルイズ。 やめとけよ、 最悪死人が出る。」

俺は呆れてルイズに注意する。

「…めなこで…女にはね…やうなせも…けない時つて…のがある  
の…」

俺の言葉にルイズが激怒する。

「 そうよダーリン。それにちゃんと手加減はするわ。さすがに私も人を殺すのは目覚めが悪いし・・・ 」

ルイズの言葉を聞き、キュルケはルイズを挑発しながら言う。

「いや、俺が心配してるのはルイズの方だつて・・・なあ君、何か安全に決着を付けられる方法はないか?」

俺は読書をしている青髪の少女に尋ねる。

「ああ。」

そう少女は言つて、今回の決闘の対決方法を決定していった。

二人の決闘の内容は、俺にとつてとてもなくはた迷惑な内容になつた。

青髪の少女、タバサが決めた内容は、塔の上からロープで縛られた俺が吊るされた状態で、先に魔法を使って吊るされたロープを切つた方が勝ちと言う内容になつた。

「何でこんなことになつてるんだね？・・・」

俺は思つたことを口に出し、この決闘の内容を決めたタバサを見る。しかしタバサは、「私関係ありません」と言いたげな顔で、自分の魔シルフィードに乗つて月明かりの読書を楽しんでいた。

「ふん。『ゼロのルイズ』には、少し不利な内容になつたのかしら？いいわ、ハンデとして貴方が先にやりなさいな。」

「はん。後悔しても知らないんだから。」

そう言つて杖を構えて俺を睨み付ける。

「ちょっと待てルイズ！早まるな！」

俺は必死に抵抗するが、ルイズは聞き入れようとしない。

「つるさいー黙つてー！」

そう言つてルイズは俺目掛けて杖を振るつ。

ドカーン！

俺のすぐ後ろで爆発が起こり、塔の壁が破壊される。

「あはは、ダメじゃないルイズ。せっかくのチャンスだったのよ？」

そつ言つてキュルケは杖を振るい、俺が縛られているロープを焼き切る。

「うわあああー！」

焼き切られるロープ。

それはつまり、縛られている状態で空中に投げ出されるわけで・・・

そして、この世界にも重力というものは存在するわけで・・・

俺は重力に従い地面に落下していく。

「クソが！ふざけんな！」

俺は地面とぶつかる瞬間に、間一髪で『空間移動』テレポートを使い、縛られ

ている状態で無事に地面に着陸した。

「アブねーだろうが！」

「「「」、『めんなさい』。」」

俺の怒りに一人は素直に謝罪する。

「でもルイズ。 わかつてはいたけど私の勝ちね？」

そう言つて勝ち誇るキュルケに、ルイズは悔しそうにする。

（はあ・・・・フォロー入れとくか。）

「そうだな。 今回はキュルケの勝ちだ。  
でも良かつたなキュルケ？ こんな決闘の内容で・・・」

「どういう事よダーリン？」

俺の言葉を聞き、不思議そうにキュルケは言つ。

「俺とギーシュがやつた時みたいな決闘だつたら、最悪お前死んで  
たぞ？」

「「「どうこう」と？」」

俺の発言にルイズまでもが不思議そうにする。

「それはな

「

ガーンー！

俺がその答えを言おうとしたら、学院の方から壁を殴ったような凄まじい音がした。

「な、なんなのよあれ……！」

ルイズが叫ぶと、そこにいたのは巨大なゴーレムだった。

そのゴーレムを見てキルケが驚いて叫ぶ。

「見て、人が乗っているわ。」

暗闇で体格まではわからないが、ゴーレムの肩には何か箱のような物を持った人の姿があつた。

そして、ゴーレムはそのまま学院の壁を跨ぎ、闇の中へと姿を消していった。

## 虚無の可能性

『破壊の杖、確かに領收回しました。 土くれのフーケ』

土くれのフーケ。

トリステインはじめ各国の貴族に知られるメイジの盗賊。

二つ名の「土くれ」は、盗みを働く際に鍊金魔法を使い、防衛魔法のかかつた壁などを土くれに変えることから付けられた。

貴族が所持する秘宝、特に稀少なマジックアイテムを好んで狙い、盗んだ跡には大書された領収のサインを残してゆく。これは秘宝を盗まれた貴族たちの慌てふためく様を見たいがためである。

盗みの手段として、夜陰に紛れての手段のほか、時には身の丈30メイルにも及ぶ巨大な土ゴーレムを作り出し、大々的な破壊活動の末に強奪する場合もある。

トライアングルクラスの優秀なメイジだが、体術にも相当の心得がある。

俺は今、学院の図書室に忍び込みフーケの報告書を見ている。

どうしてこんな事をしているかといつと、昨日の夜の件が原因だ・・

昨日のルイズたちの決闘の時に現れたのは、土くれのフーケだったことが判明した。

そして俺達は今、フーケの目撃者だったので学院長に呼び出されていた。

んでもって、原作通りに先生同士で責任を押し付け合い、オスマン学院長の鶴の一聲で責任を押し付けた先生達は静かになつた。

「ふむ。ではフーケを捕らえて名を上げたいと思つ者はおらんか？我と思つ者は杖を掲げよ。」

オスマンがその場に全員に尋ねたが、誰も杖を上げない。

「はい。私が行きます。」

（ですよね～・・・）

杖を上げない先生達に代わつて、ルイズが杖を掲げる。

「私も参りますわ。」

そしてつらるるようにして、キュルケも同様に杖を掲げる

「ツェルプスター？」

「ふん。ヴァリエールには負けられませんわ。」

「あ、あんたね～・・・」

対抗心むき出しで二人は睨み合つていたが、キュルケは自分の友人が杖を掲げているを見た。

「タバサ？ 貴方はいいのよ？ これはあたし達の問題ですもの。」

「え？」

キュルケの言葉にルイズもタバサの行動に気づく。

「二人が、心配。」

「タバサ・・・」

「あ、ありがとう・・・」

タバサの言葉に、キュルケとルイズは感極まつた言葉でそう言つた。

「ふふ、では三人に頼むとしよう。」

三人の様子を見ていたオスマンは満足そうに言つ。

「この三人はフーケの目撃者だ。その上、ミス・タバサは若くして『シユバリエ』の称号を持つ騎士ナイトでもある。」

オスマンの発言にルイズとキュルケが驚く。

「ええ！ナイト！」

「本当なのタバサ？」

一人の言葉を聞き、タバサは頷く。

「さらに、ミス・ツェルプストーはゲルマニアの優秀な軍人の家系で、彼女自身の炎の魔法もかなり強力だと聞いている。」

そう言つてオスマンが続けると、キュルケは直ぐに胸を張る。

「そして・・・オホン。その、ミス・ヴァリエールは優秀なメイジを輩出したヴァリエール家の息女で、え～その、なんだ・・・」

ルイズの紹介の時に、ルイズは堂々と胸と張つていたが、オスマンが言い淀んだので不思議そうな顔をした。

「将来有望な・・・おおーそうであった。」

オスマンは名案とばかりに手を叩き、急に滑舌になる。

「その使い魔は、グラモン元帥の息子であるギーシュ・ド・グラモンを圧倒するほどの剣の使い手だと聞いておるぞ。」

オスマンは俺を褒めるように言つと、その言葉を聞いたルイズは俺を睨んでくる。

「さうでした。彼は伝説の『ガンダ』』

そこまで言つてコルベールは口を押さえる。

「魔法学院は、諸君等の努力と貴族の義務に期待する。」

そう言つてオスマンは杖を掲げると、ルイズたち二人もそれにして杖を掲げる。

「どうで、ミス・ロングビルはどう? 朝から姿が見えませんが・  
・」

そうコルベールが言つと、学院長室のドアが開いた。

「私はここにいますわ。ミスター・コルベール。朝から学院が騒がしかつたので聞いてみると、宝物庫が襲われたと聞きました。私は急いで近隣の調査に向かい、村で聞き込みをしてフーケの居場所を突き止めましたの。」

その発言に室内が騒然となる。

(ホント、よく言つよ・・・)

「さすが、ミス・ロングビル。仕事が早いの。」

オスマンは感心した様に言つ。

「それで、村の情報を頼りに私がフーケの似顔絵を作つてみました。」

そう言つてオスマンに紙を渡すロングビル。

その紙を見て、オスマンは俺達にもその男似顔絵を見せる。

「これはフーケです。間違ひありません。」

ルイズの発言にキュルケとタバサが頷く。

「フーケが潜伏している場所まで、私が馬車で先導します。学院長、

よろしいですね？」

「「つむ。氣をつけるのだぞ。」

さつ雪ひでオスマンは許可を出す。

デルフを持つて学院の正門に向かうと、そこにはロングビルが馬車を用意して待っていた。

そして全員が集合したので、フーケの潜伏先まで出発したのだ。

「なあルイズ。さつき学院長が言つてた、タバサが持つてる『シユバリエ』の称号ひで、そんなに凄いのか？」

俺は馬車に揺られながら、さつきの学院長室でのやり取りを思い出しルイズに聞く。

「『シユバリエ』つて言つのは、国に多大な功績を残した人に送られる騎士の称号よ。これを持つ人は、平民でも貴族になれるのよ。」

「へえ、なるほどね。しかし、今から退治しにいくフーケって言う盗賊は魔法使いなんだろ？何で貴族が盗賊なんてやつてるんだ？」

「メイジが全員貴族という訳ではありませんわ。様々な事情で、貴

族から平民になつた者も多いのです。

その中には、身をやつして傭兵になつたり、犯罪者になる者もありますね。

この私だつて、貴族の名を無くした者だし……」

「え？」

ロングビルの言葉を聞いてルイズが声を出す。

「だつて、ミス・ロングビルはオールド・オスマンの秘書なのでしょ？」

「オスマン氏は、貴族や平民とつたことに拘らない人ですから。」

「では、どういった事情で貴族の名を？」

キュルケが好奇心でロングビルに聞く。

「やめなさいよ。キュルケ。」

その行動にルイズが注意する。

「さうだぞキュルケ。それに、少しばかり秘密を持った女性のほうが、男は魅力を感じるものだぜ？」

俺の言葉を聞いて、キュルケは渋々ながら諦める。

「あら、ミス・ヴァリエールの使い魔さんはお上手ですね。」

にっこりと笑顔で言われた。

そんな会話をしていたら、ふいにタバサに服を引っ張られる。

「昨日の、話の続き。」

「昨日の?何の話だ?」

俺は突然言われたのだが、主語がわからないので話についていけない。

「あー、そうだわダーリン。結局フーケのせいで聞きそびれたけど、昨日の夜、あの時なんて言おうとしたの?」

「え?ああもしかして、キュルケがルイズに勝てない理由の事か?」

「そうよ。何で私がヴァリエールに勝てないのかちゃんと教えてよね。」

「その話なら、私も興味があるわ。」

そう言つて俺は三人の視線を浴びる。

「あ~わかったわかった。この話は俺の完全な推測だけど、それでいいなら話してやるよ。」

「と、その前にタバサ、お前は騎士なんだろ?という事は少なからず実戦経験あるよな?」

俺はそうタバサに尋ねると、タバサは頷く。

「じゃあタバサに質問だ。ルイズとキュルケも一緒に考えてくれ。

ある一人が決闘することになる。

一人は優秀な火のメイジで、呪文を唱えて杖を振るい、杖の先から目に見える強力な火を操り、相手を攻撃する。

一方、もう一人のメイジは、メイジとしては落ちこぼれで、杖を振るつても失敗ばかりで、狙った空間を爆発するだけ。さてここで問題です。

一人は強力で目に見える攻撃を、もう一人は、同じく強力だけど、目に見えない攻撃をするメイジです。

危険で対処がし辛いのはどっちでしょ？

俺の質問にキュルケとルイズは考え込み、タバサは答えを口にする。

「後者。見えない攻撃はそれだけで危険。」

「正解。この質問は前者がキュルケで、後者がルイズだ。二人ともわかつたか？特にルイズ、お前の魔法はさつき言つたように危ないものなんだから、扱いには気をつけろよ。」

そう説明した俺に対し、キュルケは納得がいかないのか声を上げる。

「ちょっと待つてダーリン。それだけじゃ納得できないわ。もっと詳しく説明して頂戴。」

「はあ・・・わかつたよ。いいか？さつきも言つたけど、ルイズの魔法はこと戦闘においてはそれだけで危険なんだ。

キュルケ、お前戦闘において見えない攻撃にどう対処する気だよ？」

「そ、それは・・・」

俺の質問にキュルケは言いよどむ。

「俺はこの前、ルイズの爆発魔法を初めて見た時に正直焦ったよ。ただ杖を振るつだけで教室を一つ丸ごと吹き飛ばすあの威力。それに、その後確認したら、杖の先だけでなく離れた場所でも爆発を起こせる。

これで指定した所に爆発させられる魔法制御能力と、爆発の規模を自由に操れる精密性をルイズが習得したら、間違いなく一対一なら最強の存在になるぞ？

一対多数の戦闘においてもやり方さえ覚えれば、化け物級の実力者になれる。

キュルケも軍人の家系に生まれたらのなら、このヤバさはわかるだろ？」

俺の言葉に、キュルケは黙り込む。

「アンタ、あの時中庭で私に魔法を使わせたのはこの為だったのね

「ああまあな。これでお前の魔法が如何に危険になるのかがわかつただろ？」

「うん・・・」

そう言つてルイズは黙り込む。

「で、でもダーリン。それだけじゃ納得できないわ。」

「あのなあキュルケ。いい加減現実を直視しろ。

確かに今はお前の方が魔法の才脳もセンスも上だらうけど、将来は確実にルイズに抜かれるぞ？

さつき俺が言つたことをルイズが習得したら、俺でも一対一じゃ勝つことは出来ないんだ。

例えばキュルケ、お前はどこから来るかも、爆発の規模もわからないう攻撃にどう対処する？それに、杖を振るうという行為も重要だ。この行為は簡単にフェイントに使えるんだ。杖を振るつた瞬間、逃げるようすにその場を回避したが、実はそれがフェイクで回避先を爆発されたら終わりだぞ？

そんなの、俺でも「めんこ」うむりたいわ！」

そこまで言つと、キュルケはようやく納得してくれた。

「お話中失礼。フーケの潜伏先が見えてきました。」

そうして俺達は、フーケの潜伏先である炭焼き小屋に到着したのだ。

## 虚無の可能性（後書き）

実際にそう思います。

虚無には色々な説がありますが、やっぱ強力だと黙りの作者でした。

## 土くれのフーケ

フーケの潜伏先である炭焼き小屋に着いた俺たちは、近くの茂みに身を隠し作戦を練っていた。

「それで、誰が偵察に行きますか？」

「すばしっこいの。」

ロングビルの言葉にタバサが答える。

そして、俺に全員の視線が集まる。

「わかった。行くよ、行きますよ・・・」

（どうせいいなるんだよな。つたく・・・）

心の中で悪態をつきながら炭焼き小屋に向かつ。

（どうせ人はいないし、さつさと破壊の杖を回収してゴーレム戦と洒落込みますか・・・）

そう考え、俺は中を覗き込み、ついでに魔法を使って罠がないか確かめる。

「おーい。誰もいないみたいだぞ？」

そう言つて茂みに隠れてたルイズたちを呼ぶ。

そして、俺、キュルケ、タバサで中に入つて調査をし、ルイズが見張り、ロングビルが周囲の探索をしにいった。

# 「破壊の杖。」

しばらく探索していると、タバサが原作通りに破壊の杖を見つけた。

「！」・！・！・！

二二二

ルイズの悲鳴と共に炭焼き小屋の屋根が吹き飛び、巨大なゴーレムが姿を現した。

そして、キュルケとタバサは魔法を唱えてゴーレムに応戦するが、まったく歯が立たない。

そして、ルイズがゴーレムに向けて杖を向ける姿が、目に飛び込んできた。

「馬鹿！ 何やつてんだー。やつれと逃げろー。」

「嫌よ！ アンタ私が強くなれるって言ったじゃない！ それに、私は貴族よ！！」

魔法が使えるのを貴族と呼ぶんじゃないわ！ 敵に後ろを見せない者を貴族と呼ぶのよ……！」

そう言つてルイズは杖を振るい、爆発魔法がゴーレムを襲う。

しかし、ゴーレムの方にはダメージがなく、逆にルイズに標的を絞

られる結果となつた。

(つむり…さつき話したことが裏田に出たか!)

「ルイズ!!」

俺は『瞬動術』でルイズに駆け寄り、そのままルイズを抱え、ゴーレムから距離をとる。

「つたぐ、あの時約束しただろ?死に急ぐなつて……それに、勇気と蛮勇はまったくの別物だぞ?」

「だつて、いつも、いつも馬鹿にされて……アンタに励まされたけど、やっぱり悔しくて……

逃げたらまた馬鹿にされると思ったの……」

「ルイズ……」

そう言つてルイズは俺の胸の中で悔し涙を流す。

「それに……さつきアンタが言つてくれたこと、証明したくて……

・  
アンタの白髪のじ主様だつて、思われたかつたんだもん……」

その言葉を聞いて、俺は恥ずかしくなり照れ隠しに頭を掻く。

そして、シルフィードに乗つたタバサとキュルケが現れた。

「乗つて。」

タバサは短く俺に言ひ。

「キュルケ。うちのご主人様を頼むわ。」

俺はルイズをキュルケに預ける。

「貴方も。」

「いや、俺はうちのご主人様を泣かした、あのゴーレムにお仕置きしていく。」

そうつ言って俺はデルフを抜く。

「早く行け！ それとルイズ、俺はお前を自慢のご主人だつて思つてゐるぜ？」

だから、安心して空から俺の戦いぶりを見てな。」

そうつ言ひと俺はゴーレムに目掛けて駆け出して行つた。

「行くぞデル公！ お前のデビュー戦だ！」

『おつ！ 任せろ相棒！ ！』

そして俺はゴーレムに切りかかる。

「喰らえ！ 神鳴流奥義『斬岩剣』！」

スパー！

俺は斬岩剣でゴーレムの右足を切り落とす。

「もつこつちよー奥義『斬岩剣！百花繚乱！』」

ザン！ スパパパ！

片足を無くしバランスが崩れたゴーレムの体に、俺は斬岩剣の連撃を食らわしていく。

細切れになつたゴーレムは、そのまま地面に倒れた。

ズズーン！

しかし、倒れたゴーレムは地面の土を吸収していく。

「クソー…やっぱ一筋縄じゃいかねーか・・・」

俺は再生するゴーレムを見て悪態をつく。

『相棒。土系統で出来たゴーレムはその再生能力が強みだ。だが、ゴーレムの体のどこかに存在する、魔法の核を潰せば倒せる…』

デルフがアドバイスをくれた。

「わかった。」

そして、俺はゴーレムの核を探す為に再びゴーレムに切りかかった。

一方そのころ、ライズたちはシルフィードの背中の上で、マモルの戦いを見ていた。

「強い」

「本当だわ。ギーシュとの決闘が、まるでお遊びみたい・・・」

タバサとキュルケはマモルの異常な実力に驚きを隠せずにいた。

「やつたー!」ゴーレムを倒したわ!

マモルがゴーレムを倒したのを見てライズは喜んだ。

「待つて。アレを・・・」

「ウソー!」

「そんな・・・再生した?」

マモルが倒したはずのゴーレムが再生したのを見て、三人は驚く。

「これじゃダーリンに勝ち目なんかないわよー!」

キュルケが驚いたまま、不安そうに言う。

そしてルイズは、タバサが持っていた破壊の杖を奪う。

「貸して！」

「何する気？」

突然自分が持っていた破壊の杖を奪われ、タバサは奪ったルイズに尋ねる。

「私を降ろして！」

「ルイズ！！」

ルイズはタバサの質問に答えず、シルフィードから飛び降りた。

タバサは仕方なくルイズに魔法をかけ、ルイズを地面へと降ろした。

俺は「ゴーレムの再生能力に徐々におかれている時、ルイズが空から下りてくるのを目撃した。

「バカ！何やつてんだ！！」

俺は下りてくるルイズに言う。

「マモルから離れなさい！」

しかしルイズは俺の言葉を無視し、ゴーレムに叫び。

「えい！えい！」

そしてルイズは手に持っていた破壊の杖、『ロケットランチャー』を懸命に振るっていた。

それに気づいたのか、ゴーレムがルイズに標的を変える。

「ツチ！ルイズーー！」

俺は瞬動術でルイズに駆け寄り、ルイズからロケットランチャーを奪う。

そしてそのまま、ガンダールヴの効果でロケットランチャーを組み立て、ゴーレムに狙いを定める。

「伏せろーー！」

俺はルイズにそう言って、ゴーレムにロケットランチャーをぶつ放す。

シユ・・・ドーンーー！

凄まじい爆風を受けながら、ゴーレムは完全に破壊された。

俺は、崩れ落ちるゴーレムを見て、ロケットランチャーを投げ捨て

てルイズを振つてぐる石から守る。

ゴーレムが作つた土煙が晴れたのを確認して、俺はルイズの無事を確認する。

「無事か？ルイズ。」

「え、ええ。ありがとう。」

ルイズが戸惑いながら答えると、不意に後ろから衝撃を受けた。

「平民なのに魔法の杖を扱えるなんて…やっぱり私のダーリンね。」

そう言つて俺に抱き付いてきたのはキュルケだった。

「フーケはどうに?」

タバサは、俺達に近づいて言つ。

「あー、ゴーレムがいたつことは、まだこの近くに?」

キュルケはタバサの言葉を聞いて気を引き締めて辺りを見回した。ルイズもタバサの言葉に気づいたのか、キュルケと同じように周りを見回す。

「ふふ、『苦勞様。』

そう言つて、今まで姿を現さなかつたロングビルが、破壊の杖『ロケットランチャー』を持つて言つ。

「ミス・ロングビル。今まで『』って」

ルイズがロングビルに問う。

「『破壊の杖』と『』だけはあるわね?私の『ゴーレム』が、粉々じゃない?」

そつとロングビルは、ロケットランチャーを俺達に向ける。

「私の『ゴーレム』?」

「どういう事?」

キュルケとルイズが戸惑つたように問う。

「そんなの決まってんじゃん。ミス・ロングビルが『土くれのフーケ』だつたつてことだよ。」

俺は戸惑うルイズたちに説明をしていく。

「へえ?使い魔君は私がフーケだつたつてことに気づいてたのかい?」

「ああ、まあな。」

田を細めて聞くフーケに対し、俺は飄々とした態度で問う。

「アンタ!気づいてたのなら教えてさいやー!」

「さつよダーリンー何で教えてくれなかつたの?」

俺の言葉にルイズとキュルケは激怒する。

「いや、だつてあんな矛盾だらけの事言つてたから、ヒツヒツ氣づいているのだとばかり・・・」

俺は戸惑いながら言つ。まあ演技なんだけど・・・

「矛盾だらけ?」

「どういつ事よダーリン?」

一人は俺の言葉を聞き、不思議そうな顔をする。

「へえ・・・どじが矛盾だらけだつて?ゼひとも説明してもひおつじやないか。」

フーケも気が付いていないのか、俺に聞いてくる。

「おいフーケ。お前気づいてないのか?」

さすがに驚いたので、フーケに聞いてみた。

「何にだい?私は完璧にロングビルを演じたはずだよ?」

「おかしなところはない」とでも言いたげな顔で言つフーケに対し、俺はフーケの矛盾を説明してやつた。

「じゃあ説明するけど、昨日俺達はルイズ達の決闘のために夜中に

中庭に出て、その時にフーケを目撃した。ここまではいいな？

俺は確認のために、いつたんここで区切る。

「俺達はすぐにオスマン氏に報告したが、夜遅く宝物庫も暗くて何が盗まれたのかわからない状態だった。

そして明るくなつたその翌日、つまり今日なのだが、早朝にフーケが破壊の杖を盗んだことが学院内に発覚。その後学院全体に知れ渡る。ここまでは何も矛盾はないはずだ。」

俺はそう言つてルイズ達を見渡す。

「そして授業が始まる頃の時間帯、俺達はフーケの目撃者として学院長室に呼び出される。そして俺達は犯人はフーケだったと知らされて、討伐の為に志願する。

んで、問題なのはここから。志願した後にフーケ、お前が帰つてきた。

「

そう言つて俺はフーケを見る。

「フーケお前は言つたよな？朝騒がしかつたから独自で村に調査に行つたと。」

「ああ言つたよ。それがなんだってんだ。」

「村で調査をしたといつことは、学院から村まで行き、村の人から聞き込みをして学院まで戻つてきことになる。

それにお前はフーケの居場所を突き止め、この炭焼き小屋までの場所を迷うことなくきている。つまりそれは、この場所に来たという証拠だ。

さてフーケ、学院でフーケが侵入したと騒がれて、俺達が志願するまでの時間は多く見積もつても4時間が限度。

その間に君はどうやって村に行き、聞き込みを開始して、さらにも馬車で5時間もあるこの場所を確認することが出来、尚且つ帰つてくれる出たのかな？」

そこまで言つとルイズ達も理解したのか、フーケを見た。

「おそれくお前は、昨日その『破壊の杖』を盗んだはいいが、大方使い方がわからなくて仕方なくこの炭焼き小屋に隠し、学院まで戻つてきたんだね。」

しかし、学院に戻つた時はすでにフーケの騒ぎがあり、急いで学院長室に戻つた時にすでに討伐隊が結成されていたから、慌てて話を合わせたんだ。

どうだ？俺の推理、間違つていいか？」

俺は原作で知つたことをそのまま披露する。

「ツク、その通りだよ。さすが『ガンドールフ』ね。でも、結局アンタ達はこの状況から逃れられない。もし、アンタ達が動いたら容赦なく破壊の杖を使う。」

さあ、お嬢ちゃんたちは杖を捨てな。アンタはその剣を捨てるんだ。

「

開き直つたのか、フーケはロケットランチャーに手を当てて言つ。

ルイズ達はさつきのロケットランチャーの威力を見ていたので、素直に杖を捨てる。

「どうした？アンタも早く捨てな！これを使って欲しいのかい？」

剣を捨てようとしない俺にフーケは起つたよつて叫ぶ。

「…」

「マモル！」

「ダーリン！」

ルイズ達が俺の行動に驚く。

「撃てよ・・・」

「何？」

俺はフーケに対し小さく呟く。

「撃てるもんなら撃つてみるつていつたんだー！」

俺の啖呵にその場にいた全員が驚く。

「やつ。ならお望みどおり撃つてあげる。わなわな。」

そう言つてフーケは引き金を引く。

カチッ

ルイズ達は全員顔を瞑つたが、俺はフーケに向かって走り出した。

「あれ？ なんで？」

## カチツカチツ

いつまでも玉が発射しないフーケは焦る。

そして俺はフーケの腹に剣の柄を当て、フーケを氣絶させる。

「残念だつたなフーケ。これは俺の世界の武器で、一回しか使いな  
い単発式なんだ。」

そう言つて、俺は倒れたフーケを抱える。

「これで今回の事件は無事終了だな。」

そう言つて俺はルイズ達に笑みを浮かべた

その後、俺はルイズに『破壊の杖』を預けて、シルフィードにルイ  
ズ達を乗せて先に学院に帰らせた。

「アンタ本当に大丈夫？ 気絶しているとはいえ、フーケと二人きり  
だなんて。」

ルイズがシルフィードに乗りながら言つ。

「大丈夫だよ。それより、早くこいつを持つて学院長に報告しな。」

そう言つて俺は『破壊の杖』を渡す。

「じゃあタバサ、学院まで頼んだぞ。」

タバサは頷くと、ルイズ達を乗せて学院に向けて飛び立つ。

「わひと・・・おこフーケ。起きてるんだろう?」

俺は、気絶してこる振りをしているフーケに声を掛ける。

「なんだ。ばれてのかい。」

拘束されているフーケが起きて俺に向かう。

「まあな。さてフーケ。いや、マチルダ・オブ・サウスゴータ。取  
引をしようじゃないか。」

俺はニヤッと笑つてマチルダに話をする。

「すごいぶん昔の名前が出てきたねえ。アンタ、それをどこで知った  
?」

マチルダは、自分の名前が出た途端俺を睨み付ける。

「あ?俺に付いてくれるのなら、情報源を明かそうじゃないか。」

「アンタ。何が目的だい?」

「君の妹って言つたうぢつするへ。」

「君の妹って言つたうぢつするへ。」

そう言つて瞬間、マチルダは田を見開き、鬼のような形相で俺を睨み付けた。

「アンタ！ テファに手を出さうつてのかい！」

「ちげーよ。俺は俺の計画を発動させる為、お前の力が欲しいんだ。そのためにも君の妹にも協力して欲しい。」

「なんだって？」

俺の言葉にマチルダは驚く。

「俺に協力してくれるのなら、この場で君を助ける。王宮に捕まつたら即牢獄行き。そうなつたら、一体誰が孤児院で住む君の妹と、その子供達を養つていくんだ？」  
君にとつても悪い条件じゃないはずだよ？ 俺も、君に無茶なことをさせないと約束する。」

「一つ。確認をさせてくれ。あんたは何をするつもりだい？」

「将来的なことは詳しく述べ話せない。だが、絶対に悪い条件じゃない。俺を信じて付いてきて欲しい。」

俺はマチルダの眼を見て言った。

「……わかった。アンタに付くよ。どの道王宮に捕まつたら終わ

りなんだ。けど、ティファニアは渡さないからね？」

そう言つてマチルダは承諾してくれた。

「ははは、わかった。でも、もしティファが俺に惚れたら、その時は妹の幸せを考えてやれよ?」

「ふん。言つてくれるじゃないか。」

そうして、俺はマチルダを無事に仲間に入れることに成功した。

「じゃあ、しばらくな王都で身を潜めてくれ。護衛の為に俺の分身を付けるから、後で落ち合おう。」

そつ言つて俺は影分身を作りだす。

ボン

「うわー！それって『偏在』かい？」

突然現れた俺の影分身にマチルダは驚く。

「まあ似たようなもんだよ。あと、これ。こいつで宿でも取つといてくれ。」

そつ言つて俺は、以前スリから貰つたお金をマチルダに渡す。

マチルダは、受け取つた金額に驚いていた。

「こんなにかい？」

「ああ。余つたお金はやるよ。じゃあ俺もそろそろ行かないと、ルイズ達に怪しまれるから。」

街までは俺の分身に送つてもいい。じゃあ、頼んだぞ。」

「わかった。」

俺の分身は返事をして、マチルダを抱えると『<sup>ループポイント</sup>座標移動』で、王都まで移動した。

それを見送つた俺も、学院まで『<sup>ループポイント</sup>座標移動』で移動して帰つたのだつた。

## それは崩壊の始まり

俺は学院に帰つて今回のフーケ討伐の報告をした。

その内容は、ルイズ達が先に話していたが、俺はフーケの死亡<sup>亡くなつた</sup>と言ふ偽の情報を追加した。

「そうか。ミス・ロングビルは亡くなつたか・・・」

オスマンが酷く落胆した声で言った。

「はい。すいません、実力が拮抗していたので生きて捕らえる事が難しく、止むなく手を下しました。」

「すまんのう、おぬしこは辛い思いをさせた。」

「いえ・・・気にしないで下さい。それより、あの『破壊の杖』はどこで手に入れたのですか?」

俺はオスマンに破壊の杖の事を聞いた。

「なぜ、そんなことを聞くんじや?」

(ツチ、タヌキが・・・やっぱ情報を切るしかないか・・・)

そう判断し、俺は異世界人であることを明かした。

「実は俺はこの世界の人間じゃないんです。何もわからずルイズに召喚されたんです。」

「そりなのか？」

俺の言葉にオスマンが驚く。

「あの『破壊の杖』は、元々は俺がいた世界の武器なんです。」

「なるほどのう・・・そりやったか。」

オスマンは俺の言葉を聞き、何か思い出すように言った。

「『破壊の杖』はある男の形見なんじや。」

もう30年ほど前になるかのう・・・わしがワイバーンに襲われていた時に、その男に出会ったのじや。

その男はワイバーンから破壊の杖でわしを守ってくれた命の恩人での、奇妙な格好をしておったわい。

その男は酷い怪我を負つていての、わしは男を学院まで連れて行き、手厚く看護したのじやが・・・」

そこでオスマンは言ひよどむ。

「その結果はむなしく、亡くなつたと・・・？」

「うむ・・・結局何者なのか、どこから来たのかわからなかつた。男は『破壊の杖』を2本持つておつてな、私を救つた一本は男と共に墓に、もう一本はわしが宫廷に献上したんじやよ。」

「なるほど・・・そりやつた経緯があつたんですね。」

俺は感心した様に言ひ。

「辛い思い出をお話して下せつ、ありがと『ひやこ』でした。」

俺はオスマンにお礼を言つた。

「いや、いいんじや。わしからはもう話す事はない。でも今夜の祝賀会に参加するが良い。」

「はい。ありがとうございます。」

俺はお礼を言つて学院室を後ろにした。

「今日はありがとう。君がいてくれて助かつたよ。お礼がしたいんだけど、今日の夜にでも君の部屋を訪ねてもいいかな？」

「別に構わない。」

タバサはそっけなく言つ。

「じゃあまた後で。祝賀会が終わつた後にでも行くよ。」

そう言つとタバサは頷いて、食事を再開する。

「じゃあな。シャルロット。」

そうタバサの耳元で小さく呴いた俺は、その場を後にしてバルコニーの方に向かつた。

『ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおなづりーー！』

バルコニーで窓いでいたら、祝賀会にルイズが登場する声が上がつた。

そしてドレスに身を包んだルイズは、祝賀会に参加する際と全員を魅了したのだ。

そしてルイズはたくさんの中学生に誘われるが、その全てを無視

して俺の前にやつてやった。

『ねへ、ハサカトニモ衣装ジヤネーか』

「へ、つむわいわねー。」

デルフの冷やかしに、ルイズは顔を赤くして反論する。

「へえ・・・似合つてゐじやん。」

俺は正直な感想を口にする

「あ、ありがとう。」

ルイズは恥ずかしそうに俺の言葉を受け取る。

そして、会場に音楽が流れ始めた。

「お?なんか始まつたみたいだな。お前も行つてこいや?誘われてたろ?」

俺はそつと、ルイズは無言で手を差し伸べる。

「お、踊つてあげても良へつてよ?」

ルイズは恥ずかしそうにそっぽを向いて俺に言つ。

「はあ・・・いつこつ時は、誘つまつが淑女でも礼儀つてもんがあるだろ?」

俺はため息混じりにそう言つ。

「あ、今日だけだからねー。」

ルイズはそう言つと、姿勢を正して俺に言つた。

「わたくし、一曲踊つて下さるません」と。紳士様?

「ふふ、畏まりました。お姫様。」

俺達はそう言つて手を取り合ひ、ダンスホールに足を運ぶ。

踊つている時にルイズが話しかけてきた。

「ねえ、信じてあげるわ。貴方の事。」

「何だ? まだ信じてなかつたのか?」

「今まで半信半疑だつたの。でも、あの『破壊の杖』はあなたの世界の武器なんでしょ? あんなの見せられたら、信じるしかないじゃない?」

ルイズは俺にそう言つた。俺はそのまま無言でルイズの言葉を聞く。

「ねえ? 帰りたい?」

「さあ? 今はもうわからなくなつてきてる。」

「そうなの？」

「ああ、この世界でお前に会って、カトリアを治して婚約しあつたからな……カトリアの事を裏切れねーよ。」

「わうなんだ……」

「…………」

そうして俺達はしばりへ舞で踊る。

「あの……ありがとう。」

そうしてルイズが俺に囁く。

「なにが？」

「う、ローレムに潰されそうになつた時に助けてくれたじゃない。そのお礼よ……」

ルイズは早口で囁く。

「なんだ、その事か。そんなの当たり前だろ？」

「どうして？」

「俺はお前の使い魔だからな。」

もう決めちまつたんだ。俺は今から、お前の剣になるって・・・

そう言つと、ルイズは嬉しそうに俺を見つめていた。

『こりゃおでれーた。主人のダンスの相手を勤める使い魔なんて、初めて見たぜ。こりゃおでれーた。』

そう言ってデルフリンガーは、月明かりの下で自分の使い手とそのご主人様のダンスを見ていた。

そして、祝賀会が終わり、俺はタバサの部屋を訪ねていた。

コンコンッ

俺はタバサの部屋をノックする。

「タバサ? 俺だ。マモルだ。いるか?」

そつと部屋の中から声が聞こえた。

「入つて。」

そつと部屋に入ると、パジャマ姿で杖を構えるタバサがいた。

（なんつーか、シユールな格好してんな、こいつ……）

俺はいきなりのタバサの姿に、一瞬思考が停止する。

「話してもうひつ。何故私の名を？」

タバサは敵対心丸出しで俺に尋ねる。

「ふむ……」

パチンッ

俺はタバサの言葉をいつたん無視し、指を鳴らして結界を張る。

「……これは？」

タバサは突然張られた結界に驚く。

「落ち着け、これはこつちで言つと、『ディテクトログック探索魔法』と『サイレン消音魔法』を掛け合わせたものだ。」

「なぜ？ そのような事を？」

「どに間者がいるかわからないからな。ちなみにこの結界は外か

らじや絶対に中の様子はわからないし、俺らの声も結界の外には漏れない。

その方が何かと便利だろ？ なあ、ガリアのお姫様？

「……何が目的？」

そう言って、タバサは再び杖を構える。

「ガリアと協力体制を結びたい。そのため君に協力してほしい。」

「でも、私には王位継承権はない。私に協力を仰いでも無意味。」

「知ってる。だから君にはガリア王との橋渡しをしてもらいたい。ちなみに報酬は、君が今最も望むものだ。」

「…母様の事まで知っているの？」

タバサは驚いたように言つ。

「ああ、知ってるよ？ 誰が君の母親の心を狂わしたのか？ そしてその心を狂わした原因も、その解除方法もね？」

「話してもううう！ 力尽くでも！」

そつ言つとタバサは杖に力をこめる。

俺はタバサの杖を『<sup>↑</sup>座標移動』で取り上げる。

「少し落ち着けって…君が俺に協力してくれたら万事解決するんだから。」

それで、どうする？俺に協力するか？」

俺はニヤッと笑ってタバサに話しかけた。

「わかった。協力する。けどそのかわり……」

「ああわかつて。きつちり君のお母さんを助けるよ。だけど、助けるには条件が二つある。」

「なに？」

「なに、難しい事じゃない。」

一つは、君のお母さんを治しても、現ガリア国王であるジヨゼフに對し復讐をしない事。

二つ目は、君の上司でもありジヨゼフの娘でもあるイザベラとの和解だ。」

「それは出来ない。」

タバサは短く言つ。やはり恨みは深いか・・・

「まあやつ言つなつて。理由は今はいえないけど、ジヨゼフもイザベラもどちらかと言つと被害者なんだよ。」

「どうこういひとへ。」

俺の言葉に、タバサは不思議そつにする。

「今まだ言えない。だけど、近いうちに絶対に言つから待つてくれねーか？最後は全員、ハッピーホンドにしてやるからよ。」

（俺の計画の為にな……）

「わかった。あなたを信じる。でも、裏切つたら……」

タバサは強い意思を持つて俺の眼を見る。

「ああ、そんときや俺を殺せ。正々堂々正面から、お前の攻撃を受けて死んでやるよ。」

「わかった。最後に一つだけ……」

「なんだ？」

「どうして、あなたは私を助けてくれるの？」

タバサは不思議な顔をして俺に尋ねた。

「『『イーヴァルディの勇者』』……」

「え？」

「囚われのお姫様を助けるのって男の夢だろ？」

そつつて俺はタバサの部屋を後にした。

「じゃあなタバサ。近いうちに連絡を入れる。おやすみ～。」

そつつて俺はタバサの部屋を後にした。

（よつしゃ！タバサゲット！原作崩壊の始まりだぜ！）

そう思っていた俺を見ていたのは、淡く夜空に輝く一つの満月だけ  
だった。

フーケとの一件後、俺は今後の対応を決めかねていた。

（うへん・・・取り合えずフーケも仲間にしたし、これで農業関係、特に土木系の仕事がやりやすくなつた。あいつは土のメイジだし、会社でも建てればすぐに稼げるようになるだろ？）

ガリアはかなりの技術先進国だし、早いうちにジョゼフの件に手を打つて、俺と組んでもらわないと・・  
だけどこの後は確かアルビオンに行くんだよな?どう考へても、タバサと一緒にガリアになんか行けねーぞ?)

「つち！ 打つ手なしか・・・」

そう言つて殴打ちをすると、部屋にノックをされた。

ポンポン

「はい！どちら様ですか？」

(つたく、誰だよ)んな朝早くから・・・)

そう思いつつも、部屋の扉を開けると、そこにいたのはかつて決闘でボコボコにしたギーシュだった。

「や、やあ使い魔君。」

ギーシュはぎこちない笑顔で俺に挨拶した。

「何か用ですか？ルイズはまだ眠っていますが・・・」

ルイズに視線をやると、すうすうと規則正しい寝息を立てて眠っていた。

「いや、用があるのは君なんだ。」

ギーシュは何か決意したように俺に囁つ。

「はあ？なに？リターンマッチですか？それなら相手になりますけど、先にルイズを起しきさせてください。」

俺は面倒だったので、適当に呟つてやると事を終わらしよつとした。

「ち、違つ違つ…僕を弟子にしてほしこんだ…」

「弟子？…！」

俺は、ギーシュの発言に驚き、声を大きくすると、その声でルイズが起きてしまった。

「ふあ～、うるさいわよまくる…・・・

まだ寝ぼけているのか、ルイズの声に霸気がない。

「ああ悪いルイズ。起こしたか？」

俺はルイズを起こしてしまったことに謝罪する。

「いいわよ別に。それで、何騒いでたの？」

ルイズは田を「すりながら聞いてくる。

「いや、それがさ、ギーシュが俺に弟子入りしたいんだって。」

「弟子入り？何であんたなんかに？」

「さあ？知らない。これから聞いてみる所。で、いったいどういう事だ？」

俺は素でギーシュに聞いた。

「あの日の決闘の後に彼女たちに謝ったのさ。そしたらモンモランシーに言われたよ、『もっと強くなつて私を守つて』ってね。そして僕は気づいたんだ。誰が自分のことを愛してくれるのかをね・・・

だから僕は強くなりたい。せめて自分の恋人は守れるくらいに。」

ギーシュの田は真剣だつた。俺はその真摯な態度が気に入った。

「いいだろ？ ならばあんたをトリステインで最強の士メイジにしてやるよ。」

俺は口許を吊り上げてそいつた。

「おおー！ ありがとう！ 僕の」とまギーシュと呼んでくれ。我が友よ！」

そう言つてギーシュは嬉しそうに俺に抱きついた。

「はあ～・・・男つて単純ね・・・」

そのやり取りを見ていたルイズは、一人ベッドの上で愚痴を言つていた。

「ン」

抱きついて来たギーシュを振りほどき、難なくその場から脱出出来た俺は次の来客の対応に追われていた。

「つたく、次から次へと・・・はあいー今開けます。」

そう言つてドアを開けたら、そこにはタバサが立つていた。

「タバサ?どうしたんだ?」

「あなたに用がある。」

俺の問いにタバサは短く答える。

「あ～、もしかしてこの間の件のことか?」

俺がそう聞くと、タバサは小さく頷く。どうやら当たりの様だ。

「そつか。じゃあ外に出よう。」

俺はそう言つて外に出ようとしたが、タバサはそれを止めて首を横

に振る。

「…………。」

「…………でも…………じゃあ……」

俺はタバサの行動に驚いた。

「別にあの話をするわけじゃない。あなたに稽古をつけてもらいたいに来た。」

「…………」

タバサの発言に俺とルイズの言葉が被る。

「ミス・タバサ。君も強くなりたいのかい？」

ギーシュが気軽に聞く。するとタバサは頷いた。

「そうかい。僕たちは同志だ。一緒に頑張りつじゃないか。」

そつまつてギーシュは嬉しそつて笑う。

「はあ……わかったよ。じゃあ今日の放課後な。授業が終わったらここに来い。ルイズもそれでいいか？お前も稽古つけてやるよ。」

「えー！何で私まで？」

俺の言葉に、突然言われたルイズは驚く。

「この前、フーケとやり合ひ前で少し話しただい。お前のためなんだ。やつておいて損はないぞ？」

「わ、わかった。」

俺の説得に泣々ながらもルイズは了承する。

「じゃあお前たちは授業に行け。俺はちよつと準備があるから。」

そう言って俺はルイズの部屋を出る。

「とこつて、お前にも修行してもうから、ルイズたちの授業が終わるころにこの魔法陣の上に立つてこてくれ。」

「なにが『とこつ』なの？ちゃんと事情を説明してくれよ。」

俺の言葉にマチルダは、訳がわからないといつ風な顔をする。

「えつとだな、前にギーシュと決闘した後に、なぜかギーシュに懐かれて弟子してくれって頼まれた。そんで、この前お前とやりあつた時にタバサにも同様に弟子してくれって頼まれた。ついでに、この前の馬車の中で話したことをルイズに覚えてもらいつ

ために、ルイズも稽古をつけようと考えたわけだが、それなりマチルダも一緒にいいかと思い、今晩に相談を持ちかけている。」

俺は一気にそう説明した。

「え、えらく簡略した説明だね・・・まあ事情は理解したけど、あの子達と一緒にいてもいいのかい?」

マチルダは不安そうに囁つ。

「まあ何とかなるでしょ?納得してくれなかつたら、お前の事と孤児院のことを話すことになるナビ、それでもいいか?」

「あんまり同情は貰いたくないけど、マモルがそういうなら私はかまわないよ。」

「そつか。ありがと。」

「俺はマチルダに許可をもらひ、一緒に修行することにした。

「あ、そういう。別荘に着いたら今後のこと少し話すから。」

「わかったよ。あなたの計画つけてやつが、つこに動き出さんだろ?」

「まあね。じやあまた後で。授業が終わったらこれで連絡する。」

「うつまつて俺は、『恋話』をマチルダに渡す。

「「れは?」

「俺が作った『念話石』って言つマジックアイテム。効果は、離れた相手と話ができる石だ。」

「へえ・・・あんたって本当にすごいね。」

マチルダは念話石をまじまじと見ながら感想を語つ。

「まあな。じゃあまた後でな。」

俺はそつとマチルダのいる宿を後にした。

そして放課後。俺の前にはルイズを含め、4人の人物がいた。

「で? 何でツェルプストーまでいるのよ!」

ルイズが吼えた。

「知らんがな。何でここにいるんだ? キュルケ?」

俺がキュルケに尋ねると、妖艶な笑みを浮かべ俺に語つ。

「だつて面白そだからつて、お前な・・・」

「面白そだからつて、お前な・・・」

肩を落とす俺。そんな俺をキュルケはただニコニコと見つめている

だけだった。

「お前のことだ。どうせだめって言つても付いてくる気なんだろう？」

「もううん。」

（「こつ、満面の笑みで言いやがつた・・・）

「はあ・・・わかつたよ。そんかわり、絶対に逃げ出すなよ。」

「わかつてゐわよ。」

笑顔で返してくるキュルケに対し、俺は深くため息をつく。

「さて、一人余計なのが入つたけど、この際はどいつでもいい。修行に入る前にお前たちにいくつか契約して欲しい事がある。」

「「「「契約？」」」

みんなが声をそろえて聞く。

「なに。別に難しい」とじゃない。詳しくは契約書を見てくれ。」

そう言つて俺は、強制契約書ギアスペーパーで書いてある契約書をみんなに渡す。

内容は、俺の能力の秘匿、修行先の出来事の黙秘、あとは個人的にいくつかの契約が書いてある。

そしてみんなが契約書にサインしたのを確認してから、俺は『別荘』を取り出した。

「それは？」

ギーシュが聞いてきたので答える。

「これから行く修行先だ。これは俺が開発したマジックアイテムで、この中にいると外での1時間はこの中では24時間になる。」

「つまりここはいつよ？」

ルイズはこまだ理解できないのか、首をかしげて聞いてくる。

「つまり、ここを使つと一日中修行ができるといつことだ。しかも、中と外じゃ時間が流れが違うから、この中で一日過ぐしたとしても、この世界じゃたつた一時間しか時間が経過していない。それを寝るときに合わせて行つから、大体一人当たり一日で6～8日分の修行を行つてもいい。」

「なるほど。でもさすがはダーリンね。こんなマジックアイテム見たことないわ！これ確実にアカデミーものじゃない！」

キュルケは『別荘』をひたすら褒めた。

「まあな。でも、わかっていると思つがこれは絶対に内緒だぞ？まあ言おうとしてもさつきの契約書の効果で言つて言えないと思つたが、」

「・

「やうなの？」

「ああ。それより早速修行を開始するが。みんな魔法陣の上に立つ

て。  
」

そう言ってみんなを魔法陣の上に立たせて、俺たちは別荘の中に入った。

青い空、そして透き通るくらいな綺麗なコバルトブルーの海、そして極めつけは、南国のこの舞台に違和感丸出しの西洋風の大きな城『シユーベルト城』。

俺たちは今、南国のリゾート、『別荘』の中にいる。

「な、な、な、なによこれーーー！」

あまりの凄さにルイズが驚き、声を上げる。

すうごうい・・・これ全部ターリンの所有物?」

一  
は  
あ  
・  
・  
・  
見  
事  
た  
ね  
・  
・  
・  
」

「凄い

そして、キュルケ、ギーシュ、タバサは驚きを通り越しこの光景に呆けていた。

「そ、呆けてないで行くよ。じつちだから付いてきて。」

そつとつて俺たちは城を目指す。

「やつと来たのかい？ずいぶん遅かつたじゃないか？」

「悪かつたつて。もしかして結構待つたか？」

城に着いた俺たちを待っていたのは、『土くれのフーケ』ことマチルダだった。

「ちょっとー何でフーケがいるのよーあんたが殺したんじやなかつたの？」

生きているフーケを見てルイズが俺に突っかかる。そして、キュルケとタバサも警戒していた。

「あー、あれ嘘。」

「「うそーーー？」」

俺の言葉を聞き、キュルケとルイズが被る。

「そ、まあこいつにもいろいろ事情があつたんだ。一応許可を取つてあるから、盗賊をやつてた理由を話してもいいけど、あまり人の過去を詮索するのは感心しないな。」

俺はそう牽制すると、みんなは黙り込む。

「まあそんな顔すんなって。時がきたらちやんとその理由も教えるから。」

俺が軽い調子で言つと、ルイズが何か決意した目で俺を見てくる。

「絶対？絶対にちやんと後で教えてくれる？」

「あ、ああ。約束する。」

ルイズの強い目に押された俺は、少し戸惑いながら答えた。

「そう、わかったわ。なら待つてる。みんなもそれでいいわね？」

そしてルイズはみんなに振り向いて聞く。しかし、その顔は『反論は認めない』とでも言いたそうな顔をしていた。

そして、キュルケたちはそんなルイズの迫力に負け、何度も首を縦に振った。

「じゃ、そういう事だから今から修行を開始します。個人別にやるからそこそこよろしく。」

「個人別って、どうやって教えるの？」

「ひつひつ。」

俺は影分身で4人の分身を作る。

「それって偏在？」

キュルケが驚いたよつて言ひ。

「まあ似た様なもんだ。じゃあみんな一人ずつ個人レッスンで鍛えるからよろしくね。」

そつ言つて俺たちは修行を開始した。

### ギーシュの場合

「セヒギーシュ。」これからお前に修行を付けるんだが、正直言つてお前が一番伸びると思うからがんばってくれ。」

「本当かい？」

ギーシュは俺の言葉を聞き喜ぶ。

「本当だ。まあ実際に伸びるのはお前の努力しだいなんだけどな。

「わかつた。どんな過酷な試練にも打ち勝つて見せるよ。」

「上等だ・・・じゃ、せつそくだけど、ゴーレムを作つて。自分の今出せる全力の数で。」

「わかつた。『鍊金』」

そつ言つてギーシュは、青銅のゴーレムを7体作つた。

「よし、なりその『ゴーレム』に武器を持たせて俺に攻撃して来い。あ、わからん刃でさしておいてくれ。」

「え？ いいのかい？ さすがに危なくないかな？」

俺の提案に、ギーシュは困惑した。

「大丈夫だつて。俺を殺す氣で来い。」

「わ、わかった。」

ヤツツヒヒヒギーシュは『ゴーレム』に命令を下す。

そして突っ込んでくるギーシュの『ゴーレム』の攻撃を、俺は次々にかわしていった。

そして10分後・・・

「さて、もうこのくらいでいいか。ギーシュ、お前の今後の課題が決まったぞ。」

「ぐ・・・なんで当たらないんだ。」

ギーシュは一撃も攻撃が当たれなかつたことを悔やんでいた。

「まあそつ悔しがるなつて、これから強くなればいいんだから。それでだなギーシュ、お前の今後の課題は武器の扱いだ。

正直さつきの『ゴーレム』の動きは素人だ。たぶんお前は武器の扱い方

を知らないんだろう。それを今からお前に叩き込む。」「

「え？ 僕はこれでも軍人の家系だぞ？ 剣くらいは扱える。」

「まあ剣の動きは多少マシだったが、それでもあんな動きはほつきり言つて教科書の動きだ。まだ隙だらけだし、剣筋が真つ直ぐ過ぎて少し腕のあるやつから見たら、どこに攻撃が来るか丸わかりだ。」

「やつだつたのかい・・・」

俺の言葉を聞き、ギーシュはショックを受けた。少なからず自信があつたのだろう。

「まあこればかりは一朝一夕で上達するわけじゃないから、継続して鍛えるしかないな。」

後は座学か・・・取り合えず、ギーシュには『原子の理論』を覚えてもらつ。」

俺はそう言つて原子の理論をギーシュに教えていった。

「す、凄いじゃないか！ これを公表したらアカデミーも驚くぞ！」

理論を話しあつたら、ギーシュは田を輝かせていた。

(やつぱつこの世界には、原子の理論は成立していなかつたか。)

「じゃあ早速実践。これを・・・鋼に練成してみて。あ、これ見本ね。先に解析してからやつたほうがうまくいくかも。」

そう言つて俺は、『鍊成術』で作りだした砂鉄と木炭をギーシュに渡し、見本の鋼をギーシュに見せる。

「さつあやつたのは『鍊金』かい？」

「まあ似たようなもんかな？俺の事はいいからやつたとやつたな。」

「わ、わかったよ。『鍊金』」

そう言つてギーシュは鍊金の魔法をする。すると、俺の見本とは少し効るが、ちゃんとした鋼ができていた。

「ふむ。まあ合格点かな？じゃあ今度は材料なしアレで鋼を作つてみて。」

そう言つて指差したのは、少し大きめの鉄鉱石だった。

「わかった。」

そう言つてギーシュは、俺が指示した鉄鉱石を鋼に変えた。

「よし。成功だな。鋼は鉄と炭素の合金だから、さつきの前に含まっていた鉄鉱石に炭素を加えて鋼を作つたな。よしよし、ちゃんと教わつたことができるから大丈夫だ。よかつたなギーシュ。これで土×土×火のトライアングルメイジだ。」

「何でこんなにうまくいったんだる？なんか訽然としないな・・・

「

俺の説明に納得していない様子のギーシュ。

「まあ基礎はしつかりしてたんだ。後は理論をしつかり正しく学べば、こんなもんだよ。」

そう言つて俺は、ギーシュの肩をたたき、修行を再開した。

## トリステインの姫君

修行開始から54日目。外の世界で1週間が経過した。

最初はみんなには基本方針を説明して、それぞれの特徴にあつた個人レッスンをしてもらつた。

ギーシュの場合は、武器の扱いとゴーレムの制御、そして鍊金の上達。ゴーレムの制御の方はマチルダにも見てもらつたので、ギーシュのゴーレムにも再生能力が付いた。

タバサの場合は、すでにトライアングルクラスの実力者だったので、俺と一緒に考えた魔法の応用と、身体能力の強化をした。

キュルケの場合は、トライアングルクラスだったのだが、魔法の制御が甘かつたので、精密操作と魔法の制御を徹底した。

ルイズの場合は、前に話した通り、キュルケと同様に魔法の制御と精密操作、そして指定された場所を爆発させる空間把握能力の強化をした。

そしてマチルダは、ギーシュと同様に原子の理論を教えて、徹底的に鍊金を鍛えていった。

さらには、みんなには体術を覚えてもらい、身体強化の魔法も習得してもらつた。

「じゃあ今日は、みんなに『瞬動術』を覚えてもらおう。」

すっかり俺の講義に慣れたのか、みんなの目は真剣だつた。

「取り合えず説明な。今から教える『瞬動術』は、俺の世界の体術の歩法だ。これは、氣・・・みんなの場合は魔力を足の裏に溜めて、一気に爆発させて移動する技だ。」

そう言って俺は実践してみせる。

フォンツ

俺は瞬動術で移動して見せた。そしたらみんな驚いていた。

「い、今のは瞬間移動なのか？」

ギーシュが驚いたように叫ぶ。

「違つて、わつきも言つた通り歩法だよ。これのコツはメリハリをつけること。そうすればわつきみたいに一瞬で消えたように見えるから。」

そう言って俺はみんなに実践してみせるように叫ぶ。

しかし、最初からうまくいくやつはいない。みんな失敗ばかりだった。

「体術は失敗と練習の繰り返しだ。頑張った分だけ自分に返つてくれるから、みんな頑張れよ。」

そう言って一人一人の瞬動術を見て、悪いところを直していくつた。

そして数日がたち、ミスター・ギターの授業から、今回の事件は始まった。

「では授業を始める。知つてのとおり、私の二つ名は『疾風』。疾風のギターだ。」

威張り散らしたギターを見て、みんな静まつた。そんな態度に満足したのか、ギターはキュルケに質問をする。

「最強の系統は知つているかね？ ミス・ショルプストー」

「『虚無』じゃないんですか？」

「伝説の話をしているわけではない。現実的な答えを聞いてるんだ」

いちいち引つかかる言い方をするギターに、キュルケはちょっとかちんときた。

「『火』に決まっていますわ。ミスター・ギター」

キュルケは不敵な笑みを浮かべて言い放った。

「ほほほ。どうしてそう思つね？」

「すべてを燃やしつぶせるのは、炎と情熱。そりじゃ『火』がこません」と？」

「残念ながらそうではない」

ギターは腰に差した杖を引き抜くと、言い放つた。

「試しに、この私にきみの得意な『火』の魔法をぶつけてきたまえ」  
キュルケはぎょっとした。そして、一緒に修行をしていた俺たちも驚いた。

（（（（こきなり、この先生はなにを言うのだ？・・・））））  
この瞬間、俺たちの心は一致した。

「どうしたね？　きみは確か、『火』系統が得意なのではなかつかな？」

挑発するような、ギターの言葉だった。

「火傷じやすみませんわよ？」

キュルケは、目を細めて言った。

「かまわん。本気できたまえ。その、有名なツェルプストー家の赤毛が飾りではないのならね」

キュルケの顔からいつもの小ばかにしたような笑みが消えた。

胸の谷間から杖を抜くと、炎のような赤毛が、ぶわっと熱したようになざわめき、逆立つた。

杖を振った。

目の前に差し出した右手の上に、小さな炎の玉が現れる。キュルケがなおも呪文を詠唱すると、その玉は次第に膨れ上がり、直径一メイルほどの大きさにもなった。

生徒たちが慌てて机の下に隠れる。

そして俺はキュルケにストップをかけた。

「ちよつと待て！お前さすがにそれじゃギターが死んでしまうぞ？ もう少し加減しろ！」

俺がそういうと、キュルケは残念そうに顔を歪めて、炎の玉の威力を落とした。

「ちえ、これならいいでしょ？でもこれじゃあギターの魔法で跳ね返されるわよ？」

「いいんだよ。そんときや俺が守つてやるから。」

俺がそういうと納得したのかキュルケは手首を回転させたあと、右手を胸元にひきつけ、威力を落とした炎の玉を押し出した。唸りをあげて自分めがけて飛んでくる炎の玉を避ける仕草も見せず、ギターは腰に差した杖を引き抜いた。そのまま剣を振るようにして薙ぎ払つ。

教室に烈風が舞い上がる。

一瞬にして炎の玉は搔き飛え、その向こうにいたキュルケを吹つ飛ばそうとした。

しかし、俺は『一方通行』<sup>アクセラレータ</sup>の能力で、キュルケに向かつてききた風を別方向に反射した。

その事にも気が付かずに悠然として、ギターは言い放つた。

「諸君、『風』が最強たる所以を教えよう。簡単だ。『風』はすべてを難ぎ払う。『火』も、『水』も、『土』も、『風』の前では立つことすらできない。残念ながら試したことはないが、『虚無』さえ吹き飛ばすだろ。それが『風』だ」

キュルケは手加減された事にも気が付かないギターを冷たい目で見たが、気にした風もなく、ギターは続ける。

「田に見えぬ『風』は、見えずとも諸君らを守る盾となり、必要とあらば敵を吹き飛ばす矛となるだろ。そしてもう一つ、『風』が最強たる所以は……」

ギターは杖を立てた。

「ゴビキタス・デル・ワインデ……」

低く、呪文を詠唱する。しかしそのとき・・・、教室の扉がガラツと開き、緊張した顔のミスター・コルベールが現れた。

彼は珍妙なりをしていた。頭に馬鹿でかい、ロールした金髪のカツラをのっけている。よく見ると、ローブの胸にはレースの飾りや

ら、刺繡やりが耀つてゐる。何をそんなにめかしていのだりつへ。

「ミスター？」

ギターがコルベールの格好に眉を顰めて訪ねる。

「あややや、ミスター・ギター！ 失礼しますが…」

「授業中です」

コルベールを睨んで、ギターが短く言った。

「おひほん。今日の授業はすべて中止であります…」

しかしギターの言葉を無視しコルベールは重々しい調子で告げた。

その言葉を聞き教室中から歓声があがる。その歓声を抑えるように両手を振りながら、ミスター・コルベールは言葉を続けた。

「えー、皆さんにお知らせですか？」

もつたいたいぶつた調子で、コルベールはのけぞつた、のけぞつた拍子に、頭にのつけた馬鹿でかいカツラがとれて、床に落つこちた。

（（（（（・・・・・・・（（（（（

教室中がぐすくす笑いに包まれる。

一番前に座つたタバサが、コルベールのつるつるに禿げ上がつた頭を指差して、ぽつんと呟いた。

「滑りやすい」

教室が爆笑に包まれた。キュルケが笑いながらタバサの肩をぽんぽんと叩いて言つた。

「あなた、たまに口を開くと、言つわね」

コルベールは顔を真つ赤にさせると、大きな声で怒鳴つた。

「黙りなさい！　ええい！　黙りなさいこわっぱどもが！　大口を開けて下品に笑うとはまったく貴族にあるまじき行い！　貴族はおかしいときは下を向いてこっそり笑うのですぞ！　これでは王室に教育の成果が疑われる！」

とりあえずその剣幕に、教室中がおとなしくなつた。

「えーおほん。皆さん、本日はトリステイン魔法学院にとつて、よき日であります。始祖ブリミルの降臨祭に並ぶ、めでたい日であります」

コルベールは横を向くと、後ろ手に手を組んだ。

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリステインがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学院に行幸なされます」

コルベールの発言に教室がざわめいた。

「したがつて、粗相があつてはいけません。急なことですが、今か

ら全力を挙げて、歓迎式典の準備を行います。そのために本日の授業は中止。生徒諸君は正装し、門に整列すること

「生徒たちは、緊張した面持ちになると一斉に頷いた。ミスター・ゴルベールはまつさうると重々しげに頷くと、皿を見張つて怒鳴つた。

「諸君が立派な貴族に成長したことを、姫殿下にお見せする絶好の機会ですぞ！ 御覚えがよろしくなるよつに、しつかりと杖を磨いておきなさい！ よろしくですかな！」

（はあ・・・やつぱ原作どおりか。一応原作は読んだけど、記憶に自身がないんだよな・・・）

俺は、これから始まる事件に不安を隠せないでいた。

そしてしばらく経つてから、学院の正門に王家の紋章が付いた馬車が到着した。

魔法学院の正門をくぐつて、王女の一行が現れると、整列した生徒たちは一斉に杖を掲げた。しゃん！ と小気味よく杖の音が重なつた。

正門をくぐつた先に、本塔の玄関があった。そこに立ち、王女の一行を迎えるのは、学院長のオスマン氏だった。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおな

り

ツ！」

しかし、がちゃりと扉が開いて現れたのは枢機卿のマザリーーであった。

生徒たちは一齊に鼻を鳴らした。しかし、マザリーーは意に介した風もなく、馬車の横に立つと、続いて降りてくる王女の手を取った。

その瞬間生徒の間から歓声があがる。

王女はにっこりと薔薇のような微笑を浮かべると、優雅に手を振つた。

（アレが馬鹿王女か・・・）

「あれがトリステインの王女？ ふん、あたしの方が美人じゃないの」

キルケがつまらなそつに呟く。

「ねえ、ダーリンはどうが綺麗だと思つ？」

「さあね？ 人それそれじゃない？ 俺はどうも綺麗だと思うよ。」

俺は当たり障りのないことを言つて、その場を逃げる。

ルイズの様子を見てみたら、ワルドに熱っぽい視線を送っていた。

（ワルドか・・・あいつどうすっかな・・・）

俺はワルドの対応を決めかねていた。そして、本を読んでいたタバサに近づく。

「タバサ。悪いんだけど、近いうちに手伝ってもらつと思つけどいいか？」

俺がそう聞くとタバサは頷く。

「おし。ありがとなタバサ。」

俺はお礼を言ってその場を離れる。

そしてその夜。俺はルイズの部屋で、これから来る客を静かに待つていた。

「コンコン

そして待ち人は来る。

ノックは規則正しく叩かれた。初めに長く一回、それから短く三回  
……。

ルイズの顔がはつとした顔になった。急いで立ち上がり、ドアを開いた。

そこに立っていたのは、真っ黒な頭巾をすっぽりとかぶつた、少女だった。

辺りをうかがうように首を回すと、そそくせと部屋に入ってきた、後ろ手に扉を閉めた。

「・・・あなたは？」

ルイズは驚いたような声をあげた。

頭巾をかぶった少女は、しつと言わんばかりに口元に指を立てる。

それから、頭巾と同じ漆黒のマントの隙間から、魔法の杖を取り出すと軽く振った。同時に短くルーンを呴く。光の粉が、部屋に舞う。

「ディテイクトマジック  
探知魔法？」

ルイズが尋ねた。頭巾の少女が頷く。

「どこに耳が、目が光っているかわかりませんからね

部屋のどこにも、聞き耳を立てる魔法の耳や、どこかに通じる覗き穴がないことを確かめると、少女は頭巾を取った。

現れたのは、やはりアンリエッタ王女であった。

「姫殿下！」

ルイズが慌てて膝をつく。

アンリエッタは涼しげな、心地よい声で言った。

「お久しぃりね。ルイズ・フランソワーズ」

ルイズの部屋に現れたアンリエッタ王女は、感極まつた表情を浮かべて、膝をついたルイズを抱きしめた。

そしてその後、原作どおりに昔話に花を咲かせる一人。

そして、ひと段落着いたのかアンリエッタ王女は悲しそうな顔を作つてつぶやく。

「わたくし結婚するのです。ゲルマニアの皇帝に嫁ぐ」とになったのです……

「ゲルマニアですって！」

ゲルマニアが嫌いなルイズは、驚いた声をあげた。

「あんな野蛮な成り上がりの国に！」

「その野蛮な国を今までのさばらせておいて、自分たちは伝統だの何だのつて言って汚職し放題だつたんだ。完全な自業自得だろ？」

俺は呆れたよつて言つ。

「ちょっと、少しは言葉を選びなさいよ！」

ルイズは俺に注意した。

「だが、事実だ。そして今、アルビオンは内乱の真っ只中。王国軍は敗北確實つて噂だし、アルビオンの貴族派が勝つたら確實にこのトリステインに攻めてくるだろう。

そうなる前に、国力が高いゲルマニアにとついで政略結婚してしまい、同盟を組んで戦争に備えようつてここだろ？王女様？」

俺がそういうと、ルイズは蒼白になり、アンリエッタ王女は悔しそうに唇をかんでいた。

「本当なのですか？姫様・・・」

「ええ。悔しいけど、その人の言う通りよ。ところで貴方は何者なのですか？アルビオンの事まで知っているなんて・・・」

アンリエッタは少し警戒したように言つた。

「情報は基本でしょ？ちなみに俺はルイズの使い魔です。」

「使い魔さん？人にしか見えませんが？」

「そりや人間なのですから見えるのは当然でしょ？」

俺の言葉に王女様は驚き、ルイズの方を見る。

「は～、ルイズ・フランソワーズ、あなたって昔からどこか変わつていたけれど、相変わらずね」

「好きであれを使い魔にしたわけじゃありません」

ルイズは恥ずかしそうにそっぽを向く。

「さて、いい加減本題に入ろうか。姫さんよ、どうして護衛を付けずにこんな場所まで来たんだ？正直に答えてもらおうか。」

俺は威圧感を放ちアンリエッタを見据える。

「貴方は王女であるわたくしに、そのような態度を取るのですか？」

アンリエッタは負けじと俺を睨み返す。

「ハッ！下手すりや二つちの首が飛ぶんだ。それに、いまだ自分の行動に責任を取れない奴に払う敬意なんてねーよ。」

喧嘩腰の俺にルイズは嗜めるように囁く。

「マモル！いい加減にして。姫様の言つことを聞きなさい。」

「あのなアルイズ。お前まだこの状況を理解してないのか？王女様が護衛も付けずに俺たちの部屋まで来てるんだ。事情はどうあれ、護衛兵にでも見つかってみる。最悪その場で殺されても文句は言えねーぞ？今頃必死になつて探してくるかもしれない。下手したら誘拐騒ぎになりうるんだ。そうなつたらこの姫さん自身の問題にも発展しかねん。

これは俺たちと、姫さんと、国のために言つてんだぞ？」

そこ今まで言つと、ルイズとアンリエッタがはつとした顔をした。

「も、申し訳ありません使い魔さん。わたくしは自分の事ばかり考えていたようです。」

アンリエッタは慌てて俺たちに謝罪する。

「まあいいですけどね？さつさと用件言つてください。どうせ今回

の婚約絡みでしょ「ナビ・・・・

「なぜわかったのですか?」

アンリエッタは不思議そつな顔をする。

「最初の芝居がかつた再会に、突然の婚約の報告。誰でもわかるだろ?」

「本当なのですか? そのような物があるといつですか姫様?」

ルイズが不安そうにアンリエッタに問い合わせる。

「ええ。実はアルビオンに・・・

「ああーちよつと待つた。」

俺はアンリエッタの話しをむかえり、扉を思いつきり開ける。

ドシンク

そこに倒れていたのはギーシュだった。

「ギーシューあなたなんでーーー?」

「まつ。ビリに田や耳があるかわからないからな。ちなみに、気配がしたのは少し前からだ。」

「教えなさいよ。」

「だから、いつやつて部屋に入れただろ？さて姫さん、話を折つてすまなかつた。こいつはギーシュ。グラモン元帥の息子で、腕は確かだ。」

俺がギーシュを紹介すると、アンリエッタは目を輝かせた。

「まあ、あなたがあのグラモン元帥の？」

「はい。息子でございます。アンリエッタ王女。なにやらお困りの様子で、わたくしも姫殿下のための力になりましょ。」

やつて、ギーシュは恭しく礼をする。

「つたぐ、どうなつても知らねーぞ？さて姫さん、話の続きをだ。」

「そうでしたね。貴方達にお願いしたいのは、わたくしが以前したためた手紙の事なのです。」

「ほひ。つまりアルビオンまで言つてその手紙を回収して来いつてか？」

「その通りです。使い魔さん。」

(こいつ、マジで自分の発言に気がついてないのか？)

「わかりました姫様ー。この私、ド・ラ・ヴァリエール家三女のルイズ・フランソワーズにお任せくださいー。」

「私も全力で協力いたします。このギーシュ・ド・グラモンにお任せくださいー。」

「やつてくれるとこいつの？」

「「「もちろんで」」やむこます。」

そつまつて一人はアンリ・ヒッタに深く頭を下げる。

「俺は反対だ。第一、お前ら今から行く所を理解していいのか？」

そういうと、ルイズとギャーシュは反論した。

「なにを言つんだマモル。ただアルビオンに言つて手紙を取りに行くだけだろ？」

「やつよ。姫様のためになるの。ビリ反対する要素があるのよー。」  
(はあ・・・・・) まじまじ・・・・・

俺は一人の反論を聞き、心の中で深く、深くため息をついた。

「アホ共が！ 今から行くのはただのアルビオンじゃねー！ 内乱中の戦場に手紙を取りに行くんだ！ 大体お前らは戦場を経験したことがないからそんな風に簡単にいえるんだよ。今から行くところを簡単に体験させてやるから、お前らそこに並べ。姫さんもだ。あんたは俺らを死地に追いやるんだ。これから俺らの行くところを少しでも体験しておいたほうがお前のためになる。」

そつまつて俺は三人を並ばす。

「死地？ こつたこびうこう」とだい？」

ギーシュはまだわかつていなか、軽い感じで聞いてくる。

「すぐにわかるさ。とりあえず、最後まで立つてたら合格だ。」

俺はそう言つて三人に強烈な殺氣を当てた。

ドサドサドサツ

突然の殺氣に三人は案の定倒れた、そして俺は不甲斐ない三人の様子に呆れる。

「はあ・・・やつぱこうなつたか。」

そして俺はルイズとアンリエッタをベットに運んだ。

しばらく経つてみんなが目を覚まし、俺は事情を説明していく。

「どうだ？これが戦場の殺氣つて奴だ。今から行く所はずつとさつきの感覚が付きまとう。お前たちはそれに堪えられるのか？」

「そ、それは・・・」

ギーシュは俺の質問に目を伏せる。

「それでも私は行くわ！たぶん耐えられないと思う。けど、せつか姫様が私を頼つてくれたんだもの。落ちこぼれの私を頼つてくれて嬉しかった。私は姫様の期待に応えたい！」

ルイズは確かに意思を持った田で俺を睨みつける。

「……いいだろ？ ギーシュ、お前はビリする？ ここで降りるか？」

俺がそう聞くと、ギーシュは足を震わせながら言った。

「い、行くよ。僕も行く。正直怖いけど僕だって男だ。ちやんと自分で発言には責任を持つ。」

そしてギーシュは言い切った。

「上等だ。さて姫さん。」しげの覚悟は決まった。後はあなたの覚悟だぜ？ 親友を死地に追いやる勇氣があるなら、俺たちに手紙を取つて来いって命令しな。」

「そ、そんな・・・出来ません。出来ない！ ルイズをこんな危険な場所に送るなんて！」

アンリエッタは辛うじて言った。

「甘えてんじゃねーぞ！ アンリエッタ！ お前は何だ！ ！」

「わ、わたしは・・・」

俺の気迫にアンリエッタは怯える。

「何だと聞いている！ 名前と役職を答えろ！ ！」

「ア、アンリエッタ・ド・トリステイン王女です・・・」

「声が小さこー！ー！ー！」

「ア、アンリエッタ・ド・トリステイン王女です！ー！」

「そつだ。俺たちはお前が命令すれば絶対にその通りにしなければならない。だから王女であるお前は命令しろ。アルビオンにある手紙を回収して来いと、そして、必ず生きて帰つて来いと！そう命令してくれれば、俺たちはなにが何でも生きて帰る事を約束する。」

俺の言葉を聞き、アンリエッタははつとした表情を作る。

「わかりました。ならばわたくし、アンリエッタ・ド・トリステインは王女としてルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと、ギーシュ・ド・グラモンの二名に命令します。アルビオンにある手紙を取りに行きなさい。そして、必ず生きてこのトリステインに帰つてきなさい。」

「「はつーかし」」まりました。」「

そつ言つてルイズたちは、アンリエッタから命令を受けた。

「・・・これでよかつたかしら、使い魔さん。」

「上出来だ。ま、安心しろ。一人はちゃんと守つてやるよ。あ、そうだ。後二人連れて行きたい奴がいるんだが、いいか？」

「その方は信用に足る方ですか？」

「そこには保障する。」

「わかりました。あなたを信じましょ。」

「わざわざアントワネットは左手を差し出した。

「わりーな。あんたに忠誠を尽くすのはまだ先だ。忠義を尽くせる  
ようになつたら、喜んであんたのために働くよ。」

俺はわざわざアントワネットへのキスを断つた。

そして、俺たちはアントワネットと別れ、俺はタバサとキュルケの部  
屋を訪ねた。

そして二人に事情を説明し、後発隊としての協力を得たのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1541v/>

---

虚無と紅翼の使い魔

2011年8月5日01時34分発行